

# 兵庫松本遺跡

第2～4・12・17・19次発掘調査報告書

松本地区土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

2005年3月

神戸市教育委員会



第19次調査 Ⅱ区全景（南から）



1. 第19次調査 SB107 (南西から)



2. 第19次調査 SB107遺物出土状況 (北から)



1. 第17次－1調査 SB104炭化材検出状況（東から）



2. 第4次－3調査 SX101遺物出土状況（南東から）





第4次一3調査 S X101出土遺物



1. 第4次一2調査 SR 201出土遺物



2. 第4次一2調査 SR 201出土赤色顔料塗布高坏

# 兵庫松本遺跡

第2～4・12・17・19次発掘調査報告書

松本地区土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

2005年3月

神戸市教育委員会

## 序

京阪神地区は、阪神・淡路大震災により壊滅的な打撃を受け、10年が経過しました。震災以後、神戸市では災害に強い都市づくりを目指し、多くの地域で土地区画整理事業などの震災復興事業を行なってきました。今回報告する兵庫松本遺跡が見つかった松本地区もそのひとつに挙げられます。

調査の結果、縄文時代から鎌倉時代の生活の痕跡が発見され、この場所に集落が営まれていたことが解りました。今年震災から10年目の節目を迎え、この報告が市民の皆さんにわずかながらでも役立てれば幸いです。

最後になりましたが、調査にご協力いただいた方々、諸関係機関に厚く御礼申し上げます。

2005年3月  
神戸市教育委員会  
教育長 小川 雄三



## 例　　言

1. 本報告書は、松本地区土地区画整理事業に伴い神戸市都市計画総局より委託され、神戸市教育委員会・（財）神戸市体育協会が実施した、兵庫松本遺跡第2～4・12・17・19次埋蔵文化財発掘調査の報告書である。

なお、兵庫松本遺跡第2～4・12次調査については、すでに当該年度の『神戸市埋蔵文化財年報』でその概要を報告しているが、本報告書をもって正式報告とする。
2. 本報告書の発掘調査地点は、神戸市兵庫区松本通2丁目に所在する。
3. 発掘調査の次数・期間・面積・担当者については、本文「第1章 第3節 調査の経緯」に詳しい。
4. 本書に掲載した位置図は、国土地理院発行の25,000分の1地形図「神戸市首部」「神戸市南部」及び神戸市発行の2,500分の1地形図「神戸駅」「夢野」「兵庫」「大橋」を使用した。

また、第1章 第1節 図2で使用した明治時代の地形図は、清水靖男編『明治前期・昭和前期 神戸都市地図』柏書房1995を使用した。
5. 本書に用いた方位・座標は、平面直角座標系第V系（旧日本測地系）に属する。また、標高は東京湾中等潮位（T.P.）で表示した。
6. 本書の執筆は、第2章 第2節 1・2及び第2章 第5節を阿部敬生が、第2章 第6節を安田滋・山口英正が、第3章 第1節を山口が、それ以外を中谷正が執筆した。編集は中谷が行なった。

なお、第1章で使用した図3の地形図は、神戸市発行の2,500分の1地形図「神戸駅」「夢野」「兵庫」「大橋」を基に閑野豊が作成したものを使用した。
7. 本書で使用する弥生時代末～古墳時代初頭の時期区分については、時期の明確なものは、庄内式併行期および布留式併行期と明記する。
8. 遺構写真は、各調査担当者が撮影した。遺物写真については独立行政法人 奈良文化財研究所 牛嶋茂氏の指導を得て、西大寺フォト 杉本和樹氏が撮影した。また金属製品のX線写真については、中村大介が撮影した。
9. 本書に係わる遺物は、神戸市埋蔵文化財センターに保管している。
10. 現地調査実施では、神戸市都市計画総局 中部都市整備課及び近隣住民の方々にご協力いただいた。

## 目 次

序

例言

第1章 はじめに	1
第1節 遺跡の立地	1
第2節 周辺の遺跡	3
第3節 調査の経緯	7
第4節 調査組織	10
第2章 調査成果	11
第1節 第2次調査	11
第2節 第3次調査	15
1. 第3次-1調査	15
2. 第3次-2調査	16
3. 第3次-3調査	21
4. 第3次-4調査	22
5. 第3次-5調査	22
第3節 第4次調査	23
1. 第4次-1調査	23
2. 第4次-2調査	27
3. 第4次-3調査	33
4. 第4次-4調査	42
5. 第4次-5調査	43
6. 第4次-6調査	44
7. 第4次-7調査	47
8. 第4次-8調査	50
9. 第4次-9調査	55
第4節 第12次調査	57
1. 第12次-1調査	57
2. 第12次-2調査	65
3. 第12次-3調査	66
3. 第12次-4調査	67
第5節 第17次調査	69
1. 第17次-1調査	69
2. 第17次-2調査	78
第6節 第19次調査	81
第3章 まとめ	99
第1節 兵庫松本遺跡における土器様相	99
第2節 集落の変遷	103
1. 兵庫松本遺跡の集落変遷	103
2. 弥生時代末~古墳時代前期の住居変遷	106

## 挿図目次

はじめに

図1 兵庫松本遺跡位置図	1	図40 調査区平面図	22		
図2 明治時代地形図(1:20,000)	2	第4次-1調査			
図3 兵庫松本遺跡周辺地形図(1:10,000)	2	図41 調査位置図	23		
図4 周辺の主要遺跡(1:25,000)	4	図42 基本土層図	23		
図5 第1次調査位置図	7	図43 第1遺構面平面図	23		
図6 洋生時代末～古墳時代初頭遺構面平面図	7	図44 第3遺構面平面図	24		
図7 調査位置図	8	図45 S X301出土遺物実測図	25		
図8 調査地区割図	9	図46 瓦甕出土状況図・出土遺物実測図	26		
第2次調査					
図9 調査位置図	11	第4次-2調査			
図10 基本土層図	11	図47 調査位置図	27		
図11 調査区平面図	12	図48 基本土層図	27		
図12 S R01出土遺物実測図	13	図49 第1遺構面平面図	27		
図13 S X01平・断面図	14	図50 S A101平・断面図	28		
図14 S X01出土遺物実測図	14	図51 第2遺構面平面図	28		
第3次-1調査					
図15 調査位置図	15	図52 S R201遺物出土状況図	29		
図16 基本土層図	15	図53 S R201出土遺物実測図	30		
図17 包含層出土遺物実測図	15	図54 S D202出土遺物実測図	31		
図18 調査区平面図	15	図55 S D201-202平・断面図	31		
第3次-2調査					
図19 調査位置図	16	図56 遺構面直上層出土遺物実測図	31		
図20 基本土層図	16	図57 S D301出土遺物実測図	31		
図21 遺構面直上層出土遺物実測図	16	図58 第3遺構面平面図	32		
図22 第1遺構面平面図	16	第4次-3調査			
図23 S D01平・断面図	17	図59 調査位置図	33		
図24 S D01出土遺物実測図	17	図60 基本土層図	33		
図25 S X01平・断面図	17	図61 第1遺構面平面図・包含層出土遺物実測図	34		
図26 S X01出土遺物実測図	17	図62 S B101平・断面図	35		
図27 S X02出土遺物実測図	18	図63 S B102平・断面図	35		
図28 河道状落ち込み平・断面図	18	図64 S B102出土遺物実測図	35		
図29 河道状落ち込み出土遺物実測図	19	図65 S B103平・断面図	36		
図30 第2遺構面平面図	19	図66 S B104平・断面図・出土遺物実測図	36		
図31 第2遺構面出土遺物実測図	20	図67 S B105平・断面図	36		
第3次-3調査					
図32 調査位置図	21	図68 S X101遺物出土状況図	37		
図33 基本土層図	21	図69 S X101出土遺物実測図(1)	38		
図34 調査区平面図・出土遺物実測図	21	図70 S X101出土遺物実測図(2)	39		
第3次-4調査					
図35 調査位置図	22	図71 包含層出土遺物実測図	40		
図36 基本土層図	22	図72 第2遺構面平面図	41		
図37 調査区平面図	22	第4次-4調査			
第3次-5調査					
図38 調査位置図	22	図73 調査位置図	42		
図39 基本土層図	22	図74 基本土層図	42		
		図75 調査区平面図	42		
第4次-5調査					
		図76 調査位置図	43		
		図77 基本土層図	43		
		図78 調査区平面図	43		
		図79 S K101出土遺物実測図	44		

<b>第4次－6調査</b>	
図80 調査地位置図	44
図81 基本土層図	44
図82 調査区平面図	45
図83 S B101平・断面図	46
図84 包含層出土遺物実測図	46
<b>第4次－7調査</b>	
図85 調査地位置図	47
図86 基本土層図	47
図87 第1遺構面平面図	47
図88 S B101出土遺物実測図	47
図89 第2遺構面平面図	48
図90 第2遺構面下層出土遺物実測図	48
図91 第3遺構面平面図	49
図92 調査地位置図	50
図93 基本上層図	50
図94 S P143・遺構面直上層出土遺物実測図	50
図95 I区第1遺構面平面図	51
図96 I区第2遺構面平面図	51
図97 S X201遺物出土状況図・出土遺物実測図	52
図98 I区第3遺構面平面図・直上層出土遺物実測図	52
図99 I区第4遺構面平面図・直上層出土遺物実測図	53
図100 S D401遺物出土状況図・出土遺物実測図	54
図101 II区平面図	54
<b>第4次－9調査</b>	
図102 調査地位置図	55
図103 基本土層図	55
図104 第1遺構面平面図	55
図105 第2遺構面平面図	56
図106 第3遺構面平面図	56
<b>第12次－1調査</b>	
図107 調査地位置図	57
図108 基本土層図	57
図109 第1遺構面平面図	57
図110 S B101平・断面図	58
図111 S B102平・断面図	58
図112 S B103平・断面図	58
図113 S B103出土遺物実測図	59
図114 S B104平・断面図	59
図115 第2遺構面平面図	60
図116 第3遺構面平面図	61
図117 第4遺構面平面図	61
図118 S K401平・断面図・出土遺物実測図	62
図119 第5遺構面平面図	63
図120 S D502遺物出土状況図・出土遺物実測図	63
図121 包含層出土遺物実測図	64
<b>第12次－2調査</b>	
図122 調査地位置図	65
図123 基本土層図	65
図124 調査区平面図	65
図125 包含層出土遺物実測図	65
<b>第12次－3調査</b>	
図126 調査地位置図	66
図127 基本土層図	66
図128 第1遺構面平面図	66
図129 第2遺構面平面図	67
図130 S R201出土遺物実測図	67
<b>第12次－4調査</b>	
図131 調査地位置図	67
図132 基本土層図	67
図133 調査区平面図	68
図134 S R101出土遺物実測図	68
<b>第17次－1調査</b>	
図135 調査地位置図	69
図136 基本土層図	69
図137 包含層出土遺物実測図	70
図138 第1遺構面平面図	71
図140 S B104平・断面図	72
図141 S B104中央土坑平・断面図	72
図142 S B104出土遺物実測図	73
図143 第2遺構面平面図	74
図144 第3遺構面平面図	75
図145 第4遺構面平面図	76
図146 包含層出土遺物実測図	76
図147 S D06出土遺物実測図	77
<b>第17次－2調査</b>	
図148 調査地位置図	78
図149 基本土層図	78
図150 第1遺構面平面図	78
図151 第1遺構面出土遺物実測図	79
図152 第2遺構面平面図	80
図153 第2遺構面出土遺物実測図	80
<b>第19次調査</b>	
図154 調査地位置図	81
図155 基本土層図	81
図156 I区第1遺構面平面図	82
図157 S B101平・断面図	82
図158 第2遺構面平面図	83
図159 S B102平・断面図	84
図160 S B104平・断面図	84
図161 S B106平・断面図	85
図162 S B107平・断面図	85
図163 S B108平・断面図	86
図164 S K201平・断面図	86
図165 S B109平・断面図	86
図166 S B110平・断面図	87

図167 S B112平・断面図	87
図168 S B114平・断面図	88
図169 S B114中央土坑平・断面図	88
図170 第3遺構面平面図	89
図171 包含層・S K103・S B101・102・104・107(1) 出土遺物実測図	93
図172 S B107出土遺物実測図(2)	94
図173 S B107出土遺物実測図(3)	95
図174 S B107出土遺物実測図(4)	96
図175 S B108・109・110・112・114出土遺物実測図	97
図176 S B103平・断面図	98
図177 S B111平・断面図	98
図178 S B113平・断面図	98
図179 兵庫松本遺跡の土器様相(1)	100
図180 兵庫松本遺跡の土器様相(2)	101
図181 弥生時代前期遺構分布図	104
図182 弥生時代中期～後期遺構分布図	104
図183 弥生時代末～古墳時代初頭遺構分布図	105
図184 平安時代～鎌倉時代遺構分布図	105
図185 弥生時代末～古墳時代初頭遺構変遷図	107

## 表 目 次

表1 調査経過表(区画整理分)	8
表2 調査組織表	10
表3 第12次～1調査遺構出土石器一覧	64
表4 弥生時代末～古墳時代初頭の遺構変遷	107

## 巻頭写真図版目次

巻頭写真図版 1 II区全景(南から)	
19次	
巻頭写真図版 2 1 S B107(南西から)	
19次	2 S B107遺物出土状況(北から)
巻頭写真図版 3 1 S B104炭化材検出状況(東から)	
1:19次	2 S X101遺物出土状況(南東から)
2:4次-3	
巻頭写真図版 4 S B107出土遺物	
19次	
巻頭写真図版 5 S X101出土遺物	
4次-3	
巻頭写真図版 6 1 S R201出土遺物	
4次-2	2 S R201出土赤色顔料液有高坏

## 挿図写真目次

挿図写真 1 S X01検出状況(南から)	7
1次	
挿図写真 2 S X01遺物出土状況(南から)	7
1次	
挿図写真 3 説明会開催状況	9
19次	
挿図写真 4 S X01出土遺物	14
2次-1・2	
挿図写真 5 第1遺構面(北から)	32
4次-2	
挿図写真 6 S R301検出状況(東から)	32
4次-2	
挿図写真 7 調査状況	33
4次-3	
挿図写真 8 第2遺構面I区北半全景(北西から)	41
4次-3	
挿図写真 9 調査状況	46
4次-6	
挿図写真10 第2遺構面全景(南西から)	49
4次-7	
挿図写真11 第3遺構面東部全景(北東から)	49
4次-7	
挿図写真12 II区全景(西から)	54
4次-8	
挿図写真13 S P301出土遺物	56
4次-9	
挿図写真14 第2遺構面(南東から)	60
12次-1	
挿図写真15 S D502遺物出土状況(南から)	63
12次-1	
挿図写真16 S R101掘削作業風景	68
12次-4	
挿図写真17 S R101(西から)	68
12次-4	
挿図写真18 第1遺構面炭化材検出状況(南東から)	71
17次-1	

挿図写真19	S B104中央土坑炭層検出状況（北西から）	72	挿図写真23	第1遺構面全景（北西から）	79
17次	1		17次	2	
挿図写真20	第2遺構面全景（南西から）	74	挿図写真24	第2遺構面全景（北西から）	80
17次	1		17次	2	
挿図写真21	第3遺構面東部全景（北東から）	75	挿図写真25	S B114中央土坑（西から）	88
17次	1		19次		
挿図写真22	第4遺構面全景（南西から）	75	挿図写真26	現在の松本通2丁目	92
17次	1				

## 写真図版目次

写真図版1	1	I区北部（北東から）	写真図版12	1	第5遺構面北半（南東から）
1~3:2次	2	I区全景（南東から）	12次	2	第5遺構面南半（北西から）
4:2次	3	II区全景（南東から）	写真図版13	1	調査地全景（南西から）
	4	調査地全景（北西から）	1:12次	2	調査地全景（北東から）
写真図版2	1	北半部全景（北東から）	2:12次	3	調査地全景（北西から）
1~2:3次	2	南半部全景（北東から）	3:12次	4	
3~4:3次	3	第1遺構面全景（南東から）	写真図版14	1	第1遺構面全景（北東から）
	4	第2遺構面全景（南東から）	17次	2	
写真図版3	1	調査地全景（北東から）	写真図版15	1	I区第1遺構面全景（南から）
1:3次	2	調査地全景（北西から）	19次	2	I区第1遺構面全景（北西から）
2:3次	3	調査地全景（北西から）	3	I区第2遺構面全景（北西から）	
3:3次	5		写真図版16	1	S B101上面（南西から）
写真図版4	1	第3遺構面全景（北から）	19次	2	S B101下面・S B102（南から）
1:4次	2	第2遺構面全景（南から）	写真図版17	1	II区全景（北西から）
2:4次	2		19次	2	S B103（南から）
写真図版5	1	I区第1遺構面全景（北西から）	写真図版18	1	S B105（北東から）
4次	2	S B101（北から）	19次	2	S B106（南から）
写真図版6	1	S B102（北西から）	写真図版19	1	S B107遺物出土状況（東から）
4次	2	II区西半第1遺構面全景（北東から）	19次	2	S B107床面検出状況（南西から）
写真図版7	1	調査地全景（北西から）	写真図版20	1	S B108（北東から）
1:4次	2	調査地全景（南東から）	19次	2	S B109・110・112（南から）
2:4次	5		写真図版21	1	S B109板石・高壙出土状況（西から）
写真図版8	1	調査地全景（南東から）	19次	2	S B114遺物出土状況（北から）
1:4次	2	調査地全景（南西から）	写真図版22	1	II区第3遺構面全景（南から）
2:4次	7		19次	2	S D201（北から）
写真図版9	1	I区第1遺構面全景（北東から）	写真図版23	S R01出土遺物(1)	
4次	2	I区第2遺構面全景（北東から）	2次	1~2	
	3	I区第4遺構面全景（北東から）	写真図版24	S R01出土遺物(2)	
	4	S D401遺物出土状況（西から）	2次	1~2	
写真図版10	1	第1遺構面全景（北西から）	写真図版25	S X01出土遺物	
4次	2	第2遺構面全景（北西から）	2次	2	
写真図版11	1	第1遺構面北半（北西から）	写真図版26	1	遺構面上面・S D01・S X01・02
19次	2	第1遺構面南半（北西から）	3次	2	出土遺物
				2	河底状落ち込み出土遺物(1)

写真図版27	1 第2遺構面出土遺物(1) 1~4次~2 2 河道状落ち込み出土遺物(2) 5~3次~3 3 第2遺構面出土遺物(2) 4 第2遺構面出土遺物(3) 5 遺構面直上出土遺物	写真図版39 包含層出土遺物 17次~1
写真図版28	S X301出土遺物(1) 4次~1	写真図版40 S B104出土遺物 17次~1 2 包含層出土遺物(1)
写真図版29	1 S X301出土遺物(2) 1~2~4次~1 2 埋甕出土遺物 3~4次~2 3 S R201出土遺物(1)	写真図版41 S D06出土遺物(1) 2~17次~2
写真図版30	1 S R201出土遺物(2) 4次~2 2 弥生時代前期~中期 出土遺物	写真図版42 1 包含層出土遺物(2) 1~17次~1 2 出土遺物
写真図版31	S X101出土遺物(1) 4次~3	写真図版43 I区包含層出土遺物 18次 2 S K103出土遺物 3 S B101出土遺物 4 S B102出土遺物 5 S B104出土遺物
写真図版32	S X101出土遺物(2) 4次~3	写真図版44 S B107出土遺物(1) 19次
写真図版33	S X101出土遺物(3) 4次~3	写真図版45 S B107出土遺物(2) 19次
写真図版34	1 弥生時代前期包含層出土遺物 1~2~4次~3 2 S B104出土遺物 3~4次~4 3 出土遺物 4~4次~5 4 S K101出土遺物	写真図版46 S B107出土遺物(3) 19次
写真図版35	1 遺物包含層出土遺物 1~4次~6 2 S B101出土遺物 2~3~4次~7 3 弥生時代中期遺物包含層出土遺物	写真図版47 S B107出土遺物(4) 19次
写真図版36	1 S P143出土遺物 4次~8 2 S X201出土遺物 3 S D401出土遺物 4 弥生時代中期包含層出土遺物 5 弥生時代前期包含層出土遺物	写真図版48 S B107出土遺物(5) 19次
写真図版37	1 S B103出土遺物 12次~1 2 弥生時代前期包含層出土遺物 3 S K401出土遺物 4 S D502出土遺物	写真図版49 1 S B108出土遺物 19次 2 S B109出土遺物 3 S B110出土遺物
写真図版38	1 遺構出土石器 1~12次~1 2 弥生時代前期包含層出土遺物 2~12次~2 3 包含層、自然河道出土遺物 3~12次~2~4	写真図版50 S B114出土遺物(1) 19次 写真図版51 S B114出土遺物(2) 19次 写真図版52 S B114出土遺物(3) 19次



# 第1章 はじめに

## 第1節 遺跡の立地

今回報告する兵庫松本遺跡は、神戸市のいわゆる六甲山南麓地域の西部、神戸市兵庫区松本通2丁目に位置する。六甲山南麓地域は六甲山系を起源とする多くの河川が存在し、東灘区の住吉川、灘区の都賀川、中央区の生田川、須磨区の妙法寺川などが挙げられる。そして兵庫区では現在の東山商店街から湊川公園の付近を流れていた旧湊川がそれにあたる。旧湊川は上流の石井川・天王谷川が現在の雪御所町付近で合流し、ちょうど兵庫松本遺跡付近で流れを南東に変え、そこからまっすぐに海まで流れていた(図2)。これらの河川により下流の平野部には多くの土砂が運び込まれ、扇状地や自然堤防帯などの地形を作り上げた。

図3は神戸市発行1:2,500地形図に記された道路上の標高や一部描かれている等高線から、兵庫松本遺跡周辺に等高線を復元したものである。これを見ると兵庫松本遺跡付近は旧湊川により形成された自然堤防上の9~12m付近に占地していることがわかる。遺跡の北部は、現在の遺跡範囲の北端である大井町1丁目あたりから急激に高度が上がり、段丘を形成する。段丘上には弥生時代中期の遺跡である東山遺跡が立地した。旧湊川より東では大倉山丘陵から伸びる舌状の地形が、また兵庫松本遺跡の西部では、ちょうど上沢通4~6丁目付近に大きな谷状の地形を挟み上沢通8丁目付近で8~13m前後の等高線がまわる台地状の地形

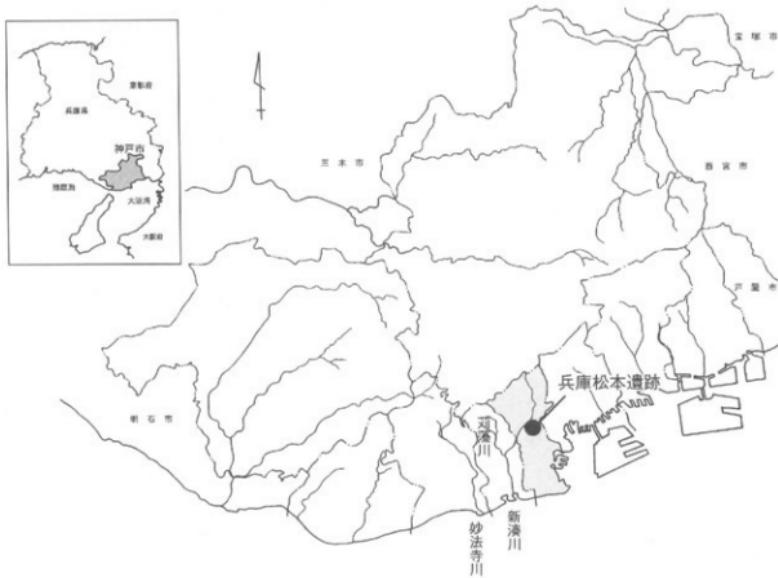


図1 兵庫松本遺跡位置図

が復元された。前者には楠・荒田町遺跡が、後者には上沢遺跡が占地する。いずれの遺跡もその安定した地形上に長期間集落を形成した。

遺跡の東を流れる旧湊川は六甲山系から大量の土砂を下流の平野部に供給し、天井川化したが、旧湊川よりも古湊川という河川が想定されており<sup>(1)</sup>、旧湊川河口の土砂の堆積量から流路が変わったのは約2,000年前と仮定されている。先述の上沢通6丁目付近の谷状の地形や、兵庫松本遺跡で検出された自然河道などがその古湊川を示すものである可能性がある。兵庫松本遺跡は古湊川・旧湊川の影響を受け集落を営んできたと考えられる。



図2 明治時代地形図（1:20,000）

註 (1) 新湊川流域変遷史編集委員会「歴史が語る湊川

新湊川流域変遷史」 神戸新聞総合出版センター 2002



図3 兵庫松本遺跡周辺地形図(1:10,000)

## 第2節 周辺の遺跡

兵庫松本遺跡は、先述のとおり縄文時代晩期から中世までの遺跡である。

### 縄文時代

兵庫松本遺跡に人が住み始めた縄文時代晩期には、神戸市内にはいくつかの集落が営まれていた。主な遺跡として灘区の篠原遺跡、中央区の宇治川南遺跡などで住居や土器棺などが発見された。さらに晩期末に使用されていた突堤土器は、近年の調査により神戸市内各地で見つかっており、当遺跡の周辺では、兵庫区の大間遺跡、楠・荒田町遺跡、上沢遺跡などで確認されている。しかし、大半の遺跡では住居跡などがあまり発見されていないため、集落の様子は依然不明な状態である。

### 弥生時代

先述の縄文時代晩期末に存在していた遺跡が継続して営まれる。周辺には前期の環濠集落として有名な大開遺跡、多数の貯蔵穴が発見された楠・荒田町遺跡、小区画水田が発見された須磨区の戎町遺跡などが存在していた。兵庫松本遺跡でも前期後半頃には溝や土坑などの遺構とともに比較的大量の土器が出土しており、一時期、集落を形成していたようである。中期になると、兵庫松本遺跡では一旦集落が縮小するが、楠・荒田町遺跡、上沢遺跡、戎町遺跡などはさらに発展し地域の中心的な集落に発展していく。また東山遺跡のように段丘上に一時的に集落を形成するものも存在した。兵庫松本遺跡が最も発展した後期～末期になると、集落数が増加する。祇園遺跡、上沢遺跡、長田神社境内遺跡、御蔵遺跡、大手町遺跡などである。長田神社境内遺跡では手焙形土器・小型青銅鏡・土偶、大手町遺跡では手焙形土器や絵画土器などの特殊な遺物が出土した。その一方で、楠・荒田町遺跡や戎町遺跡のような中期の大規模な遺跡では住居などが急激に減少し、集落が縮小した。

### 古墳時代

古墳時代初頭は、弥生時代末期の集落が引き続いている。この時期に築造されたと考えられる得能山古墳・会下山二本松古墳・夢野丸山古墳などは、これらの集落の首長の墓と考えられている。その後、中期～後期には、兵庫松本遺跡では明確な遺構は発見されておらず、集落が縮小、もしくは解体したようである。一方、長田区松野遺跡では集落に伴い、豪族居館と考えられる柵列に囲まれた建物群が発見された。神楽遺跡では韓式系土器が見つかっており、渡来系氏族に係わる集落が一時期営まれてものと考えられている。また、上沢遺跡、松野遺跡では、大量の勾玉や白玉などの石製品が出土しており、祭祀に関係する遺跡であることが解っている。

### 奈良時代以降

上沢遺跡や御蔵遺跡などで奈良～平安時代の集落が、上沢遺跡や二葉町遺跡、大橋町遺跡などで、中世の集落が営まれていたことが解っている。御蔵遺跡では大型の掘立柱建物群とともに皇朝十二銭や、三彩・綠釉陶器などが、上沢遺跡では平城京などで確認されている井籠組の井戸や銅鏡などが発見され、官衙的な性格を持つ遺跡であることが判明した。兵庫松本遺跡では、平安時代末の簡素な掘立柱建物や柵列が発見されたが、周辺の集落ほどの発展はなかった。その後、祇園遺跡や兵庫津遺跡が盛興する一方で、兵庫松本遺跡は、第1次調査、第4次～1調査で鎌倉時代～室町時代頃の耕作痕と思われる溝が多数発見されており、その頃には完全に耕作地になっていたようである。



図4 周辺の主要遺跡(1:25,000)

## (参考文献)

## 篠原遺跡

- 家根祥多「篠原式の提唱」『縄紋晩期前菜－中葉の広域編年』北海道大学文学部 1994  
 佐伯二郎「篠原遺跡第17次調査」『平成10年度神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会 2001

## 雲井遺跡

- 丹治康明編「雲井遺跡第1次調査発掘調査概報」神戸市教育委員会 1991  
 西岡巧次・福島孝行編「雲井遺跡（第8次調査）」神戸市教育委員会 1998

## 宇治川南遺跡

- 丹治康明「宇治川南遺跡」『昭和58年度神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会 1986

## 楠・荒田町遺跡

- 丸山潔・丹治康明編『楠・荒田町遺跡発掘調査報告書』神戸市教育委員会 1980  
 丸山潔編『楠・荒田町遺跡Ⅲ』神戸市教育委員会 1990

## 祇園遺跡

- 宮山直人編「祇園遺跡第5次調査発掘調査報告書」神戸市教育委員会 2000

## 大開遺跡

- 前田佳久編「大開遺跡発掘調査報告書」神戸市教育委員会 1993  
 鎌田勉・友岡信彦「大開遺跡 第7次調査」『平成8年度神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会 1999  
 関野豊「大開遺跡第9次調査」・須藤宏「大開遺跡第10次調査」『平成13年度神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会 2004

## 東山遺跡

- 新修神戸市史編集委員会「東山遺跡」『新修神戸市史歴史編Ⅰ自然・考古』神戸市 1989  
 小林行雄「神戸市東山遺跡弥生式土器研究」『考古学』第4巻第4号 1933

## 上沢遺跡

- 口野博史・阿部敬生編『上沢遺跡発掘調査報告書』神戸市教育委員会 1995  
 斎木巖・三輪晃三「上沢遺跡 第8次調査」・池田毅・井尻格「上沢遺跡 第9次調査」・斎木巖・奈良康正「上沢遺跡 第16次調査」『平成9年度神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会 2000  
 橋詰清孝・石島三和・中谷正「上沢遺跡 第32次-1・2調査」・口野博史・関野豊「上沢遺跡 第33次調査」『平成11年度神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会 2002  
 谷正俊編『上沢遺跡Ⅲ 第38・46・50次調査』神戸市教育委員会 2004

## 得能山古墳・会下山二本松古墳・夢野丸山古墳

- 宮谷美宣「古墳時代 前方後円墳の成立と発展」『新修神戸市史歴史編Ⅰ自然・考古』神戸市 1989

#### 長田神社境内遺跡

黒田恭正編『長田神社境内遺跡発掘調査概報』神戸市教育委員会 1990

藤井太郎「長田神社境内遺跡 第10次調査」『平成9年度神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会 2000

#### 五番町遺跡

松林宏典「五番町遺跡 第5次調査」『平成6年度神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会 1997

阿部敬生「五番町遺跡 第7次調査」『平成11年度神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会 2002

#### 御藏遺跡

山田清朝・山上雅弘編『神戸市 御藏遺跡 第8・9・10次調査』神戸市教育委員会 2000

安田滋・富山直人・石島三和編『御藏遺跡 第4・6・14・32次発掘調査報告書』神戸市教育委員会 2001

安田滋編『御藏遺跡 第17・38次調査発掘調査報告書』神戸市教育委員会 2001

富山直人・川上厚志編『御藏遺跡 第5・7・11~13・18~22・24・28・29・31・33~36・39・41・43次発掘調査報告書』神戸市教育委員会 2003

谷正俊編『御藏遺跡V 第26・37・45・51次調査』神戸市教育委員会 2003

#### 戎町遺跡

山本雅和編『戎町遺跡第1次発掘調査概報』神戸市教育委員会 1989

山本雅和・「戎町遺跡 第19次調査」『平成7年度神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会 1998

山口英正「戎町遺跡 第15次調査」『平成8年度神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会 1999

#### 松野遺跡

千種浩編『松野遺跡発掘調査概報』神戸市教育委員会 1983

口野博史福『松野遺跡発掘調査報告書 第3~7次調査』神戸市教育委員会 2001

閑野豊福『松野遺跡第11~23・25・26・29~31次 水笠遺跡第2・3・5~15・17~21次発掘調査報告書』神戸市教育委員会 2002

#### 二葉町遺跡

川上厚志編『二葉町遺跡発掘調査報告書 第3・5・7・8・9・12次調査』神戸市教育委員会 2001

#### 大橋町遺跡

平成16年度神戸市教育委員会調査。平安時代末から鎌倉時代初頭の掘立柱建物群を検出した。

#### 兵庫津遺跡

内藤俊哉「兵庫津遺跡第15次調査」『平成10年度神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会 2001

黒田恭正「兵庫津遺跡第20次調査」『平成11年度神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会 2002

### 第3節 調査の経緯

遺跡の発見

兵庫松本遺跡は、平成10年度に市営住宅松本東住宅の建設に先立って試掘調査を行い、その存在が確認された。その際、中世及び古墳時代の包含層が確認された。北接する東山遺跡とは、段丘崖により明確に区別されるため、別遺跡と考えられ、当地の地名から兵庫松本遺跡と命名された。市営住宅の調査では、鎌倉時代頃の畠の堀溝、古墳時代初頭の掘立柱建物・堅穴住居・土器溜まり・流路、弥生時代前期の流路などが検出された。特に古墳時代初頭は、住居跡や、祭祀を行なったような跡も検出されており、兵庫松本遺跡の最盛期といえることが判明した。この調査をもって第1次調査となる。

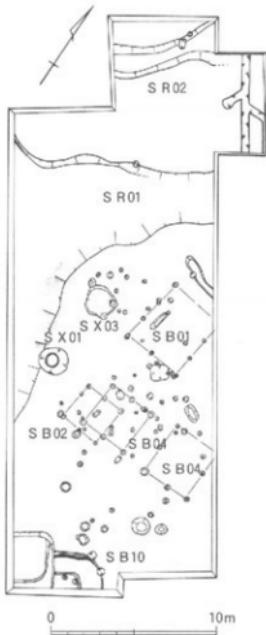


図6 弥生時代末～古墳時代初頭造構面平面図



図5 第1次調査地位置図



### 挿図写真1 SX01検出状況（南から）



挿図写真2 S X 01遺物出土状況(南から)

### 土地区画整理事業に伴う調査

市営住宅に伴う発掘調査の翌年、平成11年度からは、松本通2丁目で都市計画局事業の土地区画整理事業の計画に伴い、区画街路及びそれにつづる工事箇所を対象として調査を行なった。以降、平成16年度に至るまで調査可能な部分について順次調査を実施し、以下の表にその概略を記した（表1）。

また、普及啓発活動の一環として、平成14年度第12次～4調査で9月9日に、平成16年度第19次調査で7月10日に現地説明会を実施した。いずれの説明会でも近隣住民の方々を中心に200名近く参加者を得た。

調査で出土した遺物は、順次神戸市埋蔵文化財センターで洗浄・接合・復元などの整理作業を行い、平成16年度に図面作成など報告書作成作業を行なった。



図7 調査地位位置図

次数	年度	開始日	終了日	面積(m <sup>2</sup> )	担当者	主な内容
2-1	平成11	2000/1/31	2000/2/14	116	西岡誠	弥生時代末～古墳時代初頭の流路
2-2	平成11	2000/2/7	2000/2/14	69	西岡誠	弥生時代末～古墳時代初頭の流路・土坑
3-1	平成12	2000/8/2	2000/8/4	50	阿部敬	弥生時代前期の落ち込み
3-2	平成12	2000/10/3	2000/10/19	140	阿部敬	溝状の落ち込み
3-3	平成12	2001/2/5	2001/2/9	45	阿部功・中谷	包含層
3-4	平成12	2001/2/5	2001/2/9	15	阿部功・中谷	近世の流路
3-5	平成12	2001/3/9	2001/3/15	70	口野・浅谷	近世の耕作痕
4-1	平成13	2001/5/16	2001/7/3	180	佐伯・中谷	弥生時代前期の落ち込み・柱穴
4-2	平成13	2001/6/18	2001/7/5	60	山本・中谷	弥生時代前期～古墳時代初頭の流路
4-3	平成13	2001/7/11	2001/11/1	180	中谷	弥生時代末～古墳時代初頭の住居
4-4	平成13	2001/10/23	2001/11/27	220	内藤	縄文時代晚期・弥生時代前期の流路
4-5	平成13	2001/11/5	2001/11/14	15	中谷	弥生時代末～古墳時代初頭の土坑・柱穴
4-6	平成13	2002/1/7	2001/1/17	40	中谷	弥生時代末～古墳時代初頭の櫛立柱建物
4-7	平成13	2002/1/28	2002/2/18	60	中谷	平安時代末の構造？・弥生時代前期の土坑
4-8	平成13	2002/2/12	2002/3/8	120	佐伯	弥生時代中期・弥生時代末～古墳時代初頭の溝
4-9	平成13	2002/2/20	2002/3/13	50	山口	平安時代後期・弥生時代前期の構・土坑
12-1	平成14	2002/6/7	2002/8/7	130	山口・中谷	弥生時代末～古墳時代初頭の住居
12-2	平成14	2002/7/29	2002/8/6	35	中谷	弥生時代前期のビット
12-3	平成14	2002/8/6	2002/8/19	20	中谷	縄文時代晚期・弥生時代前期の流路
12-4	平成14	2002/8/19	2002/9/13	110	中谷	縄文時代晚期・弥生時代前期の流路
17-1	平成15	2003/5/6	2003/6/27	56	阿部敬	弥生時代末～古墳時代初頭の住居
17-2	平成15	2003/8/19	2003/9/10	70	阿部敬	弥生時代前期のビット
19	平成16	2004/7/7	2004/9/3	220	安田・山口	弥生時代末～古墳時代初頭の住居

表1 調査経過表（区画整理分）



図8 調査地地区割図



挿図写真3 説明会開催状況

## 第4節 調査組織

下記の体制で平成11年度から平成16年度まで調査を実施した。

神戸市文化財保護審議会委員 史跡・考古担当	橋上重光	前神戸女子短期大学教授						
	工藤普通	ユネスコ・アジア文化センター文化財保護協力事務所研修部長(平成11~14年度)						
	大阪府立狛山池博物館館長(平成13~16年度)							
和田昭吾	立命館大学文学部教授							
教育委員会事務局	平成11年度	平成12年度	平成13年度	平成14年度	平成15年度	平成16年度		
教育長	輪本昌男	木村良一	木村良一	西川和機	西川和機	小川雄三		
社会教育部長	水田裕次	矢野栄一郎	岩野法夫	岩野法夫	高橋英比古	高橋英比古		
参事(文化財課長事務取扱)		—			桑原泰豊	桑原泰豊		
文化財課長	大勝俊一	大勝俊一	桑原泰豊	桑原泰豊	—	—		
社会教育部主幹		—	宮本郁雄 (1月~)	宮本郁雄	—	—		
社会教育部主幹 (埋蔵文化財センター所長事務取扱)		—			宮本郁雄	宮本郁雄		
社会教育部主幹 (埋蔵文化財指導係長事務取扱)	渡辺伸行	渡辺伸行	渡辺伸行	渡辺伸行	渡辺伸行	渡辺伸行		
埋蔵文化財係長	渡辺伸行	—						
埋蔵文化財調査係長		丹治康明	丹治康明	丹治康明	丹治康明	丹治康明		
文化財課主査	丹治康明	宮本郁雄 (~12月)	丸山潔	丸山潔	丸山潔	丸山潔		
	丸山潔	丸山潔	菅本宏明	菅本宏明	千種浩	千種浩		
	菅本宏明	菅本宏明	千種浩	千種浩	菅本宏明	菅本宏明		
事務担当学芸員	東喜代秀・井尻格	山口英正	斎木巣	内藤俊哉	内藤俊哉	東喜代秀		
調査担当学芸員	—	阿部敬生・中谷正			—	山口英正		
整理担当学芸員	平田朋子	谷正俊	黒田恭正	闇野農		谷正俊	山口英正	中谷正
保存担当学芸員	千種浩	千種浩・中村大介	中村大介	中村大介	中村大介	中村大介	中村大介	
(財)神戸市体育協会								
会長	笠山幸俊	笠山幸俊	笠山幸俊	矢田立郎	矢田立郎	矢田立郎		
副会長(専務理事事務取扱)	田村篤雄	輪本昌男	輪本昌男	矢野栄一郎	矢野栄一郎	矢野栄一郎		
専務理事	中野洋二 静岡圭一	静岡圭一	梶井昭武	梶井昭武	野浪建作	野浪建作		
義務課長	前田豊晴	前田豊晴	谷川博志	谷川博志	谷川博志	横関勇		
義務課主幹	中西光男 奥田哲通		—					
義務課主査	丹治康明	—			—			
事業係長	—	瀬田吉則						
事業係主査(文化財課主査兼務)	—	丸山潔・菅本宏明	丸山潔 菅本宏明	丸山潔 菅本宏明	菅本宏明	菅本宏明		
事務担当学芸員	斎木巣	斎木巣	川上厚志	池田毅	中谷正	—		
調査担当学芸員	西岡誠司	口野博史 浅谷誠吾 阿部功	山本雅和 佐伯二郎 山口英正 内藤俊哉 中谷正	山口英正 中谷正	阿部敬生	安田誠		
整理担当学芸員					阿部敬生			

表2 調査組織表

## 第2章 調査成果

### 第1節 第2次調査

#### 第2次-1・2調査

調査地は調査対象地の中央部北寄りに位置する。擁壁工事による工事影響部分（I区）、松本28-2号線道路部分（II区）を第2次-1調査、宅地造成による工事影響部分を第2次-2調査として調査を実施した。

なお、遺構の連続性を考慮して、第2次調査に限り、両調査を一括して報告する。

#### 基本層序（図10）

上層から、現代盛土、旧地表、暗灰色砂質土（旧耕作土）、暗灰褐色粘質土（旧床上）、暗灰褐色シルト、黄褐色粘質土、暗茶褐色粘質土、暗灰褐色粘質土となり、現地表面下0.6~1.0m（標高22.0~22.3m）で包含層である暗茶褐色粘質土に至る。その下層の淡灰褐色細砂及び淡灰褐色中砂上面が遺構面となっている。

淡灰褐色細砂及び淡灰褐色中砂上面は、第1次調査時の第2遺構面に相当しており、第1次調査で検出された第1遺構面については、近現代の建物等の搅乱による削平のため、遺構面の遺存状況が悪く、遺構も確認されなかった。また、弥生時代前期の遺構面については調査区の幅が狭く危険が伴うため、現地表面下2.5mまで掘削し調査を行うのみに止まった。

#### 遺構検出面（図11）

第2次-1調査I区では調査区北部で弥生時代後期～古墳時代前期頃の落ち込み1ヶ所、同II区では調査区のほぼ全体で弥生時代後期～古墳時代前期頃の自然流路、第2次-2調査でも第2次-1調査I区と同様に調査区のほぼ全域で弥生時代後期～古墳時代前期頃の自然流路および、円形土坑を検出した。

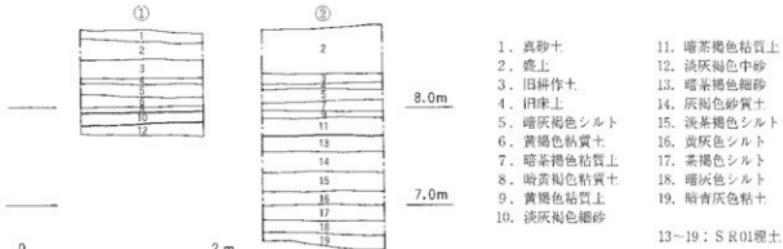


図10 基本土層図

#### 落ち込み

第2次-1 I区調査北部の調査区が屈曲する部分で検出された。遺構が調査区外に延びているため全体の規模は不明であるが、現状で東西2.4m以上、南北2.4m以上、深さ20~30cmを測る。埋土からは弥生時代後期～古墳時代前期頃の上器が少量出土した。

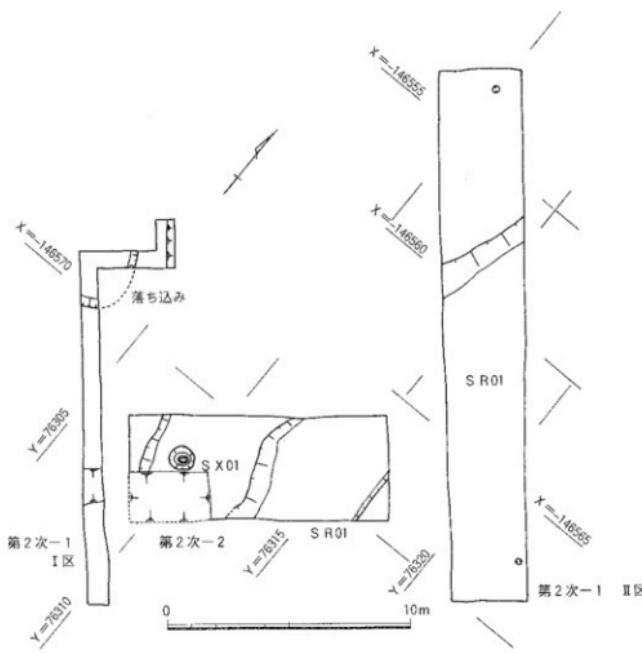


図11 調査区平面図

**SR01**

第2次-1調査II区で流路の北肩部を検出した。調査区内で南側の肩部を検出していなかったため、全体の規模は不明である。調査区内での規模は、幅約15.0~16.5m、深さ0.4~1.2mを測る。また第2次-2調査では、幅9.5~10.5m、深さ40~60cm以上を測る。

このSR01は、第1次調査検出のSR01と同一の流路と考えられ、これまでの成果により、SR01は、全長35.0m以上、幅8.0~15.0m以上、深さ0.5~1.0m以上と推定される。

調査区の幅が狭く、第1次調査で確認した弥生時代前期包含層の深度までは掘削を実施しなかった。

**出土遺物(図12)**

第2次-1調査II区から第2次-2調査北肩部周辺より、弥生時代末~古墳時代前期の土器が多量に出土した。器種は広口壺・直口壺・二重口縁壺・甕・高杯・鉢である。

1・2は加飾の二重口縁壺である。1は口縁中位で屈曲をもち大きく聞く。加飾傾向が強く、口縁部外面に波状文・円形浮文・四線文を施す。2は口縁部が短く直線的に立ち上がる。口縁端部には刻目、口縁外面上には波状文を施す。器壁は比較的厚い。4は直口壺で、口縁は外方にまっすぐに広がり、体部はほぼ球形である。底部は欠損しているが、その器形からおそらく丸底であると考えられる。5~7は小型、8・9は中型の甕である。7は丸底の小型甕で、8は黒雲母・角閃石などを含む生駒西麓の胎土をもつ甕である。口

縁端部をつまみ上げ、外面を細かいハケで、内面にヘラケズリを施す典型的な布留式壺である。10は高壺の壺部で、口縁部は体部から大きく直線的に外方に広がる。11は鉢で、やや内湾しながら立ち上がり、外面に明瞭にタキ痕跡を残す。

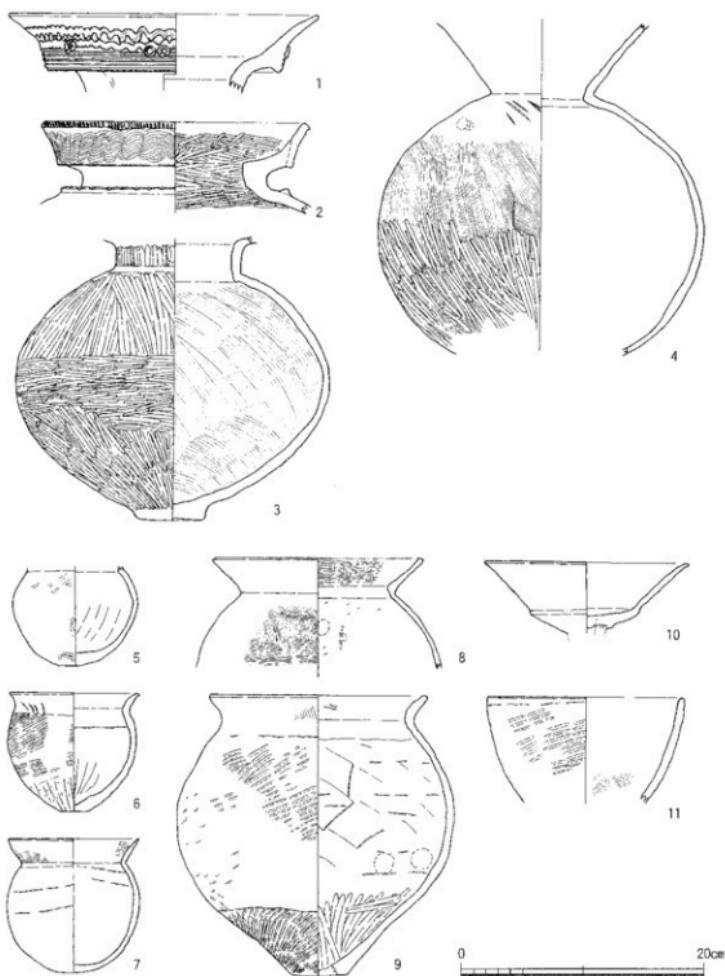


図12 SR01出土遺物実測図

S X01 (図13)

第2次-2調査西部で検出された長径1.0m、短径90cm、深さ50cmの楕円形の土坑である。

弥生時代末～古墳時代初期の土器が出土した。

出土遺物 (図14)

器種は壺・甕・高杯である。17は二重口縁甕の口縁部で、外面には波状文・円形浮文・撚描直線文と断面三角形の貼付突帯を、口縁内面にも波状文を施し加飾傾向が強い。内外面をハケで仕上げる。10～16は甕で、ほぼ中型品で大きさがそろっている。12は外面をハケ、13・16は板ナデで仕上げる。16は口縁端部が大きく外方に広がり端部に面をもつ。体部は

横方向のタタキの後ナデにより仕上げる。18は高杯で口縁部が大きく開き、口縁部高が体部高を大きく凌駕する。中実の脚部がつく。

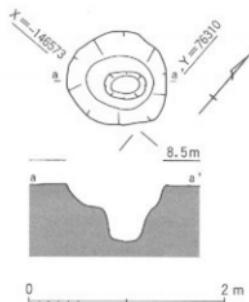


図13 S X01平・断面図

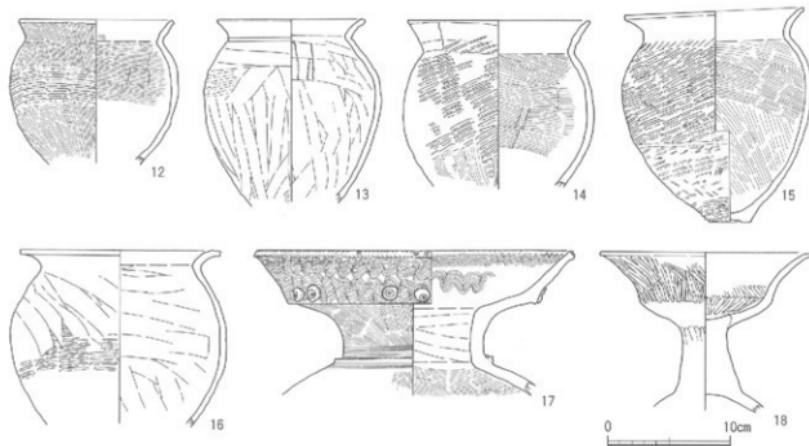


図14 S X01出土遺物実測図



挿図写真4 S X01出土遺物

## 第2節 第3次調査

### 1. 第3次-1調査

調査地は調査対象地の北西部に位置する。区画整理地内の擁壁部分について実施した。現標高は、約9.6mを測る。

#### 基本層序（図16）

上層より盛土・旧耕作上の堆積がみられ、現地表面下約90cmで包含層である暗灰褐色シルト（層厚約10cm）上面を検出した。包含層から出土する土器は少量で小片が多く、また磨耗も顕著である。弥生時代後期～古墳時代前期のものを主体とし、弥生時代前期頃の土器片やサヌカイト片も少量含む。包含層の下層で検出した淡褐色砂質シルト上面（標高は、北部で8.6m、南部で8.4m）が遺構面で、南部で溝状の落ち込みを1基検出した。

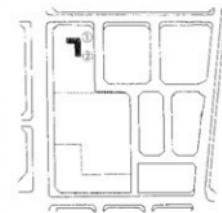
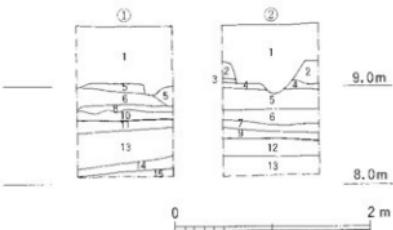


図15 調査地位置図

1	底上・塊混
2	灰色細砂混じりシルト
3	灰色シルト質細砂
4	淡灰色小粒混じり細砂
5	灰色～灰(黄)色シルト混じり細砂
6	黃灰色シルト質細砂
7	(淡)灰色シルト質細砂
8	暗灰青色シルト
9	淡灰色砂疊
10	暗灰褐色シルト〔包含層〕
11	淡褐色砂質シルト
12	淡灰褐色シルト質細砂
13	黃灰色シルト質細砂
14	暗灰色シルト質細砂
15	淡黃灰色～灰褐色シルト質細砂

図16 基本土層図

#### 包含層出土遺物（図17）

先述のように包含層出土の遺物は小片が多く、図化できたのは3点である。

19は小片のため詳細な時期は不明であるが、おそらく弥生時代末頃の壺であろう。口縁部は外反して開く。

20・21は弥生時代前期頃と考えられる底部で、ともにわずかに凹み底状を呈する。

#### 落ち込み

幅1.4m、長さ2.6m、深さ12～20cmを測り、調査区の東側に延びる。弥生土器が極少量出土したが、図化に耐えうるものはない。

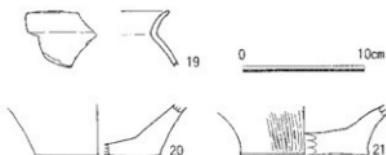


図17 包含層出土遺物実測図

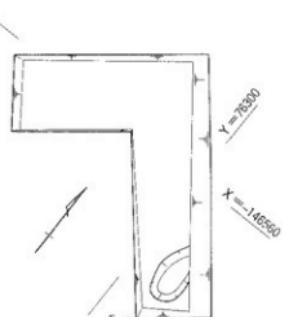


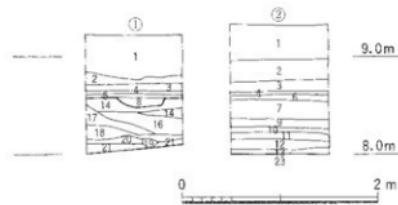
図18 調査区平面図

## 2. 第3次－2調査

調査地は調査対象地の西端部北部に位置した。対象地の西側を南北に走る都市計画道路塙本線の東側拡幅部分について実施した。現標高は約9.3mである。

### 基本層序（図20）

上層より盛土・旧耕作土が堆積し、現地表面下65cmで第1遺構面の基盤層である灰（黄）色シルト質細砂上面を確認した。第1遺構面の時期は、弥生時代末から古墳時代前期と考えられる。南半部では第1遺構面の約20cm下層で河道状落ち込みを検出し、第2遺構面として調査を実施したが、この落ち込み検出面は、後述するように河道堆積中の1段階と判断される。



- |    |                   |
|----|-------------------|
| 1  | 盛土・搅乱             |
| 2  | 灰褐色シルト質細砂         |
| 3  | 灰系色・灰褐色シルト混じり細砂   |
| 4  | 灰（黄）色シルト質細砂【旧耕作土】 |
| 5  | 黄褐色シルト【田床土】       |
| 6  | （淡）灰色細砂混じりシルト     |
| 7  | 褐色細砂混じり細砂         |
| 8  | 暗灰色シルト質細砂【SD01堆上】 |
| 9  | 灰色細砂混じりシルト        |
| 10 | 暗褐色シルト            |
| 11 | 淡灰色シルト            |
| 12 | 灰色シルト             |
| 13 | 暗灰色シルト混じり細砂       |
| 14 | 灰（黄）色シルト質細砂       |
| 15 | （淡）灰色シルト質細砂       |
| 16 | 淡灰褐色シルト質細砂        |
| 17 | 淡褐色細砂             |
| 18 | 淡灰色シルト・褐細砂        |
| 19 | 淡灰色細砂・中砂          |
| 20 | 淡灰色・茶灰色シルト質細砂     |
| 21 | 褐色シルト             |
| 22 | 淡褐色細砂             |
| 23 | （暗）灰色シルト          |

図20 基本土層図

### 遺構面上面出土遺物（図21）

2点を図化した。22は壺の口縁部で、口径14.2cmを測り、体部外間に4本/cmのタキを施す。23は上げ底の底部をもつ壺あるいは鉢である。底部外面に木葉痕が明顯に残る。以上の土器については、弥生時代後期～末頃のものと考えられる。

### 第1遺構面（図22）

南部で溝2条、ピット3基、落ち込み2ヶ所、北部で河道状の落ち込みを検出した。出土遺物から、弥生時代末～古墳時代前期の遺構面と考えられる。

### SD01（図23）

調査区南部で検出した幅45～52cm、深さ9～15cmを測る溝で、調査区内を北東～南西方向に流れる。東・西向

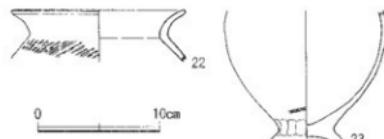


図21 遺構面上面出土遺物実測図

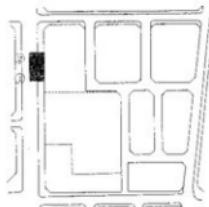


図19 調査地位置図



図22 第1遺構面平面図

側は調査区外に延びるが、緩やかに弧を描くものと考えられる。中央部付近で北側にやや幅の狭い溝(S D01-2)が取りつくが、切り合い関係がみられず同一の遺構と考えられる。S D01-2の北側は削平によって失われており、北半部で検出した河道状落ち込みと本来つながっていたかどうかについては、判断できない。庄内式併行期頃の土器が出土した。

#### 出土遺物(図24)

24は高坏または器台の口縁部で、口径13.5cmを測る。25は高坏部で口径14.3cmを測る。口縁端部はやや緩やかに外反気味におさめる。26は壺の底部で3本/cmのタタキによって尖り底の形態を造りだしているが、かなり厚手の底部となっている。

#### S X01(図25)

調査区南東隅で検出した落ち込みで、調査区外に延びており全体の形状は不明である。調査区内での規模は、長径4.3m、短径2.2m、深さ12cmを測る。内部で直径約20cmのピットが2基検出されており、平面形が多角形の竪穴住居の可能性が考えられたが、現況道路(調査対象外)を挟んだ南側で実施した第4次・4調査では弥生時代末～古墳時代前期の遺構面が存在せず、S X01の続きも検出されなかった。竪穴住居である場合、未調査の現況道路内に収まることも十分考えられるため、このことが直ちに竪穴住居の可能性を否定するものではないが、現段階では根拠に乏しく、詳細は不明である。

#### 出土遺物(図26)

1点のみ図化した。27は弥生時代後期～末頃の壺底部であろう。わずかに平底を呈し、底径2.7cmを測る。体部外面は4本/cmのタタキを施す。

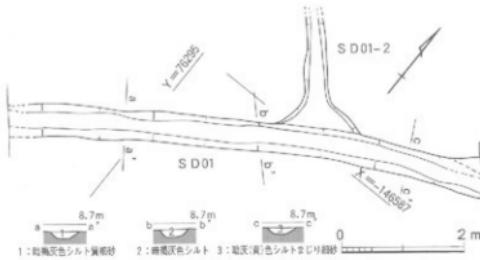


図23 S D01平・断面図

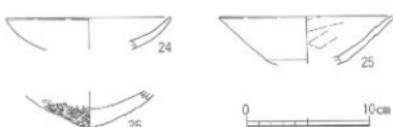


図24 S D01出土遺物実測図

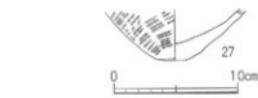
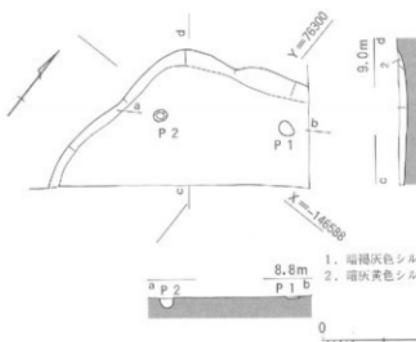


図26 S X01出土遺物実測図

図25 S X01平・断面図

## S X02

調査区中央部で検出した落ち込みであるが、攪乱を受けているため本来の規模は不明である。検出した規模は、長径3.5m、短径2.0m、深さ12cmを測る。内部から弥生時代後期～末頃の土器が少量出土した。

## 出土遺物（図27）

28は弥生時代末頃の土器で、上部に径6mmで水平方向に穿孔している。類例に乏しいが、ここでは蓋として固化した。



図27 S X02出土  
遺物実出図

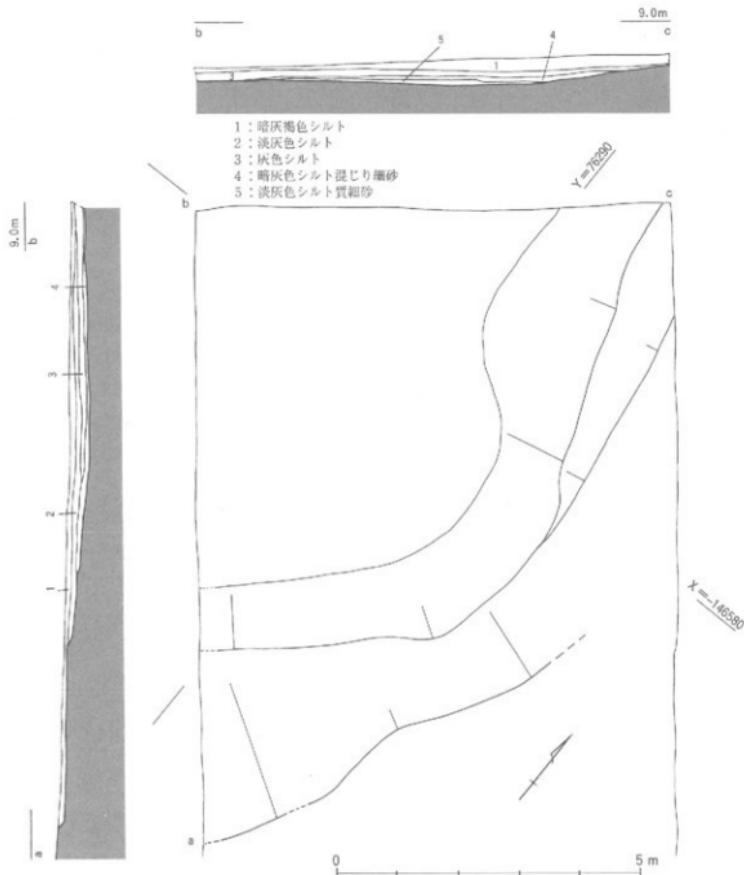


図28 河道状落ち込み平・断面図

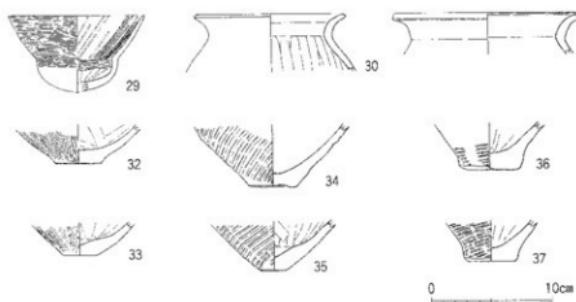


図29 河道状落ち込み出土遺物実測図

#### 河道状落ち込み (図28)

調査区北半部は造構面が西側に緩やかに落ち込んでおり、弥生時代後期～古墳時代前期の土器が出土した。調査段階においては、検出状況から、人為的な造構というよりは、第1・2次調査で確認されていた河道の一部と考えられた。当調査区の北側で実施した第4次-1調査では、南側に向かって緩やかに傾斜する地形を検出したが、落ち込みとしての明確な肩部は確認されなかった。さらに、その東側隣接地で個人住宅建設に伴って実施した調査でも同時期の河道や落ち込みは検出されていないため、現段階では河道というよりは大きな湿地状の落ち込みと考えた方が妥当と考えられる。

#### 出土遺物 (図29)

河道状落ち込みからは、主に肩部から弥生時代後期～古墳時代前期の土器が比較的多く出土したが、1点を除き完形に復元できるものはない。

29の小型丸底壺は、唯一全体の器形がわかるもので、口径11.2cm、高さ6.3cmを測る。胎上は精良で、内外面に丁寧にヘラミガキを施す。30・31は壺で、30は口径12.0cmを測り、内面には指頭による搔き取り痕が明瞭に残る。31は、口径15.6cmを測り、口縁罐部をややつまみ上げ気味に取める。32～37は底部で、32・33は壺で外面をハケで仕上げる。34～37は壺または鉢で外面にタタキ痕が残る。

#### ピット

ピットは5基検出した。いずれも調査区南半部のSD01とSX01に挟まれた地区で検出した。SP01・02は切り合関係があり、SP01はSP02よりも新しい時期のものである。SP01は直徑27cm、深さ17cm、SP02は直徑30cm、深さ26cmを測る。ピット出土土器は小片で図化に耐えうるものはない。以上のピットについては調査区内では建物としてのまとめは認められなかった。

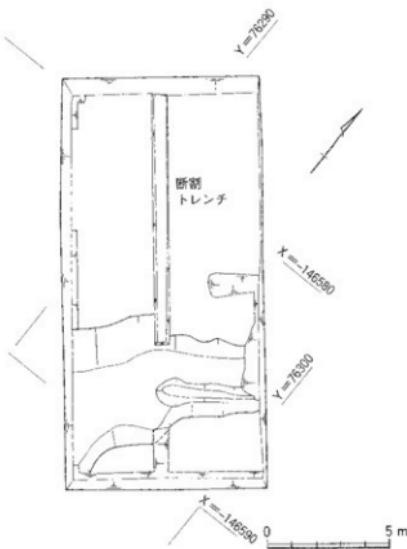


図30 第2造構面平面図

## 第2遺構面(図30)

第1遺構面で検出した遺構は、弥生時代後期～古墳時代前期の遺構と考えられるが、その基盤層にも弥生時代後期頃の土器が含まれていた。このため下層についても掘り下げを実施したところ、調査区南部の約60mについては、河道堆積層のなかに弥生時代後期頃の土器が一定量含まれていた。この南半部分は流路状を呈しており、この検出面を第2遺構面と呼称する。

調査区北半部については、幅60cmのトレンチを設定し断ち割り調査を実施したが、第1遺構面よりも下層では、遺構・遺物が確認されなかったため、全面的な掘り下げは実施しなかった。

## 第2遺構面出土遺物(図31)

第2遺構面の流路状堆積層のうち、16点を図化した。

38～40は壺で、口縁部までタキ痕が残る38・39と、ハケで仕上げる40がある。口径は、38が $14.6\text{cm}$ 、39が $15.1\text{cm}$ 、40が $15.4\text{cm}$ である。41、44～49は底部～体部下半で、壺の可能性がある44を除いてタキ成形である。突出する平底に体部がつづくものが多いが、45は平底が突出せずにそのまま開く。41・46・47の底部外面には木葉痕が残る。42は鉢で、口径 $11.4\text{cm}$ 、器高 $6.4\text{cm}$ 、底径 $3.1\text{cm}$ を測る。外面は3本/cmのタクキ、内面は板ナデを施す。43は小型の壺の体部で、最大径をほぼ中位にもち、体部が丸みを帯びて球形に近い形状を呈するようである。内面は板ナデを施す。50～52は器台の口縁部で、口径は、50が $13.4\text{cm}$ 、51が $11.9\text{cm}$ 、52が $10.3\text{cm}$ である。50の口縁部内面には剥離痕があり、さらにたち上がる形態のものと考えられる。53は器台の脚部で、外側はヘラミガキ、内面はナデを施す。

以上の土器については、弥生時代後期～末頃のものと考えられる。

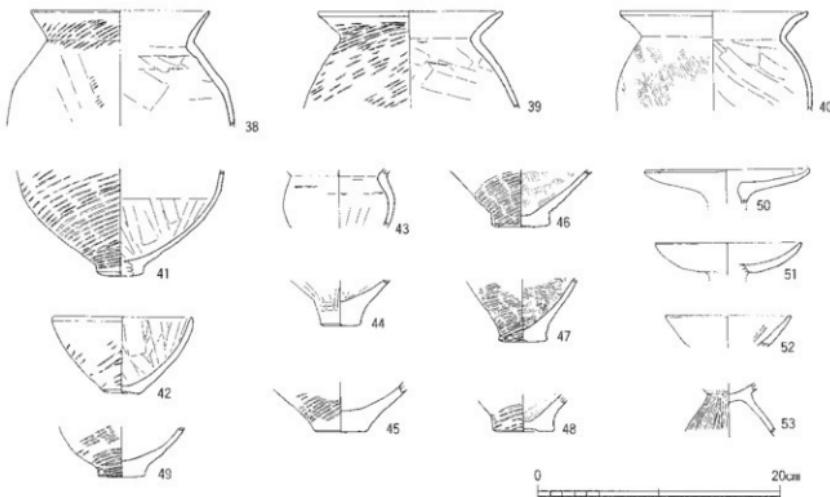


図31 第2遺構面出土遺物実測図

### 3. 第3次-3調査

調査地は調査対象地の北東隅に位置する。区画整理地内の道路部分について調査を行った。なお、対象地の北半分は現在道路であり調査は行わなかった。

#### 基本層序 (図33)

上層から現代盛土、旧地表、旧耕作土の堆積が見られ、現地表面下1.2m前後で包含層と考えられる褐色砂質シルトを検出する。土師器・弥生土器などが出土した。その直下層が遺構面と考えられる。

#### 遺構検出面 (図34)

西に下がる地形が確認できたが、遺構は検出されなかつたが、遺構面直上で弥生土器が押しつぶされた様な状態で検出された。この調査区の西隣の第4次-2調査区では弥生時代前期～中期の遺構面を検出したが、調査区が狭小のため、さらに下層の遺構の検出は行わなかつた。

#### 出土遺物 (図34)

図化可能な個体は1点だけであった。図33 基本土層図

54は狭い底部をもつやや球形に近い形態をした壺体部である。外面下半は右上がり、外面上半は左上がりのタタキを施す。内面はハケで仕上げる。

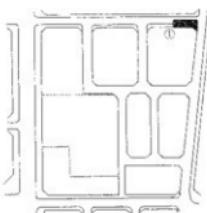


図32 調査地位置図

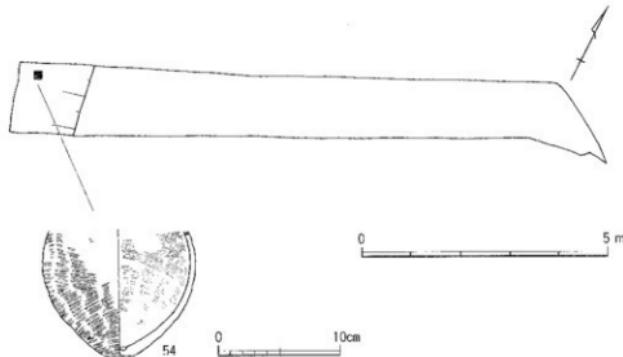
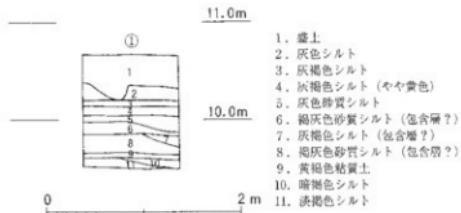


図34 調査区平面図・出土遺物実測図

#### 4. 第3次～4調査

調査地は調査対象地の南東隅に位置する。図35調査地位置図内の道路予定地部分について調査を実施した。

##### 基本層序（図36）

上層から現代盛土、旧耕作土の堆積が見られ、現地表面下80cm前後で道構面と考えられる黄灰色砂質シルトを検出したが、道構は検出されなかった。その下層は細砂～粗砂を主体とする洪水堆積が見られるだけであった。

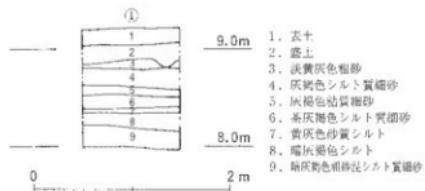


図36 基本土層図

#### 5. 第3次～5調査

調査地は調査対象地の南西部に位置する。区画整理地に西接する塚本線道路拡幅部分について調査を実施した。

##### 基本層序（図38）

上層から現代盛土、旧耕作土の堆積が見られ、現地表面下70cm前後で道構面と考えられる黄褐色砂質土を検出したが、道構は検出されなかった。その下層はシルト・粗砂を主体とする河川堆積が見られるだけであった。遺物は旧耕作土から陶器などの近世の遺物がわずかに出上するのみであった。

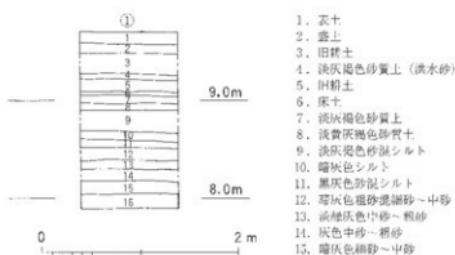


図39 基本土層図

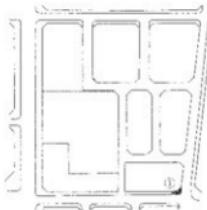


図35 調査地位置図

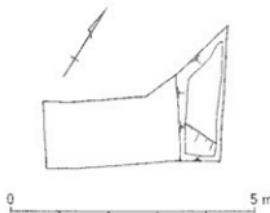


図37 調査区平面図

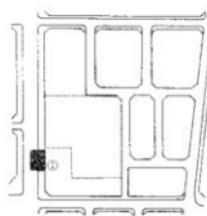


図38 調査地位置図

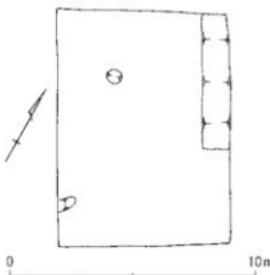


図40 調査区平面図

## 第3節 第4次調査

### 1. 第4次-1調査

調査地は調査対象地の北西部に位置する。塙本線の道路拡幅部分について調査を実施した。なお、調査区北部の一部は現道路であるため、調査は行わなかった。

#### 基本層序（図42）

上層から盛土・耕作土が堆積し、現地表面下50~90cmで第1遺構面（中世遺構面）、現地表面下1.0~1.2mで第2遺構面（古墳時代以降遺構面？）、現地表面下1.3~1.5mで第3遺構面（弥生時代前期後半）を検出した。

なお、第2遺構面では南側に下がっていく地形を検出したが、他は浅い凹みなどで明確な遺構が確認されなかった。

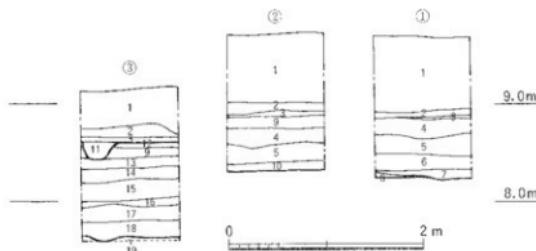


図42 基本土層図

#### 第1遺構面（図43）

耕作に伴う溝5条、土坑2基、ピット3基を検出した。出土遺物から中世と考えられる。

#### 鉄溝

鉄溝は2.0m毎に5条並んでおり、幅30cm、深さ15cm前後を測り、北東から南西方向に延びている。底部には耕作具の痕跡が確認された。埋土は、灰色~灰黄色砂質土で、須恵器・土師器の小片が出土した。

#### S X101

直径60cm、深さ20cmの椿円形の土坑である。埋土は灰色粘質土のみで、須恵器・土師器の小片が若干出土した。

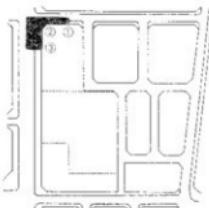


図41 調査地位置図

1. 盛土
2. 耕作土
3. 土壌
4. 灰黑色粗砂
5. 灰色細砂
6. 灰褐色砂質シルト（包含層？）
7. 灰褐色粘質土
8. 灰褐色シルト質板細砂
9. 灰褐色砂混粘質土
10. 灰褐色粗砂シルト質板細砂
11. 灰色砂質土（鉄溝埋土）
12. 灰色粘質シルト（上面が第1遺構面）
13. 灰褐色粘性細砂
14. 灰褐色粘性砂質土
15. 灰色粗砂
16. 灰褐色砂混シルト（上面が第2遺構面？）
17. 灰黑色粗砂
18. 灰褐色シルト質細砂
19. 灰色粗砂（上面が第3遺構面）



図43 第1遺構面平面図

## 第3遺構面(図44)

溝5条、土坑4基、ピット40基、落ち込み1ヶ所を検出した。なお、落ち込み以外からは時期の明確な遺物は出土しなかった。なお、遺構面として検出することはできなかったが、断面観察及び第4次-2調査の成果から、弥生時代中期～後期の生活面が存在すると判明した。遺構としては、調査区北東部で検出した2条の流路 S R 301・302がそれにあたる。直上層や遺構出土遺物から主に弥生時代前期後半と考えられる。

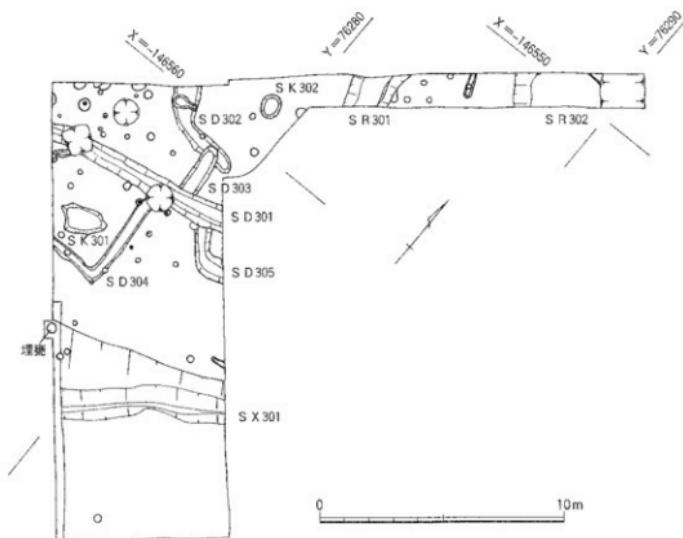


図44 第3遺構面平面図

## S D 301

検出長約8.0m、幅約1.0m、深さ30cmの東西方向の溝である。断面形はやや崩れたV字形で、埋土は暗灰色シルト、弥生土器の小片がわずかに出土した。自然地形に並行して直線的に掘削され、その規模や断面形から集落内部を区切る溝のようにも考えられる。

なお、他の溝は深さ5～10cmと浅く、遺物も出土しないものがほとんどであった。

## S X 301

調査区のはば1/3をしめており、検出長約7.4m、最深部は検出面から約50cmの深さがある。北側ではなだらかな傾斜を形成し一旦急激に落ち込み、溝状を呈し、また南側へ徐々に高くなる。埋土は3層に大別され、上・中層で比較的大量の弥生時代前期の土器が出土した。土器はほとんどが投棄された様な状態で出土した。なお、土器が捨てられた時点では、湿地状であったと考えられ、肩部付近や、調査区南端には多くの偶蹄目の足跡が確認された。第2遺構面で検出された地形の落ち込みは、この遺構が後世に踏襲されていたものと考えられる。

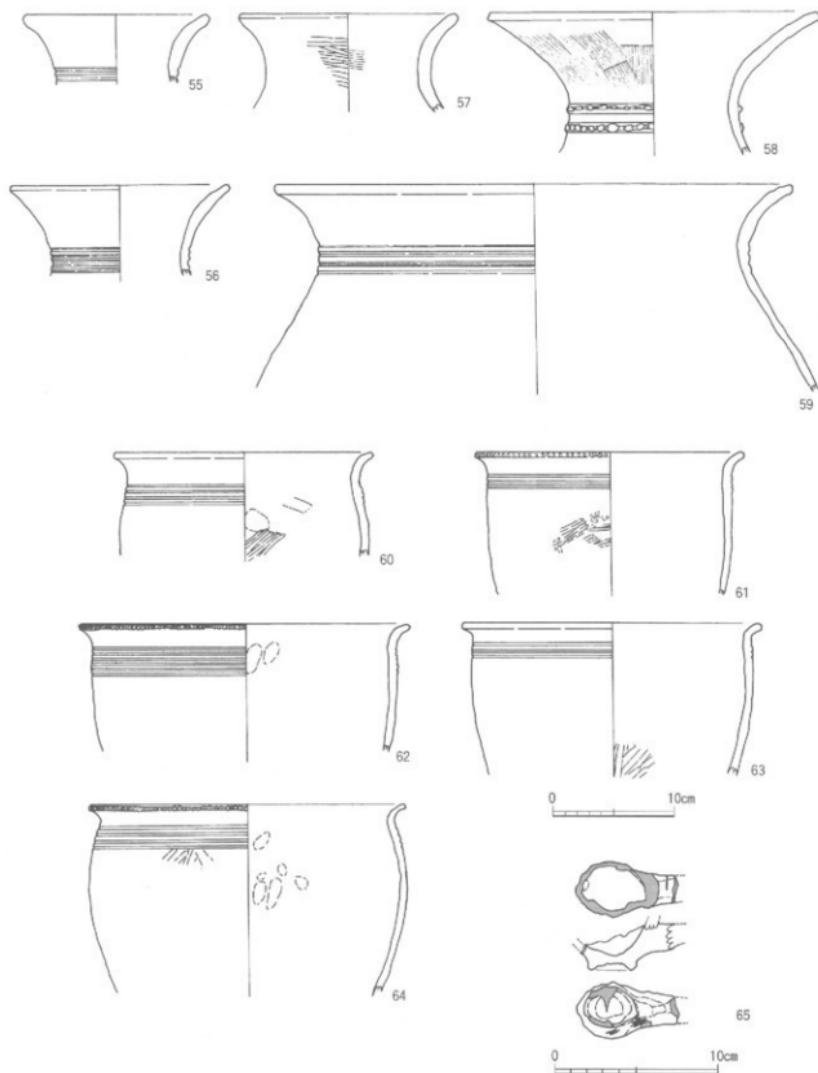


図45 S X 301出土遺物実測図

## 出土遺物（図45）

出土した土器は、壺・甕・匙形土器である。55～59は壺で、55は口縁部が外方に開き、端部がやや内湾する。頭部には2条のヘラ描沈線を施す。56は口縁部が外方に開き、頭部には4条のヘラ描沈線を施す。58は口縁部が大きく外方に開き、頭部には押圧文を伴う貼付突帯を2条施す。59は大型甕で、口縁部は短く外方に広がり、頭部に3条の削出突帯を施す。60～65は甕で、いずれも2～3条のヘラ描沈線を施す。ただし、62だけは5条と沈線の多角化が見られる。61～63は如意形口縁で、体部が直線的なもので、64は他のものと比べやや体部が丸みをもつ。65は匙形土器で、残存長6.3cm、最大幅3.4cm、残存器高2.85cmである。受部底部は高台状に作られている。受部上部の大半は欠損しているが、柄部よりいくらか上方に伸びていたものと考えられる。また中実の柄が水平方向につけられている。外面には細かいヘラミガキの痕跡が確認できる。

## 埋甕（図46）

S X301肩部西端で検出した遺構で、土器の上部は後世の削平により欠損していた。断面観察から掘形の痕跡が認められないため、掘形は土器がちょうど納まる大きさのものであったと考えられる。埋土は暗灰色砂質シルトで、埋土内には土器上半部の破片が含まれていた。

## 出土遺物（図46）

66は底径9.4cm、残存器高27.9cmの甕の体部から底部である。内外面とも摩滅が激しく調整等は確認できなかった。埋土から口縁部の小片が出土した。

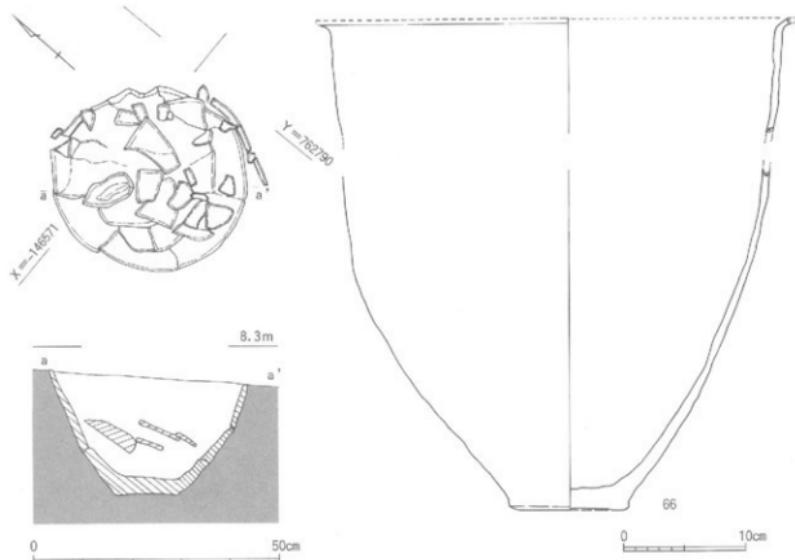


図46 埋甕出土状況図・出土遺物実測図

## 2.4次－2調査

調査地は調査対象地の北東部に位置する。区画整理地内の道路部分、第3次－3調査地と市営住宅の間にについて調査を実施した。なお、北部の一部は現道路であるため調査は行わなかった。

## 基本層序（図48）

盛土・耕作土・旧耕作土・床土を除去すると、現地表面下90cm前後で第1遺構面（平安時代・古墳時代包含層）、現地表面下1.0mで第2遺構面（弥生時代末～古墳時代初頭）を検出した。層位的には、布留式併行期・庄内式併行期に区分できると考えられる。また現地表面下1.3m前後では弥生時代中期頃の遺構面を、現地表面下1.3～1.5mで第3遺構面（弥生時代前期後半）を検出した。

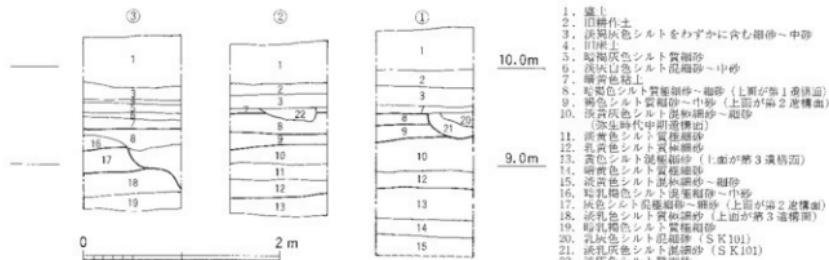


図48 基本土層図

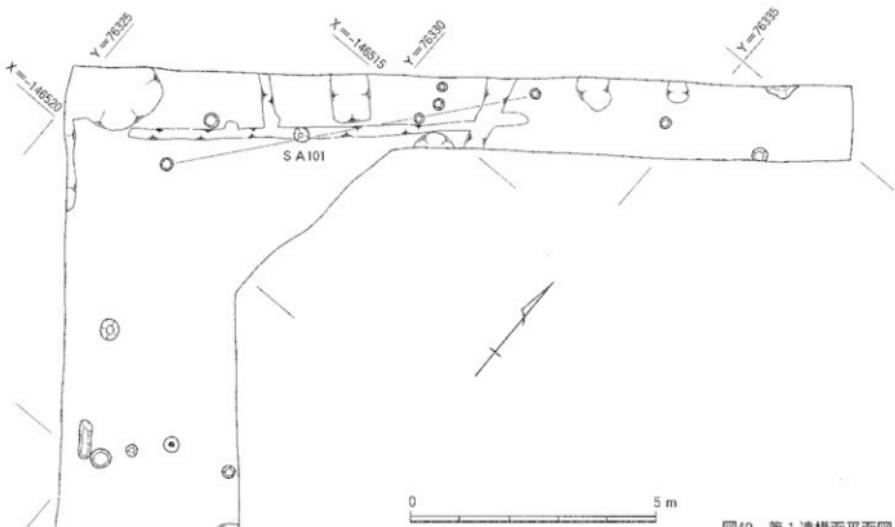


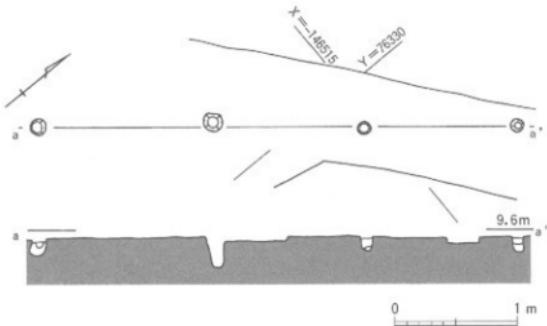
図49 第1遺構面平面図

## 第1遺構面（図49）

調査区全体にピットを12基検出した。ピットは直径25~30cm、深さ30~40cmで、暗灰色・淡乳茶色シルト質細砂～極細砂が堆積する。包含層や遺構出土遺物から平安時代後半と考えられる。

## S A101（図50）

調査区北部に柱間2.5mで3間分の構列状の遺構が検出された。柱穴は直径30cm、深さ20~30cmである。埋土は淡黄色及び暗灰色のシルト～細砂である。須恵器・土器片が出土した。



## 第2遺構面（図51） 図50 S A101平・断面図

検出した遺構は溝2条、土坑2基、ピット16基、自然流路1条である。出土遺物から弥生時代中期～古墳時代前期と考えられ、調査区壁面の断面観察から若干の時期差をもつことが判明している。

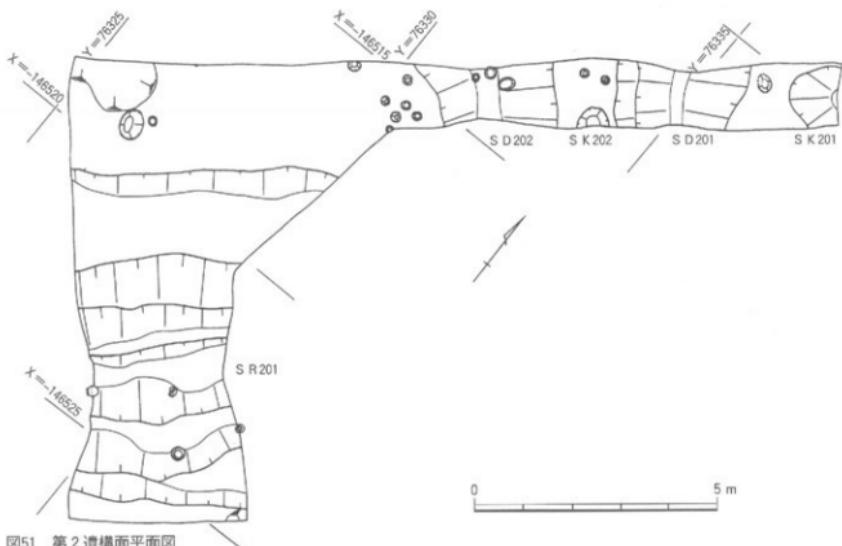


図51 第2遺構面平面図

## S K 201

調査区東端で検出された土坑状の落ち込みで、最大の検出長は1.4m、深さ30cmの不整形な円弧を描く。埋土は淡乳褐色シルト質細砂で、弥生時代末～古墳時代初頭の土器片が出土した。

## S K 202

調査区東部 S D201・S D202のほぼ中に位置する土坑である。直径70cm、深さ15cmで、調査外に遺構が延びていたため、全体の規模は不明である。埋土は淡乳色シルト混細砂～粗砂で、遺物は出土しなかった。

## S R 201 (図52)

調査区南西部に位置し、検出長3.6m、幅5.2m、深さ1.1mである。第1次調査のS R01と同一のものと考えられる。北肩部で一旦テラス状の平坦面を形成し、そこから大きく落ち込む。また底面は凸凹が激しく一定していない。埋土は上層がシルト質細砂層、下層が砂礫層で、シルト質細砂内には完形の庄内式併行期の土器を数点と、拳大の躰を多く含み、下層では若干弥生時代前期の土器片も出土した。

## 出土遺物 (図53)

出土遺物は、壺・甕・高杯・鉄鎌?である。67～69は広口壺である。68は口縁部が直線的に外方に開く。外面はヘラミガキを施す。69は生駒西麓の胎土をもつ大型の壺口縁部である。70は直口壺で、体部内面は頸部境界までヘラケズリを施す。71は頸部が短くやや内傾し、中央に最大径をもつ扁平な体部である。72は短頸壺で、体部全体にヘラミガキを施す。73・74は二重口縁壺である。74は、直立する短い頸部からやや内湾しながら受部が上方にのび、その端部から口縁がやや外反しながら短く立ち上がる。口縁部外面には内部を斜線で充填する鋸齒文を、内面は横方向に細かいヘラミガキを施す。75～79は甕である。75は淡路型甕、79は口縁部が外方に短く開き、端部をややつまみ上げる。体部は球形でわずかに凹む底部をもつ。庄内式土器

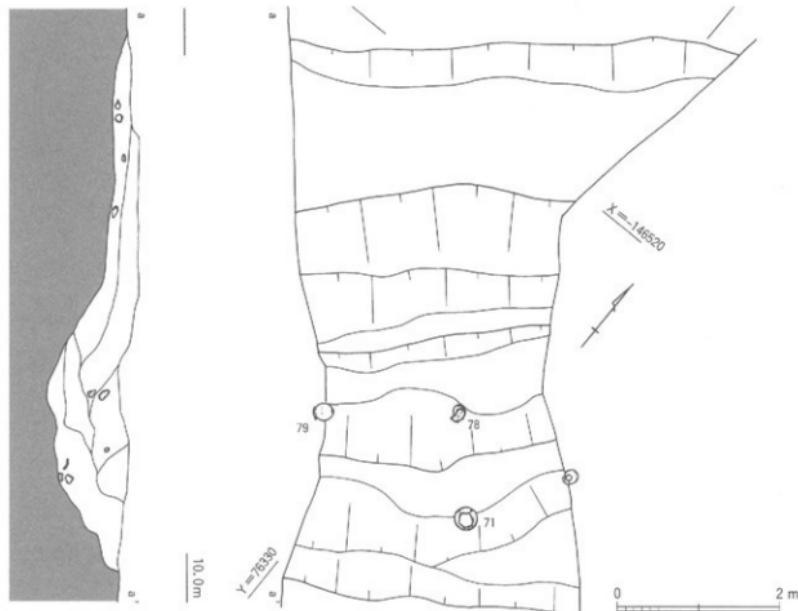


図52 S R 201遺物出土状況図

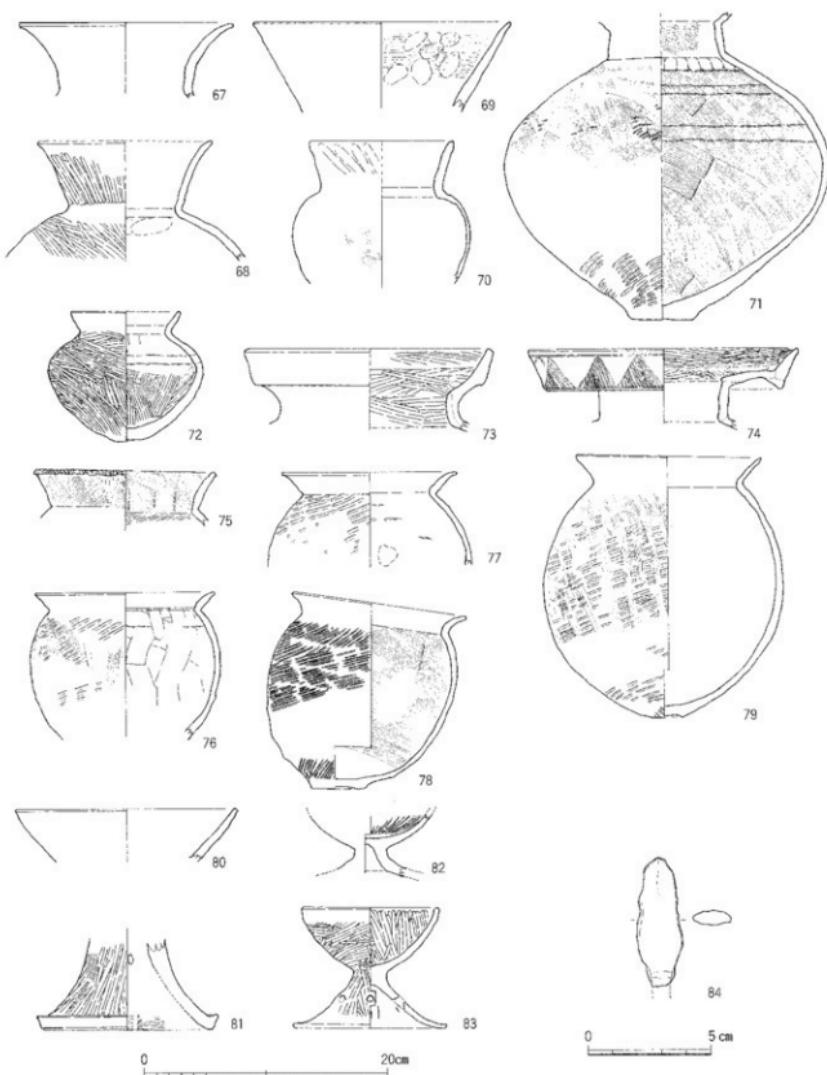


図53 SR 201出土遺物実測図

の影響を受けたものと考えられる。80～83は高杯である。82は内外面に赤色顔料を塗布した高杯である。暗文を施した楕状の坏部に、大きく開く脚部が付く。83は半球状の楕形杯部に大きく開く円錐状の脚部をもつ。84は鉄鏃と考えられる鉄製品で、埋土最上層から出土したものである。

#### S D 201 (図55)

調査地北東部で検出された南北方向の溝で、検出長1.4m、幅2.8m、深さ60cmを測る。断面形は開いたV字形で、埋土は3層に分けられる。断面観察で弥生時代末～古墳時代初頭の遺構面より下層から掘り込まれる。弥生土器の小片が出土した。

#### S D 202 (図55)

S D 201に沿うように掘削された溝で、規模は検出長1.4m、幅3.0m、深さ40cmを測る。

断面形は皿形で、埋土は3層に分けられ、弥生時代中期と考えられる上器片が出土した。

#### 出土遺物 (図54)

85は鉢で、口縁端部は面をもち、2条の貼付突帯を施す。上方の突帯には刻目を施す。

#### 第3遺構面 (図58)

溝1条、自然河道1条を検出した。なお、調査区北東部について、東に下がってい

く地形を検出した。調査区北東部は調査範囲が狭く、弥生時代前期の遺構を検出できなかった。時期は出土遺物から弥生時代前期後半と考えられる。

弥生時代前期の遺構面の直上層で、木葉文を施す土器が出土した (図56)。

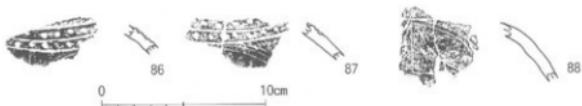


図54 S D 202出土遺物実測図

#### S D 301

調査区北西隅で検出された南北方向の溝で、検出長4.4m、幅1.2m、深さ50cmである。断面形はU字形で、埋土は暗灰色砂質シルトである。

#### 出土遺物 (図57)

89は逆L字型のいわゆる播磨系の壺の口縁である。口縁の上面は平坦面をもち、体部に沈線を2条施す。



図54 S D 202出土遺物実測図

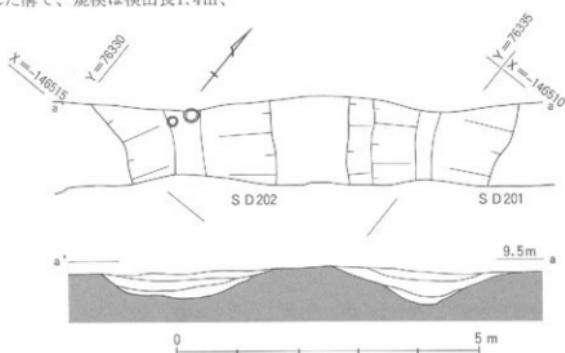


図55 S D 201・202平・断面図

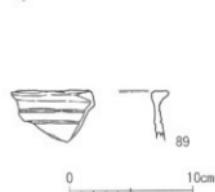


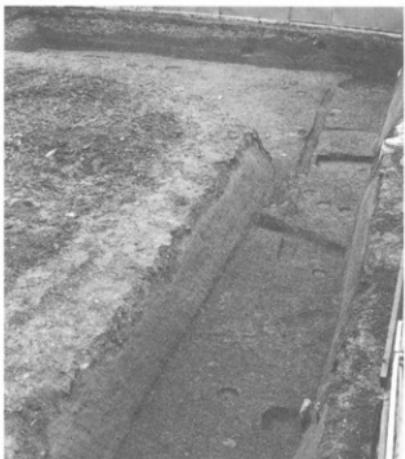
図57 S D 301出土遺物実測図



図58 第3遺構面平面図

S R 301

上層のS R 201とはほぼ同じ位置で検出した自然河道である。検出長2.8m、幅1.0m、深さ50cm以上である。埋土は乳灰色極細砂～粗砂である。弥生土器の小片が出土した。



挿図写真5 第1遺構面（北から）



挿図写真6 S R 301検出状況（東から）

### 3. 4次-3調査

調査地は調査対象地の中央部に位置する。区画整理地内の道路部分で、第1次調査地南側に接する。T字形の形状をした調査区で、南北トレンチをI区、東西トレンチをII区として以下記述する。

#### 基本層序（図60）

現地表面下、盛土・耕作土・旧耕作土・床土が堆積し、古墳時代包含層・古墳時代初頭遺構面、さらに1m弱下層に弥生時代前期包含層を検出した。下層は灰褐色砂・砂礫などの河川堆積が確認された。

なお、この調査区では中世および平安時代の遺構面は、後世の削平のため検出されなかった。

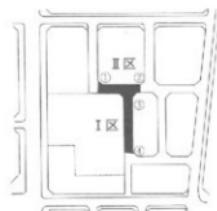


図59 調査地位置図

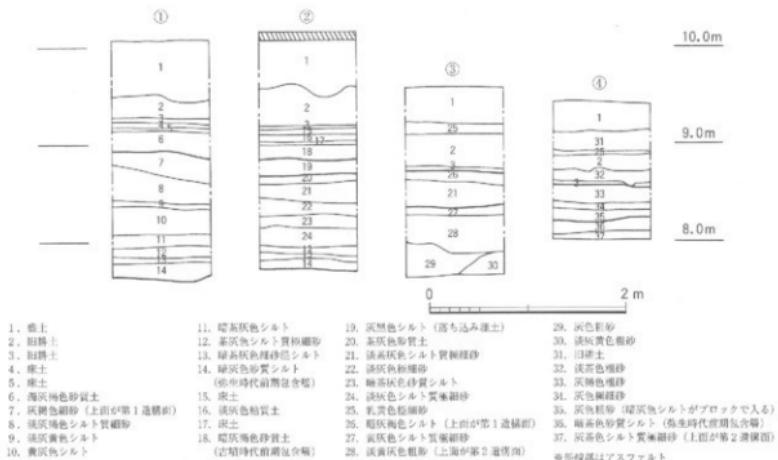


図60 基本土層図

#### 包含層出土遺物（図61）

90～91は甕口縁部である。90は体部をハケで仕上げる臺で、内面に明瞭な屈曲を持つ。91は口縁端部が肥厚する典型的な布留式甕である。92は高杯で、大きく直線的に外方に開く口縁部で、口縁部が体部を大きく凌駕する。

#### 第1遺構面（図61）

検出された遺構は堅穴住居2棟、掘立柱建物3棟、土器溝まり1ヵ所、溝2条、ピット多数を検出した。その他には南端では流路、西半では落ち込みを検出しており、それを境に遺構・遺物の分布が希薄になるため、居住域の境界と



挿図写真7 調査状況

なるものと考えられる。時期は出土遺物から弥生時代末～古墳時代前期と考えられる。

II区西半部は堆積土が安定せず、多くの遺構を検出した東及び南部分とは異なる。第2次調査などで検出されている自然河道などの影響を大きく受けているものと考えられる。

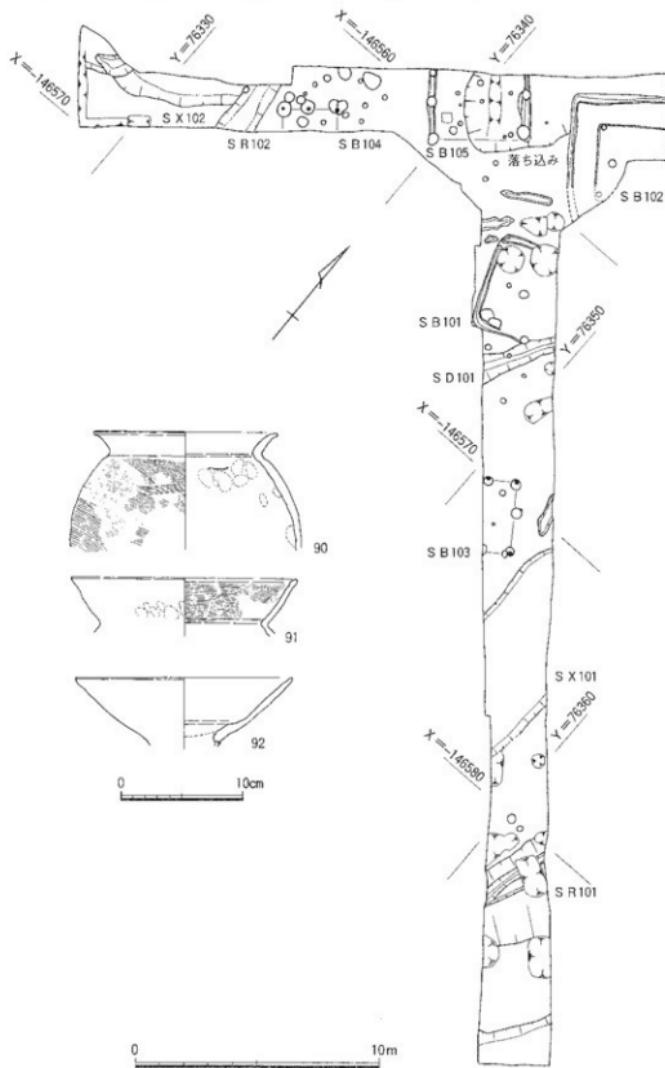


図61 第1発掘横面平面図・包含層出土遺物実測図

## S B101 (図62)

I区北部に位置する南北4.0m、東西3.8m以上の方形の竪穴住居である。東半分が調査区外に延びる。また北は江戸時代末頃の井戸によって、南はS D102によって切られる。大きく削平を受けており、深さは10cm程度であるが、検出した部分についてほぼ周壁溝が検出された。中央にピットを検出しておらず、中央土坑の可能性がある。北側は暗灰色シルトで盛上し、床面を仕上げる。弥生土器もしくは土師器片が出土した。

## S B102 (図63)

II区東部に位置する南北5.2m以上、東西3.9m以上の方形の竪穴住居である。住居は庄内式併行期の上器を含む落ち込み堆積上面から掘り込まれる。検出面からの深さは約30cmで、比較的良好な状態で検出された。内部は幅1.3mのベッド状造構が存在し、床面には厚さ1~2cmの貼床が施されていた。コーナー部に直径20cm、深さ50cmの主柱穴を2基検出した。また一部の周壁溝底に板状の痕跡を確認した。土師器が出土しており、特に上層からの出土が多くかった。

## 出土遺物 (図64)

出土遺物で図化できたものは壺93・94と底部95である。93・94は床面直上で出土したもので、口縁がやや内湾し、内面にヘラケズリを施す器壁のきわめて薄い土器である。93は外面をハケで、94は外面を細かいタタキのまま仕上げる。95は内区より出土した丸底の底部で、外面をハケ、内面をヘラケズリで仕上げる。以上は布留式併行期の土器と考えられる。

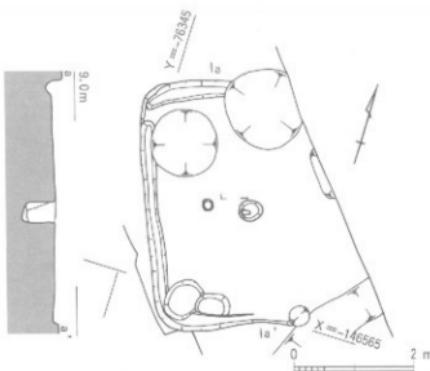


図62 S B101平・断面図

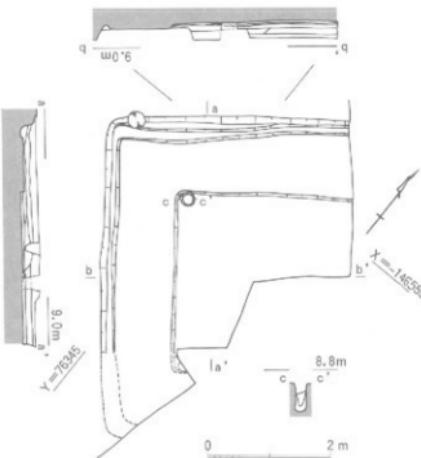


図63 S B102平・断面図

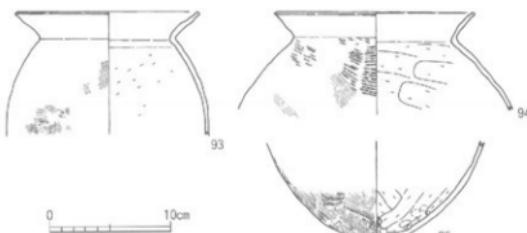


図64 S B102出土遺物実測図

## S B 103 (図65)

I区中央部に位置する $2 \times 1$ 間以上の掘立柱建物である。主軸方向は現在の地割と一致する。柱間は、1.2~1.4mで、掘形直徑・深さが20~30cmで、直径20cm前後の柱痕跡をもつピットで構成される。また建物は西方向に延びるようである。弥生土器もしくは土師器片が出土した。

## S B 104 (図66)

II区中央部に位置し南側に延びる $2 \times 1$ 間以上の掘立柱建物である。主軸は現在の地割と一致する。柱穴はいずれも、掘形は直徑50cm、深さ40cm前後で、柱痕跡は10cm前後で、柱間隔約1.0mである。土師器片が数点出土した。96は直口壺で、口縁端部がわずかに内湾し、口縁が外方に開く。器壁はかなり厚い。

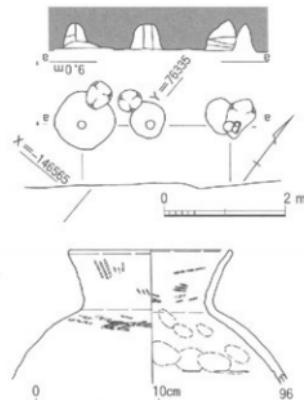


図66 S B 104平・断面図・出土遺物実測図

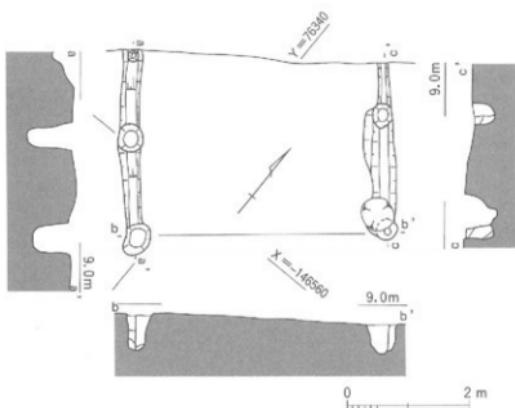


図67 S B 105平・断面図

## S B 105 (図67)

II区中央に位置する2間×1間以上の掘立柱建物である。主軸は現在の地割と一致する。柱穴は直徑40~60cm、深さ50~60cmで、柱間は南北1.4m、東西2.0mである。南北方向の柱穴間は布振り状を呈する。溝の断面形は箱形で、埋土は暗灰色・灰黄色砂質シルト混土である。庄内式併行期の土器を含む落ち込み埋土上面から掘りこまれており、布留式併行期と考えられる。遺構北部分は未検出のため規模は不明であるが、同じような形式の建物は比較的大規模な建物が多く、この建物も同様に大型建物である可能性がある。

## S X101 (図68)

I区中央部に位置する検出長4.0m、幅4.6m、深さ30cmの土器溜まりである。遺構の上層～中層で庄内式併行期の土器が多量に出土した。土器は肩部付近に大～小破片が比較的多量に、中央には人頭大の平面をもつ縹と完形の土器が見られる。全体的に完形に近い遺物が見られることや、堆積の変化が乏しいことなどか

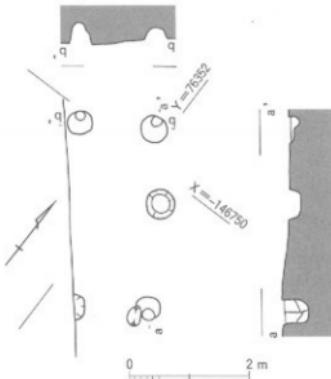


図65 S B 103平・断面図

ら短期間の廃棄もしくは祭祀跡の可能性がある。また、下層では比較的少量に遺物が出土したのみであった。底面は平坦であるが、ピットや周壁構は確認されておらず、住居とは考えにくい。

#### 出土遺物（図69・70）

壺97～103は広口壺・直口壺、二重口縁壺があり、全体に体部が球形化する一方で、突出した底部を持つもの98・100・103が見られる。二重口縁壺は口縁部に円形浮文・波状文・竹管文を施す加飾傾向の強いもの101・102がみられる。また、100は頸部と体部の境界付近に半截竹管文と竹管文を組み合わせた文様を施す。102は全面に左上がりのタキ痕跡を明瞭に残す。

鉢105～108は、直口鉢・有段鉢・屈曲口縁鉢があり、完形のものは突出した底部をもつ。106は有段鉢で、外面にはタキ痕跡が残存し、内部のヘラミガキも粗雑である。108は大型の屈曲口縁鉢で、ユビオサエで片口を作り出す。体部にはヘラミガキを施すが、タキ痕跡が明瞭に残存する。体部中位には円形浮文が施される。

壺109～120は器高8.0cm程度の小型から器高20cm弱の中型のV様式形壺がある。いずれも口縁が外反するもので、114や117のように大きく開くものもある。また110・117・118・120のように球形もしくは寸胴な器形が目立つ。112は器形が安定せず、体部のタキ方向が一定せず、粗雑である。116はわずかに底部が残り、外面は矢羽状タキを施す。

高壺121～123は有段口縁で、121のように体部が丸いものと、

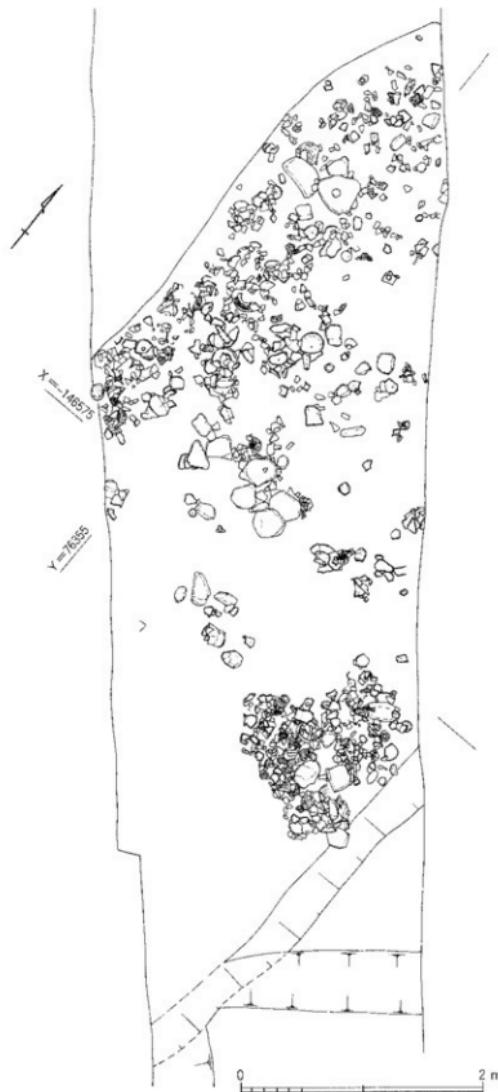


図68 S X 101遺物出土状況図

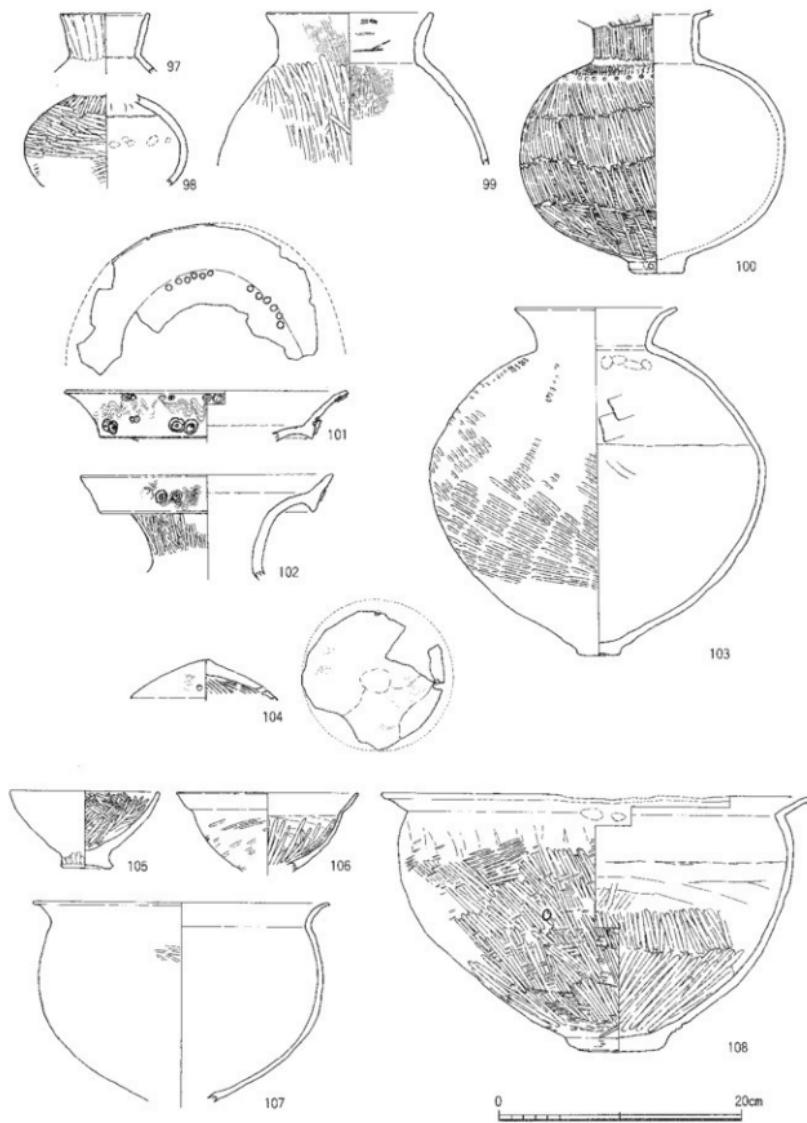


図69 S X 101出土遺物実測図(1)

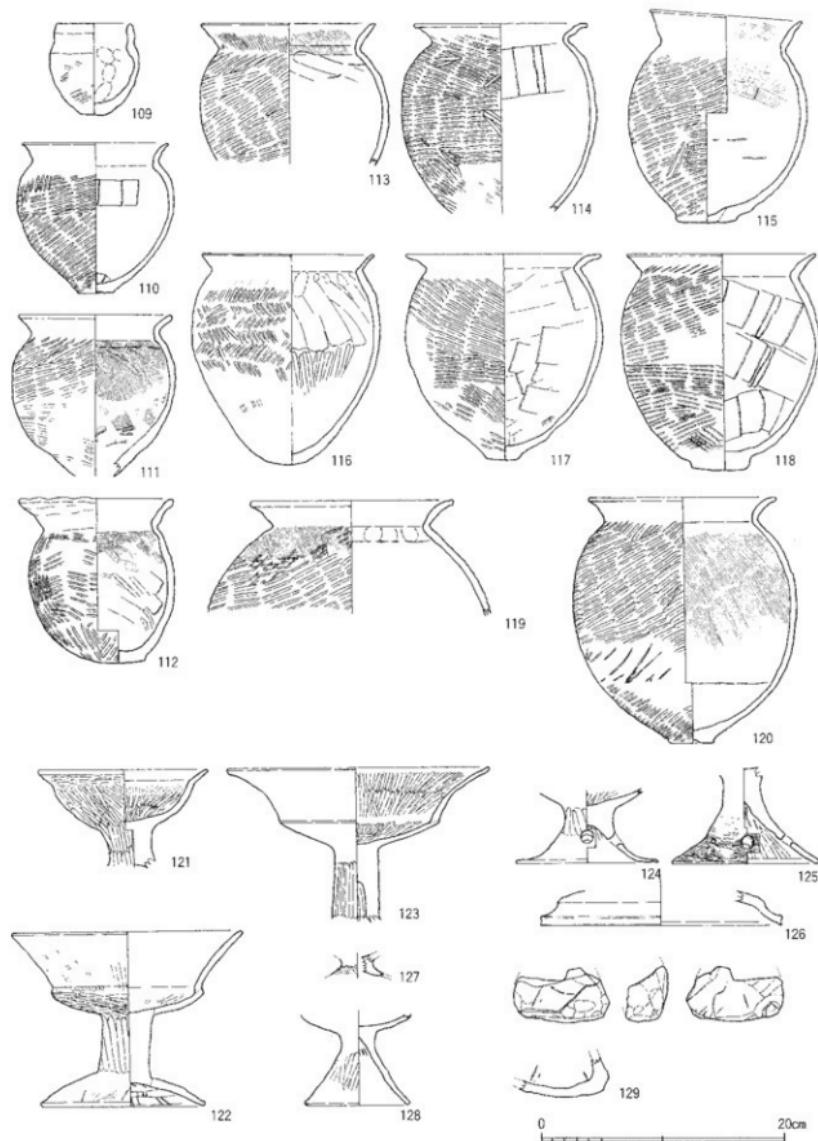


図70 SX101出土遺物実測図(2)

122・123のように体部から大きく外方に広がる口縁をもつものがある。122は丸みをもつ体部と口縁部の境界で内湾し、口縁部が大きく外方に広がる。

脚部124～126は124のように器高が低く裾部が外方に水平に開くもの、125のように器高が高く大きく外方に開くものがある。126は有段高杯の裾部である。器台は128のようにやや外方に広がる脚の長いものと、127のように小型で裾部が大きく広がるものがある。

特殊なものとしては104の蓋、129の皮袋形土器である。104は外面をナデ・ハケで、内面は荒いハケで仕上げる。罐部2ヶ所に穿孔の痕跡が確認された。129はほとんどの部分が欠損しているため全体の規模は不明であるが、残存する平坦な部分が底面と考えられる。また器種は不明であるが、内面を絹織文で充填する鋸歯文を施す土器も見られる。

#### S X102

II区西部で検出された不定形な落ち込みで、検出長6.0m、検出幅1.3m、深さ30cmを測る。埋土は淡灰褐色シルト質細砂で、あまり締まらない土質である。遺物は土師器もしくは弥生土器小片が出土した。

#### S D101

I区北部よりやや北で検出された南北方向の溝で、検出長3.2m、幅1.0m、深さ30cm前後を測る。断面はやや崩れたV字形をしており、土師器もしくは弥生土器小片が出土した。

#### S R101

I区南部で検出された南北方向の溝で、検出長3.0m、幅1.5m、深さ30～40cmを測る。上面では緩やかに、中央付近で大きく落ち込む。埋土は灰色粗砂で土師器もしくは弥生土器小片が出土した。

#### S R102

II区西部で検出された南北方向の流路で、検出長2.2m、幅1.2m、深さ50cmを測る。埋土は灰色粗砂～細砂で、遺物は出土しなかった。

#### 弥生時代前期包含層出土遺物（図71）

2～5条のヘラ描沈線文・削出突帯・貼付突帯を施す壺や壺が出土した。130は太型鎌刃石斧で、最大長10.4cm、最大幅8.0cm、最大厚4.9cm、重量597.2g、比重2.788である。刃部には明瞭に搔痕が見られる。若干刃部のほうが広くなる形態である。石材はひん岩と考えられる。楔形石器（写真図版34-1）は最大長3.59cm、最大幅3.32cm、最大厚1.08cm、重量16.3gである。石材はサヌカイトである。端部を直線的に仕上げ、一部に抉りを入れる。形状から柄部と考えられる。

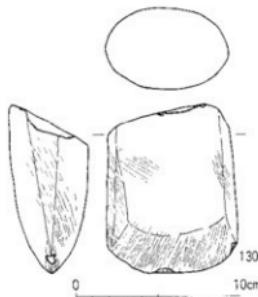


図71 包含層出土遺物実測図

#### 第2遺構面（図72）

残存状況は良好ではないが土坑9基、溝1条、不明土坑1基、ピット31基を検出した。しかしピット・土坑の大半は浅い凹み状であった。上層の包含層や遺構から出土した遺物から弥生時代前期後半と考えられる。

#### S K201

I区南部で検出された長方形の土坑で、全長80cm、幅50cm、深さ20cmを測る。埋土は黒灰色砂質シルトで、弥生土器の小片が出土した。その形状から墓坑の可能性があるが、棺の痕跡等は確認されていない。

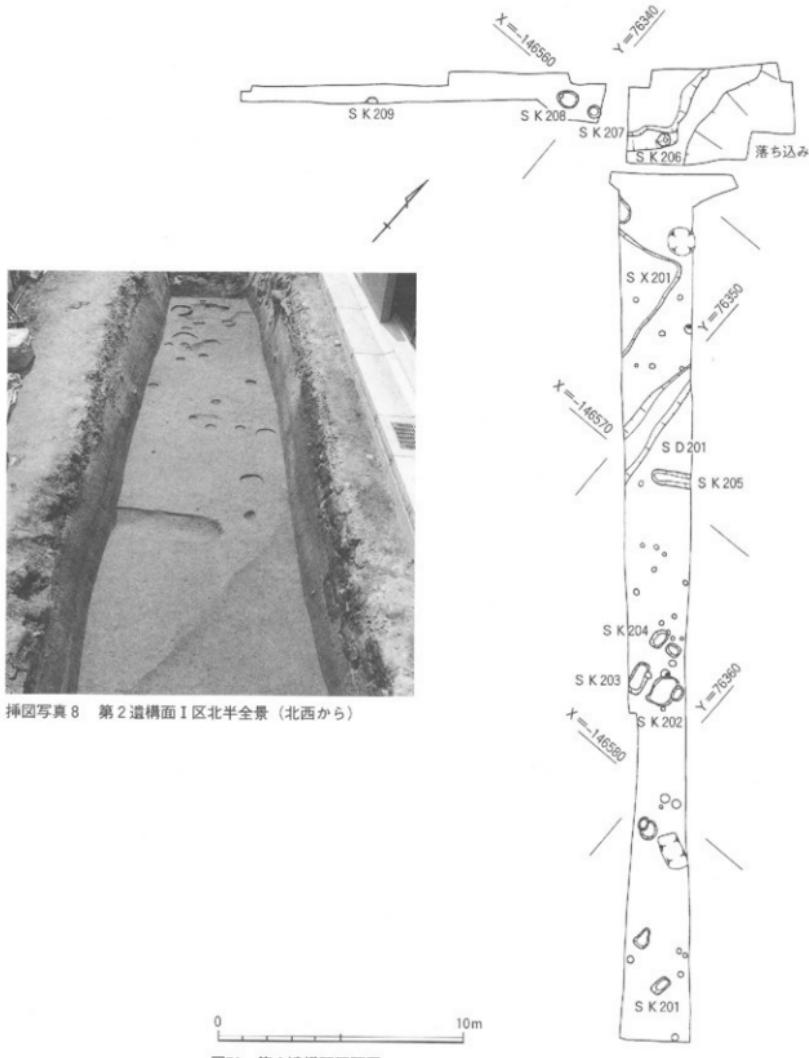
#### S K206～209

直径50cm前後の円形土坑で、深いもので検出面から30cm程度掘り込まれていた。炭粒が混じった暗灰色細

砂混じりシルトが堆積し、弥生土器が出土した。

#### S X201

I区北部で検出された検出長1辺4.0m、深さ10cm弱の竪穴住居状の遺構である。肩部はなだらかに落ち込み、周壁溝などは確認されなかった。弥生土器がわずかに出土した。



挿図写真8 第2遺構面I区北半全景（北西から）

図72 第2遺構面平面図

## 4. 4次-4調査

調査地は調査対象地の南西部分に位置する。区画整理地内の坂本線道路拡幅部分で、第3次-2調査地と第3次-5調査地に挟まれた箇所について調査を実施した。

## 基本層序（図74）

調査区の堆積状況はほぼ同一である。盛土・耕作土・旧耕作土・床土を除去すると、中世の遺物を含む旧耕作土状の堆積を経て、現地表面下約1.0mで遺構面と考えられる暗褐色砂質土・淡灰黄色粘砂を検出した。下層ではシルト・細砂・粗砂・砂礫といった河川堆積が確認された。

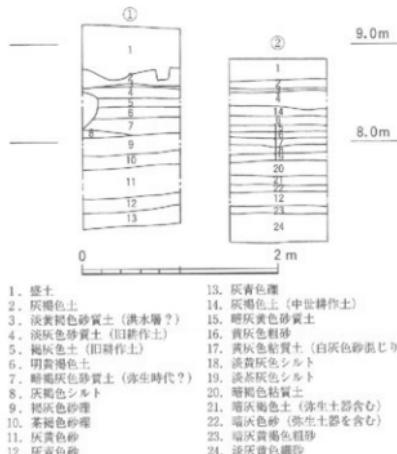


図74 基本土層図

## 遺構検出面（図75）

他の調査区で検出された弥生時代末～古墳時代初頭の遺構面は存在しなかった。暗褐色砂質土・淡灰黄色粘砂には弥生時代前期の遺物が含まれており、さらに下層に堆積する砂・シルト層からも同時期の遺物が出土した。周辺の調査成果より弥生時代前期の流路が存在すると考えられる。さらに調査区の北側で検出された砂礫中からは縄文時代晚期頃の遺物が出土しており、より古い時期の流路が存在すると考えられる。

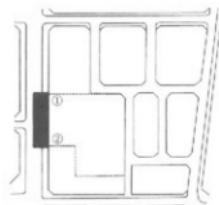


図73 調査地位置図



図75 調査区平面図

## 5. 4次-5調査

調査地は調査対象地の南東部に位置する。区画整理地内の道路部分で、第3次-4調査地北隣について調査を実施した。

### 基本層序 (図77)

盛土・旧耕土が堆積し、現地表面下1.0mで古墳時代初頭の包含層・遺構面を検出した。その下層には灰色砂礫など河川状堆積が確認された。

### 遺構検出面 (図78)

検出された遺構は土坑2基、溝1基、ピット6基である。北東部では削平が激しい。出土遺物から弥生時代末～古墳時代初頭と考えられる。

#### S K101

長さ1.6m、幅1.2m、深さ15cmの不整形な長楕円形土坑である。底部は凹凸が激しく一定しない。断面は皿形で、弥生土器・土師器片とともに、穿孔のある小型の砥石134が出土した。

#### 出土遺物 (図79)

弥生時代末～古墳時代初頭の土器片などが出土した。圓化したものは4点で、131は口縁端部をつまみ上げる壺の口縁部で、体部との境界は明瞭な稜線をもつ。133は口縁端部に面をもつ小型器台の口縁部である。134は小型の砥石で、最大長6.9cm、最大幅4.8cm、最大厚1.7cm、質量50.2g、比重2.236である。材質は輝緑凝灰岩の可能性がある。全面が磨面となっており、研磨痕跡が明瞭に確認できる。上方中央に穿孔を施している。上方左端部にも穿孔の痕跡が見られる。また、形状が何らかの刃部のように見えることから、転用品である可能性も指摘できる。

#### S K102

S K101と切り合う直径80cm、深さ15cmの円形土坑である。底部は凹凸が激しく一定しない。断面は皿形で、弥生土器もしくは土師器片が出士した。

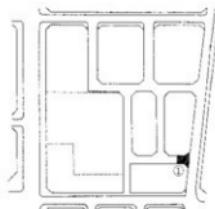


図76 調査地位置図

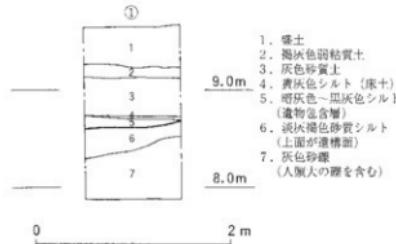


図77 基本土層図

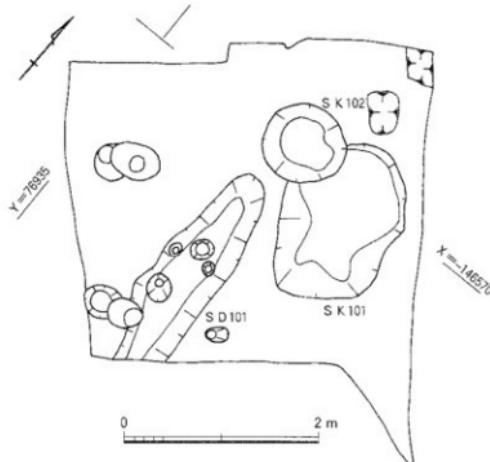


図78 調査区平面図

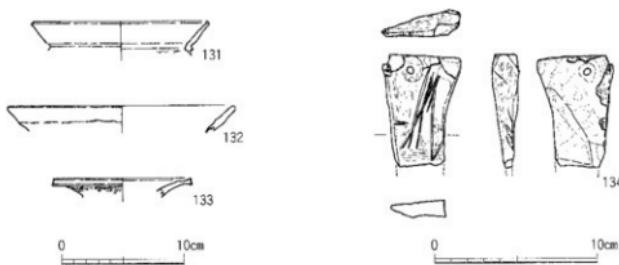


図79 SK 101出土遺物実測図

## S D101

調査区南西隅で検出された南北方向の溝である。検出長2.3m、幅70cm、深さ20cmで、断面形は開き気味のV字形、底面はピット状の溝があり一定していない。土器片が出土した。

## ピット

ほとんどが直径30cm前後の規模で、半数のピットで直径15cm、深さ20~40cmの柱痕跡を確認した。これまで検出されてきた建物の柱間と同様な規模であるため掘立柱建物である可能性が高い。柱穴からは弥生土器もしくは土器片が出土した。

## 6. 4次~6調査

調査地は調査対象地の南東部分に位置する。第3次~4調査地西隣で、北・東側は擁壁部分、南側は道路拡幅部分について調査を実施した。西接する個人住宅部分と一括して調査を実施したが、今回の報告ではS B 101を除き、住宅部分の記述は行なわない。

## 基本層序（図81）

盛土・旧耕作土が堆積し、現地表面下1.0mで弥生時代末~古墳時代初頭包含層を検出し、その上面が第1遣構面である。包含層を除去した後、遣構検出を行なったが遣構は検出されなかった。



図80 調査地位図

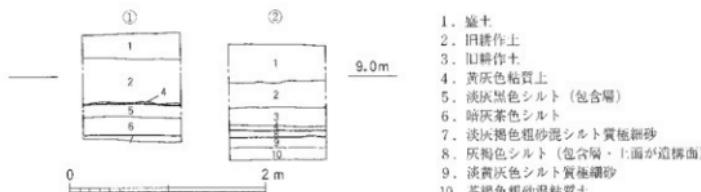


図81 基本土層図

## 第1遺構面（図82）

掘立柱建物1棟、溝5条、ピット4基を検出した。出土遺物から古墳時代初頭～前期と考えられる。

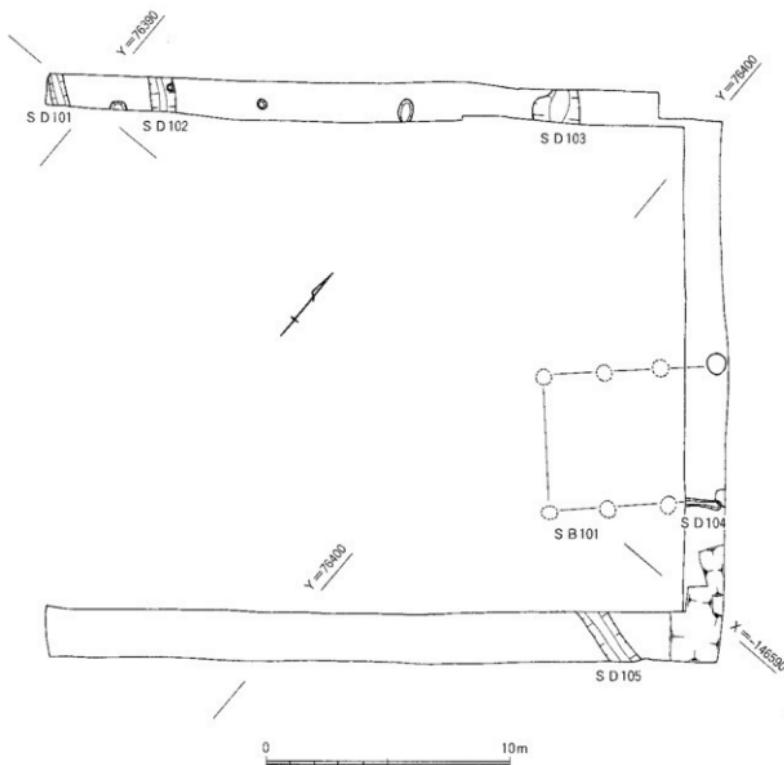


図82 調査区平面図

## SB 101（図83）

南半部で検出された1×3間以上の掘立柱建物である。柱穴はいずれも直径30cm前後、深さ30cmで柱痕跡は直径20cm前後である。東西の柱間隔は約1.3m、南北約2.8mである。建物方位は現在の地割とはほぼ同様である。柱穴から土師器の小片が出土した。柱穴は庄内式併行期の土器を含む包含層上面で検出されたことや、埋土から須恵器が出土しないことから、布留式併行期の遺構であると考えられる。

## その他遺構

溝は5条検出したが、大半が幅40cm、深さ10～20cmを測る。SD 103は幅1.0m、深さ30cmと規模はやや大きいが、未調査部分に延びており、不明な点が多い。

またピットも検出したが小規模であり、建物を構成するものとは考えられない。

## 包含層出土遺物（図84）

壺・壺・台付鉢・器台脚部が出土した。138は二重口縁壺で受部がやや内傾しており、口縁外面にはタタキ痕跡が残る。体部外面をハケで丁寧に仕上げる。内面は口縁部と体部の境界に明瞭な稜線をもつ。その形状から四国地方の影響を受けている可能性がある。135～137はいずれもV様式形壺で、135は体部径が口縁部径を大きく凌駕する。136は口縁端部が大きく外方に開き、肩部がやや張った形態である。137は口縁部と体部の境界が明瞭ではない。139は直線的に大きく外方に広がる台付鉢の脚部と考えられる。140は小型器台脚部で器部の内外面に、内部を斜線文で充填する鋸齒文を施す。

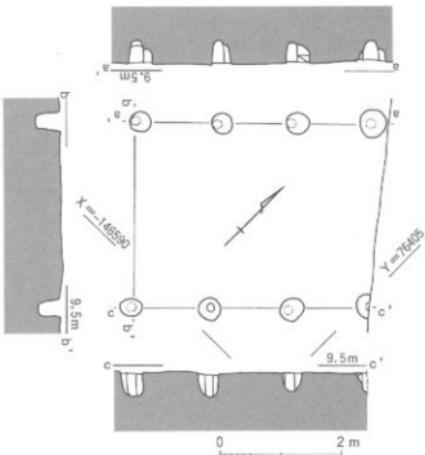


図83 SB 101平・断面図

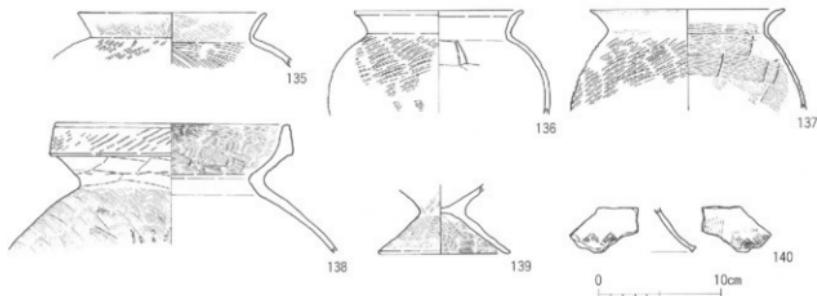


図84 包含層出土遺物実測図



挿図写真 9 調査状況

## 7. 第4次－7調査

調査地は調査対象地の北部中央に位置する。第1次調査地に北接する道路拡幅部分で、市営住宅入口部分に接していることや既存埋設管保護のため、調査区を3分割して調査を実施した。

### 基本層序（図86）

盛土・耕作土・旧耕作土・床土を除去すると、現地表面下90cm前後で第1造構面（平安時代）・古墳時代包含層・現地表面下1.0mで第2造構面（弥生時代末～古墳時代初頭）を、現地表面下1.3mで弥生時代前期の包含層を、さらにその直下で第3造構面（弥生時代前期）を検出した。

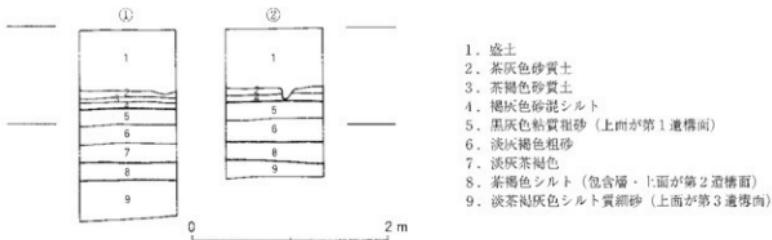


図86 基本土層図

### 第1造構面（図87）

掘立柱建物1棟、構列2列・溝1条・ピット8基を検出した。出土遺物から平安時代後半と考えられる。

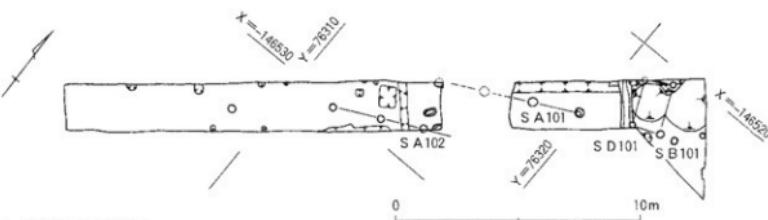


図87 第1造構面平面図

### S B101（図88）

調査区東部で検出された1×1間の掘立柱建物である。柱穴は直径30cm、深さ40cm、柱痕跡は20cm程度で、柱間距離は南北で約2.0m、東西で1.0mである。須恵器焼141が柱の抜き取り後に埋められた状況を確認した。

### 構列

調査区東半部で検出したS A101・中央部で検出したS A102があり、どちらも柱穴が直径30cm前後、深さ約40cm、柱痕跡は約20cm程度の規模で、柱間距離は約2.0mある。前者は3間分を、後者は2間分を検出し

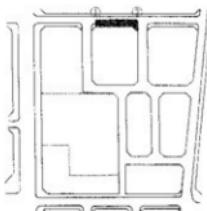


図85 調査地位置図



図88 S B101出土遺物実測図

たのみである。調査区が狭小なため不明な点が多いが、大規模な掘立柱建物である可能性もある。

## S D 101

調査区東端で検出した幅40cm、深さ20cmの南北方向の溝である。埋土は淡灰褐色粗砂混じりシルトの単層で断面形は逆薄鉢形である。弥生土器もしくは土師器小片が出土したのみであった。

## 第2造構面（図89）

溝1条・河道1条・落ち込み1ヶ所を検出した。包含層・出土遺物から弥生時代末～古墳時代初頭と考えられる。

## S R 201

調査地東端部で検出した河道で、検出長2.0m、深さ30cmを測る。肩部を検出したのみに止まっており、全体の規模等は不明なことが多い。遺物は出土しなかった。

## S X 201

調査区西部で検出した落ち込みで、検出長2.0m、幅3.5mで、深さ40cmを測る。埋土は淡黄灰色シルト質極細砂で、遺物は出土しなかった。

## S D 201

調査区東半部で検出した溝で、規模は幅30cm、深さ20cmを測る。濁灰褐色砂質土が堆積しており、断面形はU字形である。遺物は出土しなかった。ただし東側で検出した河道との位置関係から、河道の堆積の一過程を示す可能性が高い。

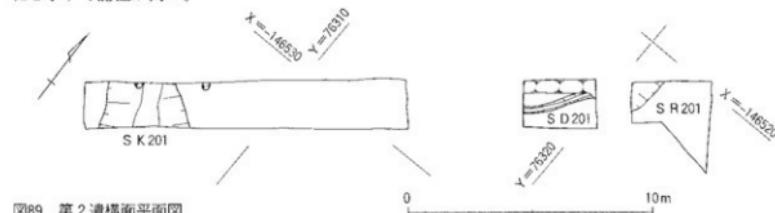


図89 第2造構面平面図

## 第3造構面下層出土遺物（図90）

造構面下層の堆積層から弥生土器・石鎚が出上した。142は壺口縁で、ナデにより端部を上下に拡張する。143は壺口縁で垂下した口縁端面に凹線を施す。胎土はかなり精良である。144は壺体部で算盤玉形である。体部上半をハケで、下半をヘラミガキで仕上げる。内面中位に爪痕が明瞭に残る。石鎚（写真図版35-3）は全長3.7cm、幅1.8cm、厚さ4.75gで、平基式のものである。弥生時代中期～後期のものと考えられる。

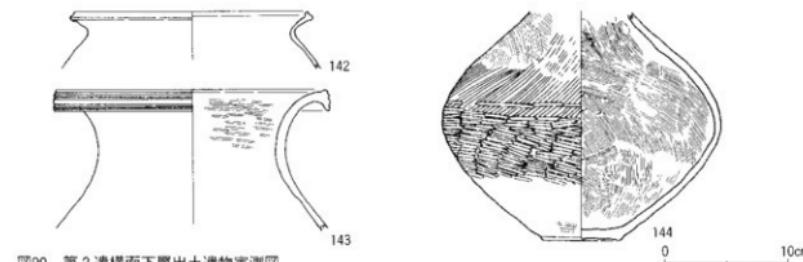


図90 第2造構面下層出土遺物実測図

## 第3遺構面（図91）

遺構は東端および西端で検出され、土坑1基・溝1条・河道状落ち込み1ヶ所を検出した。包含層、遺構出土遺物から弥生時代前期後半と考えられる。

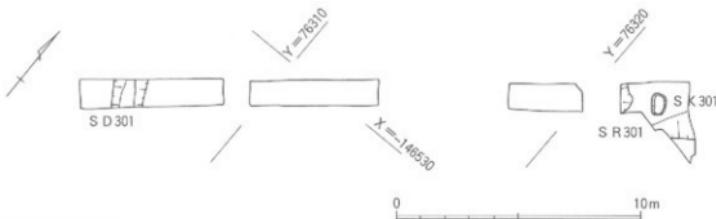


図91 第3遺構面平面図

## S D 301

東端で検出した長さ約90cm、幅約60cm、深さ約30cmを測る隅丸方形の土坑である。断面は若干いびつな逆鉢形で底面は一定ではない。埋土は、暗灰色シルトで炭粒が多く交じっており、土器片・サヌカイト剥片が出土した。

## S K 301

調査区西端で検出した南北方向の溝である。規模は幅1.3m、深さ2.0mを測る。断面形は皿形である。埋土からは遺物は出土していない。断面観察等から上層のSX 201は、この溝を踏襲して形成されていたようである。

## S R 301

調査区東端で検出した河道状落ち込みである。上層の河道とほぼ同じ場所で検出した。灰色粗砂がかなり鋭角に落ち込む。既存埋設管の保護のため掘削不能の部分があり、幅・深さ等不明な点が多いが幅5mを超える規模と推定される。弥生土器片が出土した。



挿図写真10 第2遺構面全景（南西から）



挿図写真11 第3遺構面東部全景（北東から）

## 8. 4次-8調査

調査地は調査対象地の南部に位置する。区画整理地内の第4次-5調査区西隣の道路予定地部分（I区）と事業地南側の道路に面する擁壁部分（II区）について調査を実施した。

## 基本層序（図93）

I区は盛土・洪水平砂・旧耕作土・旧床土が堆積し、現地表面下80cmで第1遣構面（弥生時代末～古墳時代前期包含層）、現地表面下90cmで第2遣構面（弥生時代後期～古墳時代初頭）、現地表面下1.0mで第3遣構面（弥生時代中期）、現地表面下1.2mで第4遣構面（弥生時代前期）を確認した。なお、最下層の淡灰色シルト上面で縄文時代と思われる土器片がごくわずか出土した。

II区は盛土・旧耕作土が堆積し、現地表面下1.4mで遣構面基盤層である淡褐色シルト質細砂を検出した。

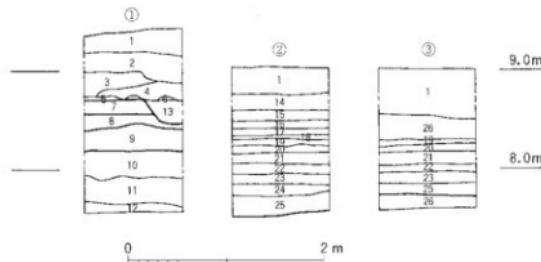


図93 基本土層図

## 第1遣構面（図95）

黄褐色粘性砂質土を除去した後、調査区東半は包含層上面で、調査区西半は灰褐色砂上面で検出した遣構面である。土坑1基、溝6条、ビット多数を検出した。調査時は平安時代と考えていたが、その後の周辺の調査結果や検出された数基のビットから弥生土器・土師器が出土したことなどから、平安時代および弥生時代末～古墳時代初頭の遣構面と考えられる。

東半のビット群は東西方向に並ぶものが見受けられるが、掘立柱建物としては確認できなかった。遣構の埋土はほとんどが暗褐色シルト質土である。また、溝は規模や方向性から鶴溝と考えられる。

## 出土遺物（図94）

145はS P 143から出土した小型の鉢で、体部は比較的浅く、口縁部は大きく外方に開き端部をわずかに上方につまみあげる。突出した平底をもつ。146は遣構面直上層から出土した脚付の小型鉢である。145と比べるとやや体部は深い。大きく外方に聞く短い脚部を持つ。

図94 S P 143・遣構面直上層出土遺物実測図

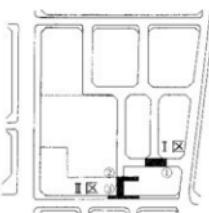
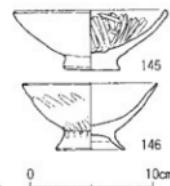


図92 調査地位置図

1. 盛土
2. 明黄褐色砂質土（洪水平砂）
3. 明黄褐色粘性砂質土
4. 黄褐色砂質土
5. 淡褐色粘性砂質土（灰褐色）
6. 灰褐色粘性砂質土（灰褐色）
7. 灰褐色粘性砂質土（灰褐色）
8. 灰褐色粘性砂質土（灰褐色）
9. 淡褐色粘性砂質土（灰褐色）
10. 淡褐色粘性砂質土（灰褐色）
11. 淡褐色粘性砂質土（灰褐色）
12. 淡褐色粘性砂質土（灰褐色）
13. 淡褐色粘性砂質土（ビット埋上）
14. 黄褐色砂質土
15. 黄褐色粘性砂質土
16. 淡褐色粘性砂質土
17. 黄褐色粘性砂質土（灰褐色）
18. 黄褐色粘性砂質土
19. 黄褐色粘性砂質土
20. 黄褐色粘性砂質土
21. 黄褐色粘性砂質土
22. 底茎色シルト
23. 取糞褐色シルト
24. 淡褐色シルト
25. 淡褐色シルト質細砂（上部が遣構面）



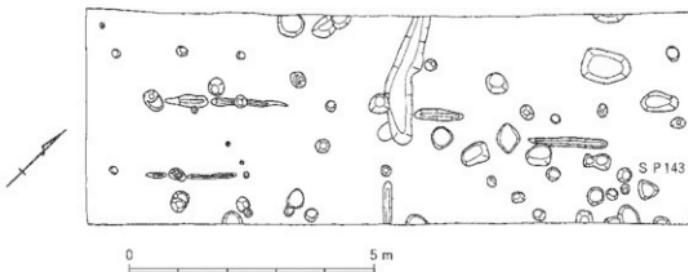


図95 I区第1遺構面平面図

## 第2遺構面（図96）

調査区東半で、暗褐色粘性砂質土を除去して検出した遺構面である。土坑2基、落ち込み1ヶ所、溝1条、ピットを検出した。出土遺物から弥生時代後期～古墳時代初頭と考えられる。

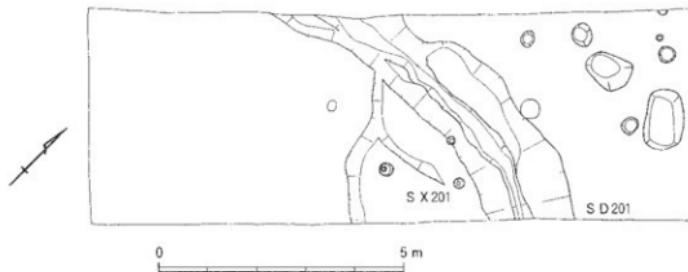


図96 I区第2遺構面平面図

## S X 201（図97）

調査区中央で検出した浅い落ち込みで、最大長3.6m、最大幅2.6m、深さ10cm前後を測る。遺構の南北はSD 201と切り合っているため、明確ではない。主に遺物が集中しているのは南肩付近で、数cm大～人頭大までの多くの縁とともに、庄内式併行期に属すると考えられる土器が出土した。

## 出土遺物（図97）

図化したものは2点である。147は大きく直線的に広がる円錐形の高坏脚部で、裾部に円孔を施す。裾部の接地面はしっかりとした面をもつ。外面をヘラミガキで、内面をヨコハケで仕上げる。148は甕で口縁はやや外反しながら外方に開き、内面の口縁部と体部の境界は明瞭な稜線をもつ。外面全体に細かいタタキを施す。



図97 S X 201遺物出土状況図・出土遺物実測図  
S D 201

調査区中央で検出した東西方向に緩く弧を描く溝である。検出長5.5m、幅1.8m、深さ40cmで、埋土は上層が暗褐色粘質土、中層が暗褐色粘性砂質土、下層が灰褐色粗砂である。弥生土器片とサスカイトが出土した。

### 第3遺構面(図98)

溝2条とピットを検出した。出土遺物から弥生時代中期と考えられる。遺構面直上層からは口縁端部を上下に拡張し、端面に凹線文を施す広口壺149が出土した。口縁部内面には列点文・頸部外面に熊状の文様を

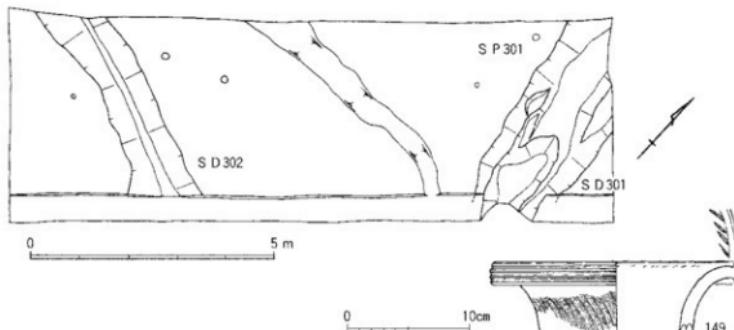


図98 I区第3遺構面平面図・直上層出土遺物実測図

施す。弥生時代中期後半頃のものと考えられる。

#### S D 301

調査区西端で検出した南北方向の溝である。幅1.9m、深さ80cmで、埋土は黄褐色砂から暗褐色砂である。強い水流があったようで、壁面や底面は平坦ではなく凹凸が著しい。弥生土器が出土した。

#### S D 302

調査区東半で検出した北西～南東方向に流れる溝である。幅1.1m、深さ30cmを測り、断面は浅いV字形を呈する。弥生土器が出土した。

#### S P 301

S D 301西側で検出したピットである。直径24cm、深さ27cmで、埋土は暗茶褐色粘性細砂質土を主体とする。弥生土器が出土した。

#### 第4造構面（図99）

淡褐色細砂上面で検出した造構面である。中央部から西は緩く傾斜していき、約20cmほど深くなる。造構は、溝とピットを検出した。出土遺物から弥生時代前期～中期と考えられる。

直上層からは、弥生時代前期の土器が出土した。岡化したものは1点で、頸部に5条以上のヘラ搔沈線を施す広口壺口縁部150で、牛駒西麓の胎土で作られており、搬入品と考えられる。

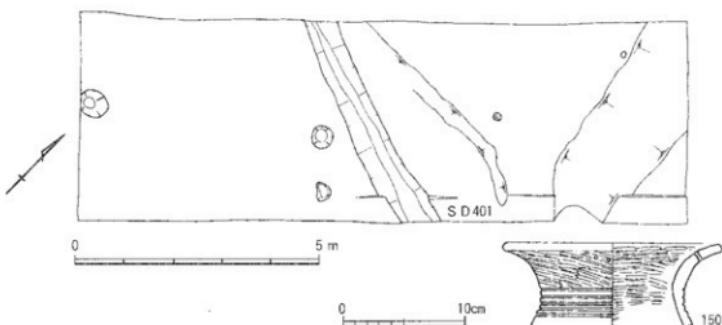


図99 I区第4造構面平面図・直上層出土遺物実測図

#### S D 401（図100）

調査区中央で検出した北西～南東方向の溝である。検出長4.0m、幅86cm、深さ33cmで、埋土は暗褐色シルト質細砂を主体とする。菱形土器が、底部が欠損しているものの、ほぼ直立した状態で出土した。検出は第4造構面であったが、上層断面観察・出土遺物から考えると第3造構面の造構であった可能性が高いと考えられる。

#### 出土遺物（図100）

151は壺で、口縁端部はわずかに垂下し面をもつ。体部はあまり張らず体部の中位で最大径をもつ卵型である。内外面とも煤が付着する。外面は上半・下半を細かいハケで、中央を粗いハケで仕上げる。内面はユビナデ・板ナデで仕上げる。

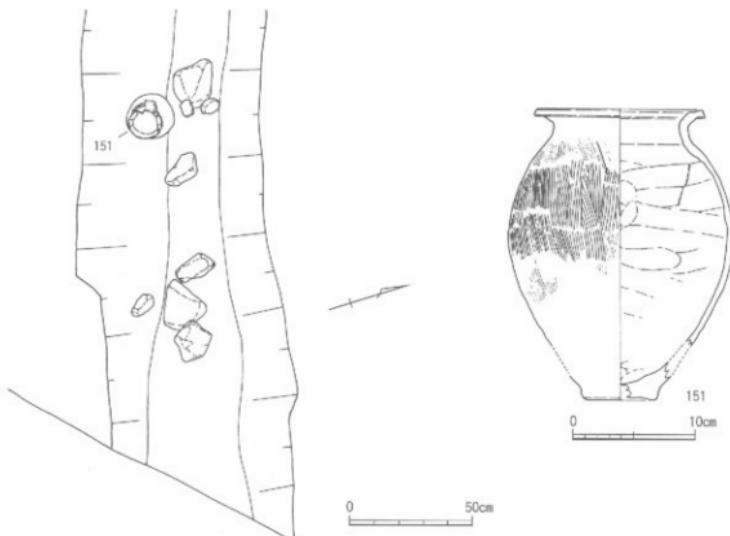


図100 SD 401遺物出土状況図・出土遺物実測図

## II区（図101）

灰褐色粘性砂質土以下、各層ごとに精査を行なったが遺構は確認されず、現地表下約1.3mの淡褐色シルト質細砂上面でピット、土坑を検出した。出土遺物から弥生時代前期後半と考えられる。

各遺構の埋土は茶灰色細砂で、深さ10cm以下の浅いものがほとんどである。遺構からは、弥生土器の小片が出土した。ピットは他の遺構同様に浅く、多数検出されたが、建物としてまとまるものは確認されなかつた。

なお、II区の南端部分は、遺構・遺物が確認されず、図示しなかつた。



挿図写真12 II区全景（西から）

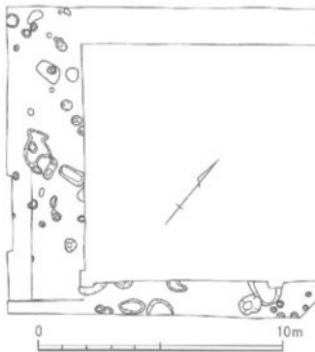


図101 II区平面図

### 9. 第4次-9調査

調査地は調査対象地の北部中央に位置する。区画整理地内の道路予定地について調査を実施した。なお西隣接する個人住宅部分と一括して調査を実施した。

#### 基本層序（図103）

現地表面から盛土、旧耕作土、現地表面下70cm前後で第1遺構面（平安時代）、同80cm前後で第2遺構面（弥生時代末～古墳時代初頭）、同1.4m前後で第3遺構面（弥生時代前期後半）を検出した。

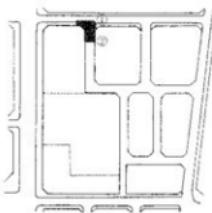


図102 調査地位置図

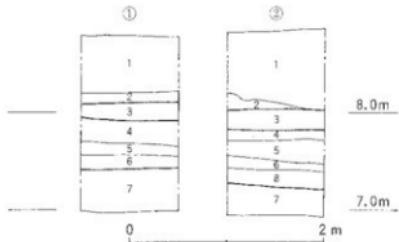


図103 基本土層図

#### 第1遺構面（図104）

弥生時代末～古墳時代初頭の包含層上面で検出された。南西方向に緩やかに傾斜しており、溝・土坑等が数基検出されたに留まる。遺物は少量出土したのみであったが、周辺の状況から平安時代と考えられる。

##### S K101

長径約2.2m、短径約1.7m、深さ15cmの不定円形の土坑である。遺物は出土しなかった。

##### S K102

長径1.8m以上、短径約1.6m、深さ15cmの不定形の土坑である。直徑10cm程度の円碟を10数点検出したのみであった。

##### S X101

深さ10cm程度の不定形の落ち込みで、調査区西側に続く造構で全体の規模は不明である。遺物は出土しなかった。

##### S D101

S X101、S K101、S K102の下層で検出された幅約1.5m、深さ約60cmの東西方向の溝で、平安時代後半の遺物が少量出土した。

1. 盛土
2. 旧耕作土
3. 暗灰色砂質土（上面が第1遺構面）
4. 淡灰色砂質土
5. 暗灰色シルト（上面が第2遺構面）
6. 青灰色シルト
7. 灰白色砂（上面が第3遺構面）
8. 淡灰色砂

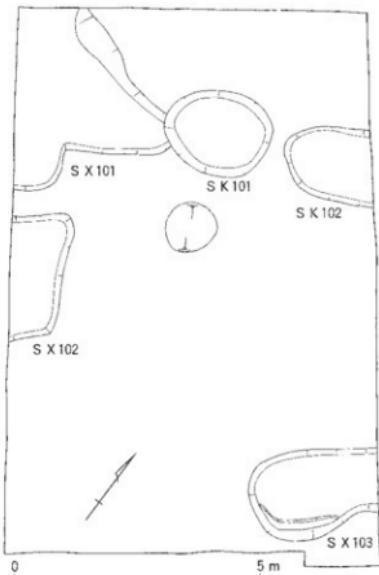


図104 第1遺構面平面図

## S X102

短辺1.8m、長辺2.6m以上の不定形の遺構である。遺物の出土はない。

## 第2遺構面（図105）

溝と不明土坑を検出した。出土遺物から弥生時代末～占墳時代初頭と考えられる。

## S D201

幅約2.0m、深さ80cmの溝で、調査区のはば中央を南北方向に流れる溝である。弥生土器もしくは土師器が少量出土した。

## S X201

短辺約2.3m、長辺約3.7mの不定型の遺構である。北端部は逆L形に曲がる溝が付設されている。当溝の用途は不明である。南辺部は2段に落ち込み、南壁に取り付く溝が確認できた。用途は不明である。

## 第3遺構面（図106）

柱穴、土坑等を数基検出した。出土遺物から弥生時代前期後半と考えられる。

## S P301（挿図写真13）

直径約50cm、深さ30cmの柱穴で、弥生時代前期後半のヘラ掃沈線を施す壺胴部が出土した。対応する柱穴は検出できなかった。

## S K301

短辺約50cm、長辺1.0m以上、深さ約5cmの土坑である。杭状木製品の痕跡が検出された。



挿図写真13 S P301出土遺物

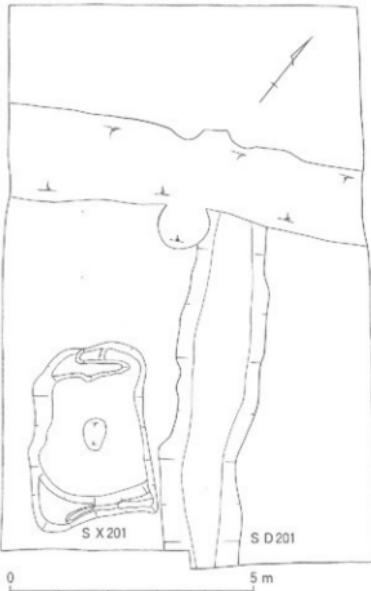


図105 第2遺構面平面図



図106 第3遺構面平面図

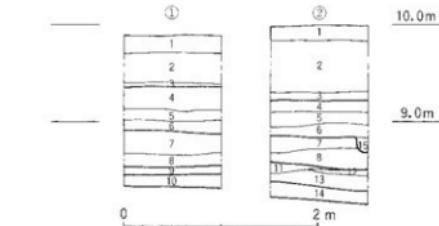
## 第4節 第12次調査

### 1. 第12次-1調査

調査地は調査対象地の北部中央に位置する。区画整理地内の市営住宅の東隣で第4次-2調査地と第4次-3調査地・第17次-1調査地に挟まれた道路部分について調査を実施した。

基本層序（図108）

盛土・旧耕作土が堆積し、現地表面下1.0mで第1遺構面（弥生時代末～古墳時代初頭）同1.1mで第2遺構面（弥生時代中期～後期）、同1.2mで第3遺構面（弥生時代中期）、同1.4mで第4遺構面（弥生時代前期後半）、同1.5mで第5遺構面（弥生時代前期後半）を検出した。



1. 表土

2. 旧耕作土

3. 植林土

4. 淡灰色砂質土（上面が第1遺構面）

5. 深灰色粘質土

6. 淡灰色粘質土（上面が第2遺構面）

7. 淡黄色砂質土

8. 淡茶褐色砂質土

9. 茶灰色砂質土（上向が第3遺構面）

10. 灰色砂砾（上面が第4遺構面）

11. 灰色砂砾～粗砂

12. 暗茶灰色砂質シルト（上面が第3遺構面）

13. 離系褐色砂質シルト

14. 淡灰褐色砂砾（上面が第4遺構面）

15. 暗茶褐色砂質シルト（ピット底土）

図108 基本土層図

第1遺構面（図109）

堅穴住居3棟・溝4条・落ち込み1基、ピット多数を検出した。出土遺物から弥生時代末～古墳時代初頭と考えられる。

S B101（図110）

調査区北部で検出された堅穴住居で、南北4.3m、東西2.0m以上を測り、床面までの深さ10～20cmである。検出した範囲内では幅20cm、深さ10cmの周壁溝が全周する。貼床などの施設は検出されていない。柱穴は2基検出されており、いずれも直径15cm程度の柱材であったと考えられる。また、中央土坑は確認されなかった。

弥生時代末～古墳時代初頭の土器片が出土したが、図化に耐えるものはなかった。

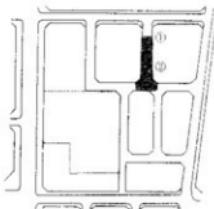


図107 調査地位置図

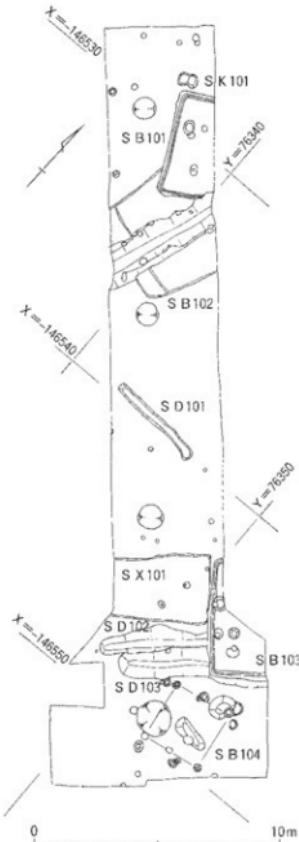


図109 第1遺構面平面図

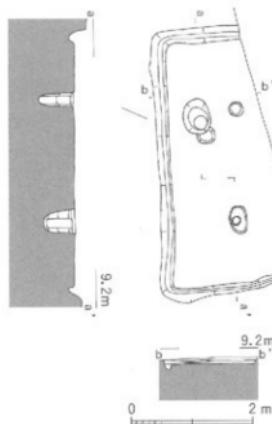


図110 S B101平・断面図  
S B102(図111)

調査区北部で検出された竪穴住居で、南北4.5m、東西3.8m以上、床面までの深さ20cmを測る。南辺には幅約60cm、高さ約5cmのベッド状遺構が検出されたが、北辺はS B101や近世溝の搅乱によりベッドの有無は確認できなかった。床面では柱穴、周壁溝、中央土坑などは検出されていない。埋土からは弥生時代末～古墳時代初頭の土器・サヌカイト片などが出土したが、図化に耐えるものはなかった。

#### S B103(第17次-1調査と重複)(図112)

調査地南端部で検出された竪穴住居で、東側の一部は第17次-1調査地に延びていた。長辺7.0m、短辺5.0m、床面までの深さ5～10cmを測る。幅20cm、床面からの深さ10cm前後の周壁溝が西辺部及び南辺部中央まで検出された。今回は調査地の形状に制約され、遺構の大半は未検出のままである。床面ではピットを数基検出したが、住居に伴うものは確認されなかつた。

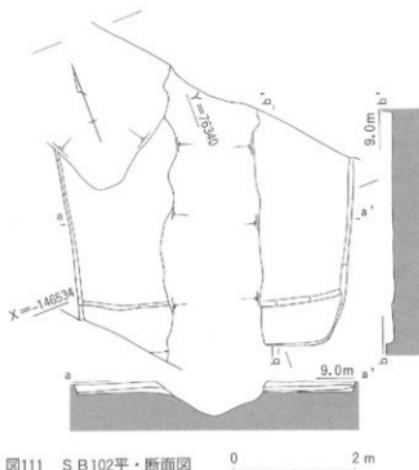


図111 S B102平・断面図

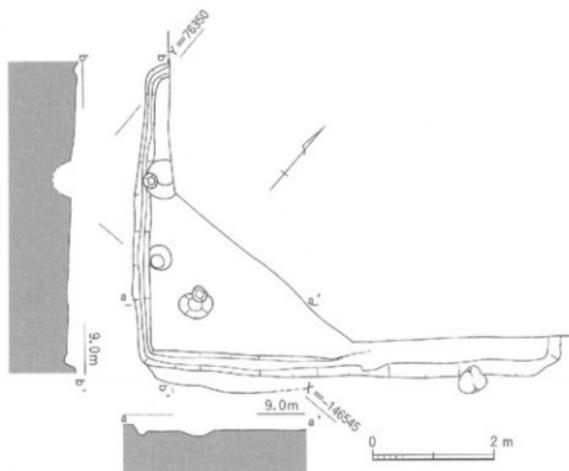


図112 S B103平・断面図

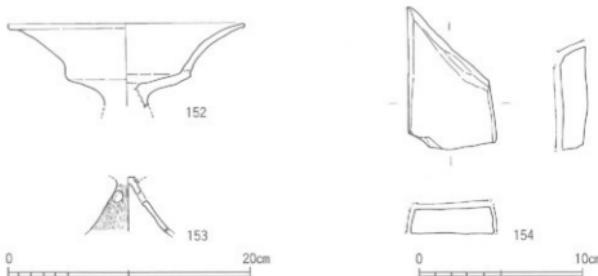


図113 S B103出土遺物実測図

## 出土遺物（図113）

図化したものは高壇・脚部・砥石である。152は高壇で狭い体部から口縁がやや外反し大きく外方に開くものである。153は脚部で比較的小型で、器台の脚部である可能性がある。154は砥石で、最大長9.0cm、最大幅5.5cm、最大厚1.6cm、重量114g、比重2.607である。破損した部分を除き4面に磨面を確認した。石材は石灰岩である可能性が高い。

## S B104（図114）

調査区南部で検出された1×2間の掘立柱建物である。主軸はほぼ磁北に平行する。柱穴は直径約30cm、深さ約30cmで、柱間は南北2.4m、東西1.2mで南北間の柱間のはうがかなり広い。柱穴から弥生土器片が出土したが、図化に耐えうるものはなかった。

## S K101

調査区北端で検出された土坑で、長径80cm、短径53cmを測る。2段落ちで、深さは65cmである。

弥生土器小片が出土したが、図化に耐えうるものはなかった。

## S D101

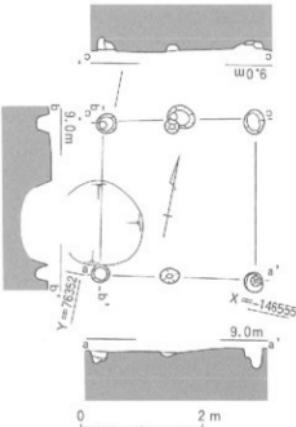
調査区中央で検出された東西方向の溝で、検出長4.0m、幅40cm、深さ10cmで断面形は箱型である。遺物は出土しなかった。

## S D102・103

調査区南部で検出された東西方向の溝で、S D102は検出長4.3m、幅30~55cm、深さ30cm、S D103は検出長6.0m、幅50cm、深さ30cmを測る。溝西側はS B103と切りあう。いずれも埋土は暗灰色砂質シルトが堆積する。弥生土器小片が出土したが、図化に耐えるものはなかった。

## S X101

調査区南部で検出された竪穴住居状の落ち込みで、東西長4.0m以上、南北長2.8m、深さ10cmである。内



部で3基のピットを検出した。周壁溝やベッド状遺構などの施設は確認されなかった。

### 第2遺構面（図115）

検出した遺構は、溝3条・ピット16基である。上層の遺構による搅乱により、ピットは建物として復元できるものは確認されなかった。切り合い関係や出土遺物から弥生時代中期～後期の遺構面と考えられる。

#### S D 201

調査区北部で検出された南北方向の溝で、検出長3.8m、幅60cm、深さ20cmである。断面形は皿形で暗灰色および灰色砂質土が堆積していた。弥生土器の小片が出土した。

#### S D 202

調査区南部で検出された南北方向の溝で、検出長5.0m、幅90cm、深さ20cmである。溝の北部はS D 203と切りあう。断面形は皿形で茶褐色粘質土・茶灰色粘性細砂が堆積する。弥生土器の小片が出土した。

#### S D 203

調査区南部で検出された溝で、検出長2.2m、幅1.3m、深さ20cmを測る。検出した位置から、上層のS D 103はこの遺構を踏襲したものと考えられる。弥生土器の小片が出土した。



挿図写真14 第2遺構面（南東から）

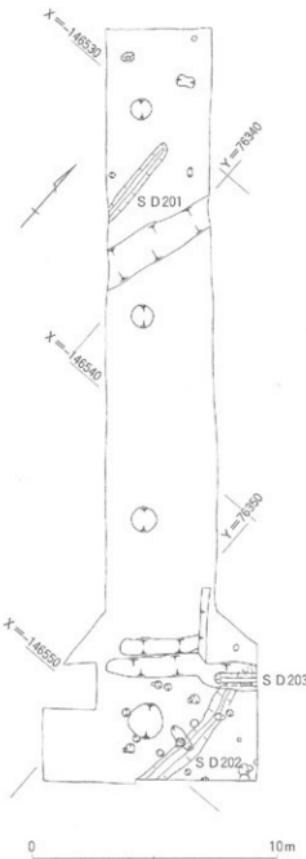


図115 第2遺構面平面図

### 第3遺構面（図116）

不整円形の落ち込み1基・溝2条・ピット14基を検出した。ピットは建物としてまとまるものはなかった。出土遺物から弥生時代前期～中期と考えられる。

#### S D 301

調査区中部から南部で検出された南北方向の溝で、検出長10.0m、幅60cm、深さ30cmを測る。北部で一旦緩く弧を描き、その後直線的に南に向かう。埋土は暗灰色砂質シルトが堆積し、弥生土器、サヌカイト片が出土した。

## S D 302

調査区南部で検出された北側に弧を描く溝で、検出長3.0m、幅10cm、深さ10cmを測る。遺物は出土しなかった。

## S X 301

調査区北縁で検出された円形の落ち込みで、最大径6.0m、深さ5cm前後である。内部には土坑5基・ピット10基を検出した。その中にはS X 301に伴う柱穴と考えられるものは存在せず、住居跡の可能性は低い。土坑は最大のものは長径1.2m、短径80cm、深さ20cmで、平均的な規模は直径60cm前後、深さ10~20cmを測る。断面形は箱形もしくは浅い皿形である。弥生土器の小片及びサヌカイト製の石錐・楔形石器・小剣片が出土した（表3）。

## 第4造構面（図117）

検出した造構は溝1条、不整円形の落ち込み1基、不整形の落ち込み1基、土坑2基、ピット9基である。

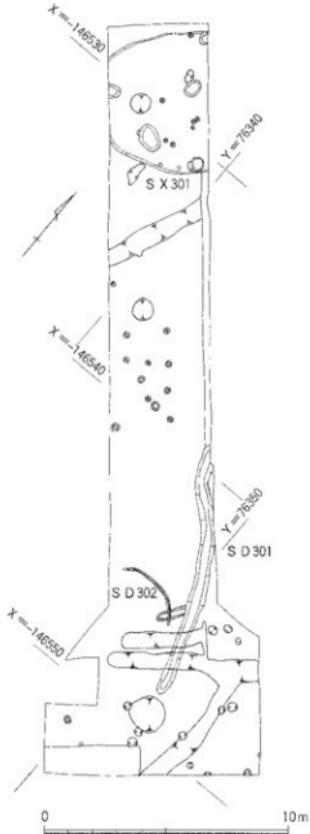


図116 第3造構面平面図



図117 第4造構面平面図

直上層からは弥生土器片・石鎚・楔形石器などの製品と共にサヌカイト剥片が多く出土した。出土遺物から弥生時代前期と考えられる。

#### S K401 (図118)

調査区中央 S D301に一部切りあう形で検出された梢円形の土坑で、長径60cm、短径推定50cm、深さ25cmを測る。弥生土器片とともにほぼ完形の鉢が1点出土した。また多量のサヌカイト片と、石鎚が出土した。

#### 出土遺物 (図118)

155は鉢で、低い高台状の底部から大きく外方に広がり、口縁端部がさらに外方に広がる。また石鎚が5点出土した(表3)。

#### S K402 (写真図版38-1)

調査区南部で検出された梢円形の土坑で、長径90cm、短径60cm、深さ20cmを測る。弥生土器小片、石鎚、石鎌、削器、楔形石器が出土した(表3)。

#### S X401 (写真図版38-1)

調査区中央で検出された半円形の落ち込みで、検出部分での直径4.5m、深さ25cm前後を測る。遺構の中にはさらに溝状の落ち込みを検出した。柱穴は検出されなかった。弥生土器小片、石鎚、サヌカイト剥片が出土した(表3)。

#### S X402

調査区中央で検出した三角形の落ち込みで、長辺2.5m、短辺1.8m、深さ5cmを測る。弥生土器の小片が出土した。

#### S D401

調査区南部で検出された東西方向の溝で、検出長3.0m、幅40cm、深さ10cmを測る。断面形は皿形で、弥生土器の小片が出土した。

#### 第5遺構面 (図119)

河道状の落ち込み1ヶ所・溝3条・土坑1基・落ち込み1基・ピット6基である。直上層では多量のサヌカイト剥片と共に石鎚・石鎌・楔形石器・削器などの製品も出土した。包含層・遺構出土遺物から弥生時代前期後半と考えられる。

#### S R501

調査地北部で検出された河道肩部で、検出長4.8m、幅7.0m以上、深さ1.0m以上である。拳大から人頭大の礫が大量に堆積していた。第4次-2調査最終面でも同様の堆積が見られており、かなり広い川幅を持っていたと推測される。弥生土器及び縄文土器と考えられる上器小片が出土した。

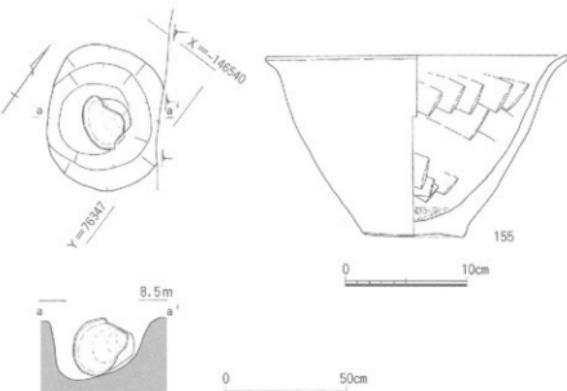


図118 S K401平・断面図・出土遺物実測図

## S D 501

調査区北半で検出された南北方向の溝である。検出長2.7m、幅70cm、深さ35cmである。底面は南側に落ち込む。弥生土器片が出土した。

## S D 502

調査地南部で検出された東西方向の溝である。検出長6.6m、幅2.4m前後、深さ30cmである。断面形は二段落ちの形状である。埋土は黒灰色シルトで弥生土器が大量に出土し、下段底部ではほぼ完形の壺(156)が1点出土した。

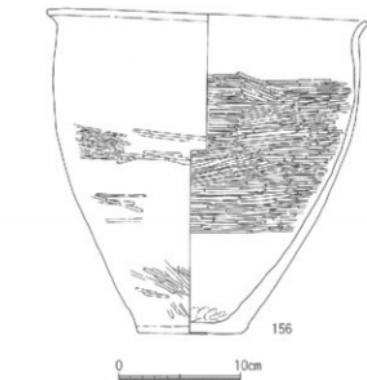
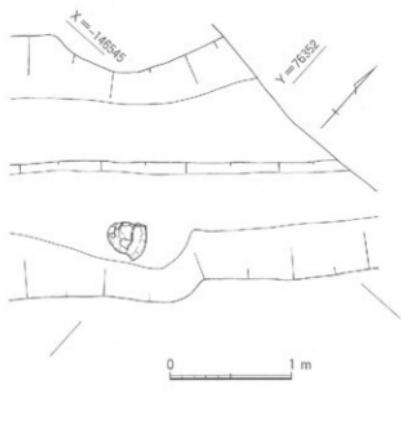


図120 S D 502遺物出土状況図・出土遺物実測図

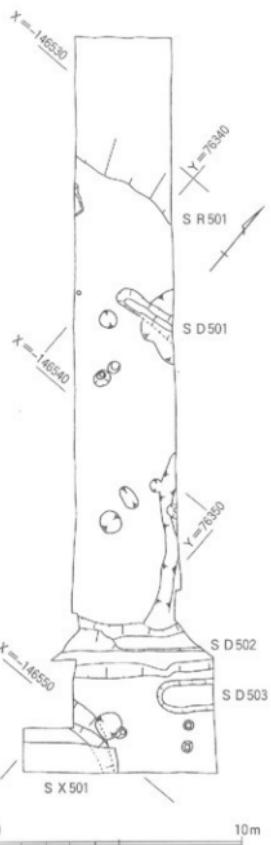


図119 第5柵横面平面図



挿図写真15 S D 502遺物出土状況（南から）

## S D503

調査地南部で検出された東西方向の溝で、検出長2.3m、幅1.3m、深さ10cmである。断面形は皿形で、弥生土器小片が出土した。

## S X501

調査区南端で検出された落ち込みで、検出長2.5m、検出幅3.5m、深さ20cm以上である。弥生土器片及びサヌカイト片が出土した。第4次-3調査地の落ち込みと同一の遺構と考えられる。

## 包含層出土遺物（図121）

包含層から大量の弥生土器が出土した。そのうち圓化したものは3点で、157は体部に3条のヘラ描沈線を施す壺で、158はやや深い鉢で、体部に2条のヘラ描沈線を施す。159は牛駒西麗の胎土で作られた壺である。口縁端部に刻目を、頸部には5条のヘラ描沈線を施す。

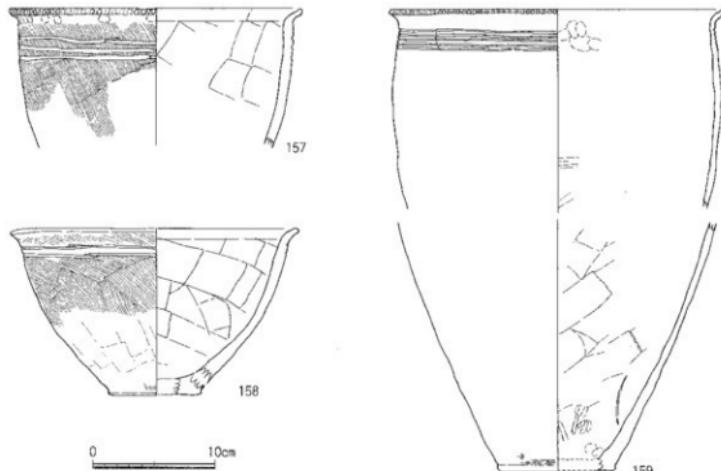


図121 包含層出土遺物実測図

番号	種別	形式	長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重量(g)	出土遺物	番号	種別	形式	長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重量(g)	出土遺物
a	石鏡	凹基	2.7	1.36	0.33	0.9	S X401	m	石鏡	凹五基	2.06	1.3	0.25	0.6	S K402
b	石鏡	凹五基	2.52	1.27	0.25	0.7	S X401	n	石鏡	凹基	2.11	1.59	0.33	0.9	S K402
c	石鏡	凹五基	1.89	1.23	0.25	1.1	S X401	o	石鏡	凹基	1.68	1.19	0.28	0.5	S P401
d	石鏡	平基	1.71	1.4	0.25	0.6	S X401	p	石鏡	凹基	1.63	1.47	0.3	0.5	S P403
e	石鏡	平基	1.68	0.98	0.27	0.5	S X401	q	石鏡	棒	3.55	1.16	0.62	2.7	S X301
f	石鏡	凹基	2.05	1.66	0.29	0.8	S K401	r	石錐?	棒?	0.73	0.73	0.29	0.4	S X301
g	石鏡	凹基?	2.52	1.48	0.29	0.7	S K401	s	石錐	つまみ	2.82	1.21	0.38	1	S K402
h	石鏡	凹五基	2.32	1.52	0.37	0.8	S K401	t	石錐	棒	1.53	0.48	0.36	0.3	S K402
i	石鏡	凹五基	2.47	1.38	0.33	0.6	S K401	u	楕形	-	2.5	2.12	0.83	4.3	S K402
j	石鏡	凹五基	2.25	1.44	0.33	0.6	S K401	v	楕形	-	2.99	1.67	0.62	3.6	S K402
k	石鏡	凹五基	2.47	1.42	0.38	0.7	S K402	w	楕形	-	2.53	1.99	0.37	2.3	S K402
l	石鏡	凹基	2.25	1.39	0.36	0.6	S K402	x	楕形	-	2.04	1.76	0.39	1.3	S X301

表3 第12次-1調査遺構出土石器一覧

## 2. 第12次－2調査

調査地は調査対象地の南部中央に位置する。造成時の削平部分について調査を実施した。

### 基本層序（図123）

盛土・旧耕作土が堆積し、現地表面下85cmで弥生時代前期の土器を含む包含層を、その直下層で遺構面を検出した。この調査区では弥生時代中期～古墳時代初頭までの遺構面は存在しなかった。

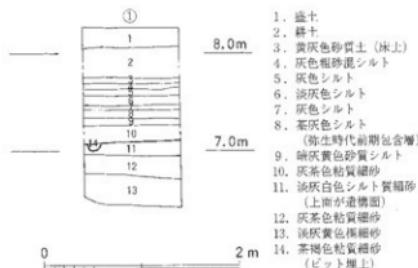


図123 基本土層図

### 遺構検出面（図124）

検出した遺構は、落ち込み1基・円形土坑2基・ピット26基である。ピットを数多く検出したが、いずれも深さが、5～10cmと浅く、柱穴と考えられるものは存在しない。出土遺物から弥生時代前期後半と考えられる。

#### S K101

調査区北部検出された円形土坑で、直径2.2m、深さ10cmを測る。遺物は出土しなかった。

#### S K102

調査区北部で検出された土坑で、SK101などにより一部削平される。検出長45cm、深さ10cmを測る。遺物は出土しなかった。

#### S X101

調査地北部で検出された落ち込みで、検出長1.2m、幅70cm、深さ10cmを測る。遺構内にピットを検出したが、いずれも凹みのようなものであった。遺物は出土しなかった。

### 包含層出土遺物（図125）

調査区全体から弥生時代前期後半の遺物が出土した。160は体部上半に段が見られる壺で、他のものと比べ古相の土器である。161は如意形口縁の壺で体部に2条以上のヘラ描線を施す。

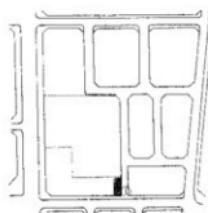


図122 調査位置図

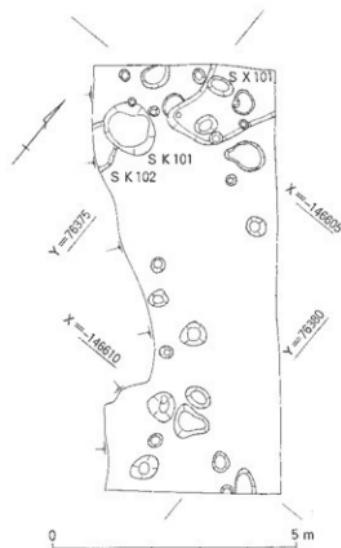


図124 調査区平面図

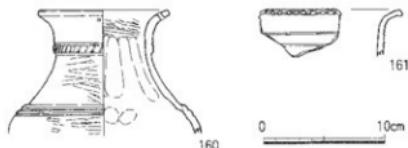


図125 包含層出土遺物実測図

## 3. 第12次－3調査

調査地は調査対象地の南辺に位置する。区画整理地内の道路拡幅部分について調査を実施した。調査地内で地下室などがあり、搅乱が予想された部分については、調査を実施しなかった。

## 基本層序（図127）

盛土・旧耕作土が堆積し、東側では現地表面下1.5m、西側では同85cmで第1遺構面（弥生時代前期～後期）を検出し、同1.2mで第2遺構面（縄文時代晩期）を検出した。調査地の大半が縄文時代晩期～弥生時代後期の河道である。

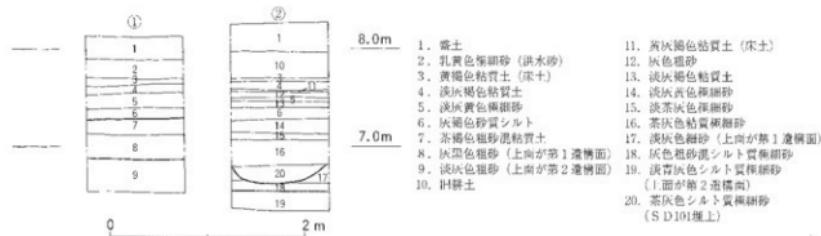


図127 基本土層図

## 第1遺構面（図128）

検出した遺構は、落ち込み1ヶ所・ビット2基・土坑1基である。遺構出土遺物などから弥生時代前期～後期と考えられる。調査区中央部で大きな落ち込みを検出した。下層の縄文時代の河道を踏襲したものと考えられる。

## SK101

調査地東部で検出された長方形の土坑で、検出長1.4m、幅約50cm、深さ約20cmを測る。茶灰色シルト質極細砂が堆積していた。形状から土坑墓などの可能性もあるが、歯・骨等の出土はなかった。また遺物は出土しなかった。

## SD101

調査地東端で検出された溝で、検出長60cm、幅1.2m、深さ20cmを測る。茶灰色シルト質極細砂が堆積していた。遺物は出土しなかった。

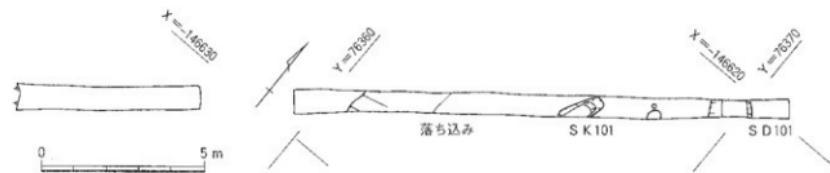


図128 第1遺構面平面図

## 第2遺構面（図129）

調査区のほぼ全体で河道状の落ち込みを検出したのみである。出土遺物から縄文時代晩期と考えられる。

## S R 201

調査地の東半で検出された河道状の落ち込みで、検出長幅約7.0m、深さ60cmを測る。今回は調査地の制約から西肩部分のみが検出され、東肩の検出はかなわなかった。埋土は灰黒色シルト質細砂等で、縄文時代晩期の土器が出土した。

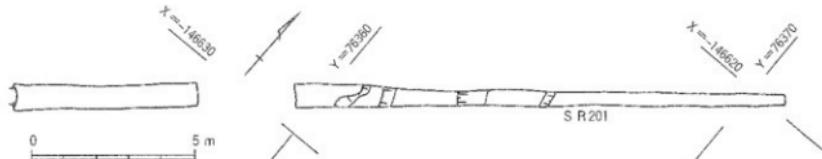


図129 第2造構面平面図  
出土遺物（図130）

縄文時代晩期の土器が数点出土した。162はリボン状突起をもつ浅鉢で、内外面に丁寧なヘラミガキを施し精製された土器である。その形態から滋賀県II式のものと考えられる。

なお、2個体実測を行なったが、形状・胎土・表面調整などから同一個体の可能性が高い。

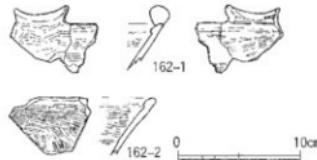


図130 S R 201出土遺物実測図

## 4. 第12次－4調査

今回の土地区画整理事業地南西部に位置する。松本通2丁目の西辺と並行して走る塙本通の拡幅部分で長さ約15m、幅約6.5mのトレンチ状の調査地である。

## 基本層序（図132）

盛土・旧耕作土が堆積し、南側の現地表面下1.1mで弥生時代前期と考えられる河道の落ち際を、同1.4mで縄文時代晩期と考えられる河道の落ち際を検出した。現地表面下2.0mまで掘削を行なったが、湧水が激しくそれより下層については調査を行なわなかった。

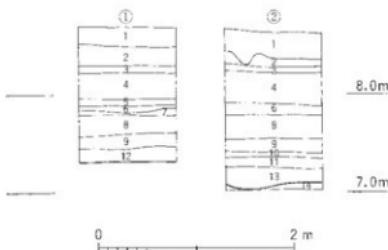


図132 基本土層図

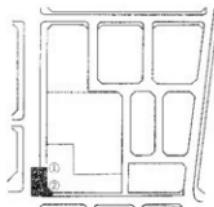


図131 調査地位置図

1. 盛土
2. 耕土
3. 乳白色細砂（洪积砂）
4. 灰褐色沙質土（旧耕作土）
5. 灰色輕質土
6. 黄灰色粘質土（原土）
7. 灰色細砂粘質土
8. 灰色砂質土
9. 灰褐色シルト
10. 灰褐色シルト（弥生土層・縄文土層含む）
11. 灰褐色砂質シルト（弥生土層・縄文土層含む）
12. 灰色砂質土
13. 灰色砂質土
14. 淡灰色砂質泥層
15. 淡灰色層砂（上面が遺構面）

## 遺構検出面（図133）

遺構は、河道状の落ち込みを検出したのみである。調査区大半が河道で、遺構面は凹凸が激しく一定しない。出土遺物から縄文時代晩期～弥生時代前期と考えられる。

## S R101

調査地の全体で検出された河道で、弥生時代前期の段階では深さ50cmほどで、一部畦畔状に高く残る部分や、不整形な落ち込みが多数確認された。また、縄文時代の段階では深さ1.0m近くで突堤文土器・木片などが検出された。西側にさらに落ち込んでいくが、湧水が激しく底面を確認できなかった。

## 出土遺物（図134）

縄文土器および弥生土器が出土した。図化したのは2点で突堤文土器である。

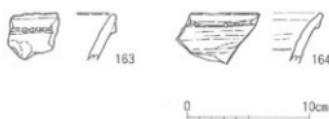


図134 S R101出土遺物実測図

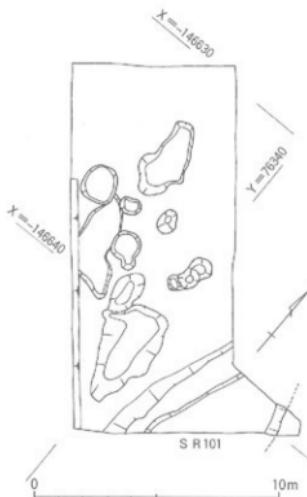


図133 調査区平面図



挿図写真16 S R101掘削作業風景



挿図写真17 S R101（西から）

## 第5節 第17次調査

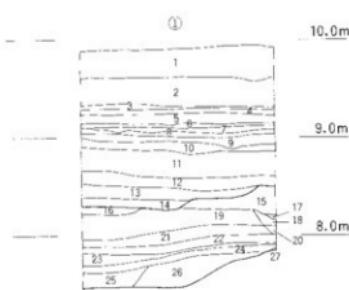
### 1. 第17次-1調査

調査対象地の中央やや東よりの地区で実施した調査である。調査区は、第12次-1調査区南端部の西側に隣接する。4面の遺構面を確認した。

基本層序 (図136)

上層より盛土・旧耕作土が堆積し、その下層の現地表下75cmで淡褐色細砂～褐色細砂の包含層を確認した。この包含層は弥生時代後期～古墳時代前期の遺物を多く含む。包含層の下層の現地表下1.05mで第1遺構面を検出した。この遺構面では切り合い関係から少なくとも2時期以上の遺構を検出しており、包含層と捉えた土層の途中より掘り込まれたものが含まれる可

能性も考えられるが、現地で確認することはできなかった。このため、包含層としてとらえた土層もさらに分層できる可能性もあるが、断定には至らなかった。第2遺構面は第1遺構面の約15cm下層、第3遺構面は第2遺構面の約15cm下層で検出した。それぞれ遺構を若干確認したが、出土遺物の面からは第1遺構面との時期差は明瞭ではない。大半が上層で検出した遺構の下部で検出していることから、切り合いによる検出面の違いから別の遺構面として捉えた可能性も否定できない。時期差についても弥生時代後期～古墳時代前期初頭までの比較的短い期間のなかに以上の遺構が収まるものと考えられる。第4遺構面はさらに70cm下層の淡灰色細砂上面で検出した。弥生時代前期の遺構面である。



1	盛土・擾乱	18	淡褐色細砂～暗灰色シルト
2	灰色～灰茶色小理混じり細砂～中砂	19	淡灰色シルト
3	淡褐色質實土	20	暗灰色シルト
4	灰褐色シルト質細砂	21	淡褐色細砂
5	灰褐色シルト混じり細砂	22	灰(褐)色シルト質細砂
6	淡褐色シルト	23	淡灰色～灰白色シルト～楕圓砂
7	灰(青)色シルト質細砂	24	灰色～黑色シルト～粘土
8	淡褐色細砂	25	(淡)灰色シルト
9	暗褐色シルト質細砂	26	淡灰色～淡綠灰色細砂～細砂
10	暗褐色シルト質細砂	27	淡灰色細砂
11	暗褐色シルト質細砂		
12	褐色～灰色細砂	1～7	旧耕作土
13	(褐)色細砂	8・9	弥生末～古墳初期包含層
14	暗褐色シルト質細砂～細砂	10～14	S B 104 扉土
15	褐色細砂～暗褐色シルト質細砂	15	扉上面が第1遺構面
16	褐色細砂	27	扉上面が第2遺構面
17	淡褐色細砂		
18	淡褐色細砂～細砂		

図136 基本土層図

包含層出土遺物 (図137)

包含層出土遺物は弥生時代後期～古墳時代前期の土器を含んでいた。ここでは、S B 104上面で炭化材とともに出土した2点168・170もあわせて計8点を図化した。165～169は甌、170は鉢、171は高壺、172は器台である。甌にはハケで仕上げる165～167と、タタキが残る168・169がある。170は平底の底部から内湾しながらたちあがる体部をもち、口縁部は直立してやや強めのヨコナデを施す。口径17.8cm、器高8.6cm、底径4.2cmを測る。171は高壺の口縁部と考えたが、二重口縁壺の可能性もある。口径20.2cmを測る。172の器台は内外面ともにヘラミガキを施す。以上の土器については、古墳時代初頭頃のものと考えられる。

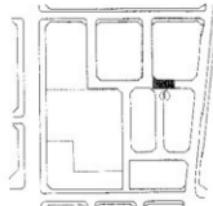


図135 調査位置図

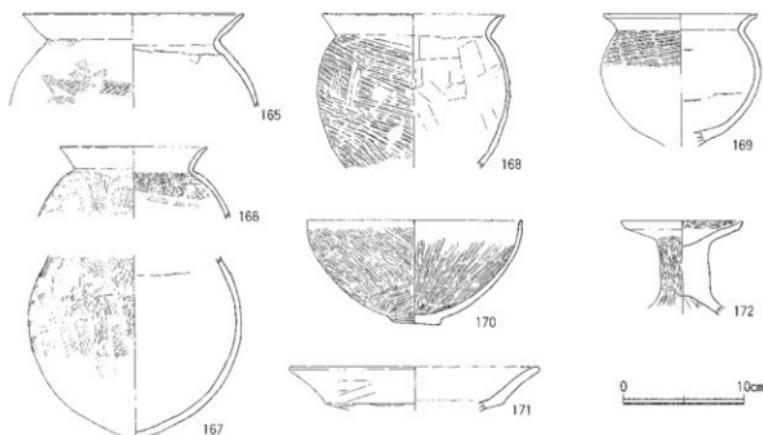


図137 包含層出土遺物実測図

## 第1 遺構面（図139）

現地表下約1.05m（標高約8.8m）で確認した弥生時代末～古墳時代初頭頃の遺構面である。堅穴住居3棟、溝1条、溝状の落ち込み1条、ピット12基などを検出した。検出した遺構のうち既に第12次-1調査で一部を検出していたS B103についてはその名称を踏襲し、新しく検出した遺構については別途呼称した。これらの遺構は同一面で検出したが、後述するように切り合い関係から少なくとも2時期以上に分かれることが明らかである。ただし、遺物の面から時期差を示すことはできない。

## ピット

調査区東部～中央部で約10基のピットを検出した。これらのピットについては、切り合い関係により明らかに各堅穴住居よりも新しい時期のものである。特にS B104を切るS P01・08・09（-10）とS P03～05はそれぞれ同規模で等間隔で1列に並ぶため、掘立柱建物あるいは柵列の一部である可能性が考えられた。しかし、当調査区の東及び南側で実施した第19次調査では、これらの柱穴列に対応し同一の建物あるいは柵列を構成すると判断される遺構は検出されなかった。このため、現時点ではこの2列については単に柱列として捉えておく。ただし当調査区の北側については未調査であり、また南側の一部についても掘削不能であった箇所が存在することから、掘立柱建物や柵列の可能性が全く否定されるものではない。なおこの2列の柱列については、主軸方向に違いがみられることから時期差が考えられるが、出土遺物はS P01以外は極少量で小片であり、S P01も比較的多く出土していたもののやはり小片のため、遺物の面から明確な時期差を見出すことはできない。また、同様に各堅穴住居との時期差についても遺物の面からは明確ではない。

## S P01出土遺物（図138）

173はピット出土遺物のなかで唯一図化できたものである。壺の口縁部で、口縁端部を上方へつまみ出し、体部には3本/cmのタタキを施す。庄内式併行期のものであろうが、詳しい時期については小片のため明らかではない。

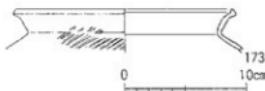


図138 S P01出土遺物実測図

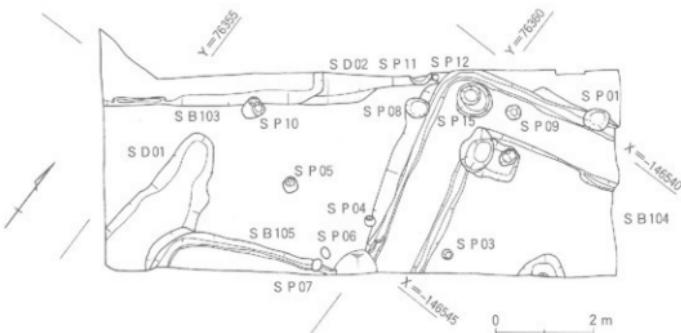


図139 第1遺構面平面図

**S B103**

第12次-1調査区から続く竪穴住居で、調査区北西隅で検出した。同調査では住居の西辺部及び南辺部を検出しているが、今回は南辺部の残り約4.5m分を検出した。同調査と同様に溝（SD02）を切るかたちで検出したが、住居南東隅部分は、溝との切り合い関係によるものかやや不明瞭となっている。南壁際で部分的に周壁溝を検出している。住居全体の規模等については、第12次-1調査の報告で既述している（58頁、図112）。当調査において出土した遺物は少量で、図化できたのは2点である。第12次-1調査（59頁、図113）で合わせて報告している。

**S B104上面検出の炭化材集積（挿図写真18）**

後述するSB104の北西隅の上面において $1.6 \times 0.8\text{m}$ と $0.55 \times 0.3\text{m}$ の規模をもつ炭化材の集積を検出した。この2つの集積は近接しており、一連のものと考えられる。SB104は後述のように焼失住居と考えられるが、この集積は上面で検出したためSB104とは関連がないものである。この集積とともに図137-168・170の土器が出土した。あるいはSB104よりも新しい時期の焼失住居が存在する可能性も考えられるが、調査区外に延びるため詳細は不明である。

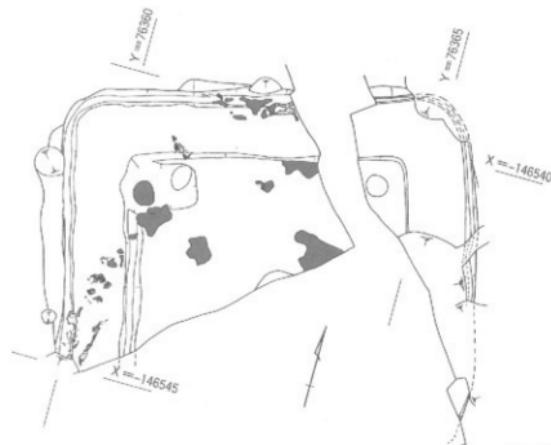
**S B104（第19次調査 SB105）（図140）**

調査区西半で検出した方形の竪穴住居である。東部については第19次調査において検出（同調査時はSB105と呼称）したが、南部は未調査部分に延びるため本来の正確な規模は不明である。ここでは両調査成果をまとめて報告する。

検出できた範囲では、東西方向の長さは6.7mで、床面までの深さは約45cmを測る。

当調査区南東部の南壁際の床面で、径98cm×45cm以上、深さ21cmを測る半円形の土坑を検出した。この土坑は、内部に炭層の堆積がみられる（挿図写真19）ことから住居の中央土坑（炉）と考えられる。この土坑は、北辺・西辺・東辺の各ベッド状遺構から同様な距離のところに位置しており、住居の中央に位置して

挿図写真18 第1遺構面炭化材検出状況  
(南東から)



挿図写真19  
S B104中央土坑炭層検出状況  
(北西から)

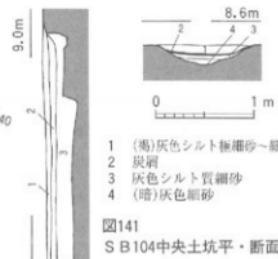
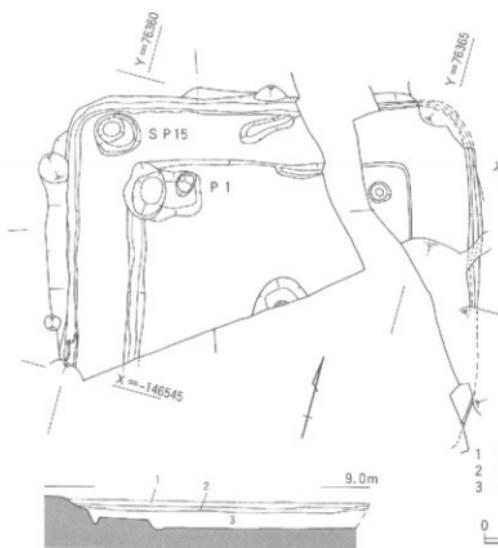


図141  
S B104中央土坑平・断面図



図140 S B104平・断面図

いる可能性が高い。その場合南北の長さも6.8m前後となり、ほぼ正方形の住居と推定される。

北・西・東辺にはベッド状造構を設置している。幅70~80cm、高さ10cmの規模をもつ。また、北・西・東壁際の全てで周壁溝を検出した。また、ベッド状造構際でも周溝を検出している。

内部で炭化材や炭をまとめて検出したことから、この住居は焼失住居と考えられる。主柱穴については、当調査結果のみでは明確ではなかったが、第19次調査において1基確認したことから、P 1もその可能性が考えられる。おそらく、4本柱の住居であろう。

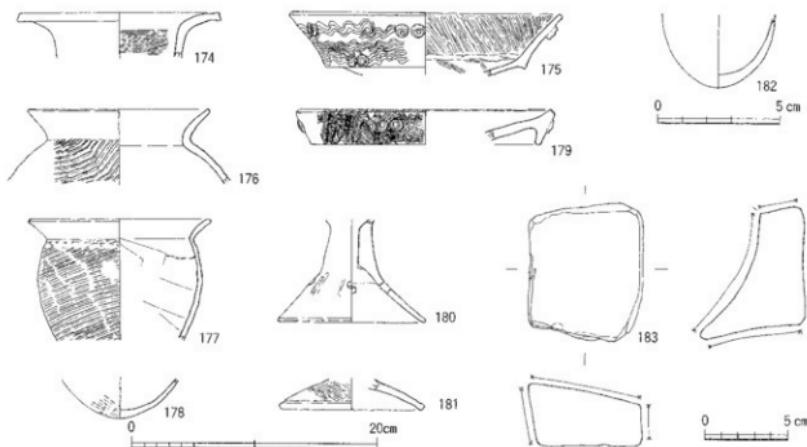


図142 S B104出土遺物実測図

## S P15

S B104の北西隅のベッド状遺構上面で検出したピットで、径75×70cm、深さ39cmを測る。内部より図142-175の壺口縁部が出土した。性格については貯蔵穴などの可能性も考えられるが、断定できない。

## 土坑状遺構

S B104の床面北西隅で1.25×0.95mの土坑状遺構を検出した。内部は西側がさらに深くなる。最深部の深さは60cmで、炭、焼土を含む。P 1と一連の遺構の可能性もあるが、性格などの詳細は不明である。

## S D04・05

S B104のベッド状遺構に重なるかたちで溝状の落ち込みを検出し、第3遺構面の遺構として調査を実施した。この落ち込みは最深部の深さが15cm程度のもので、埋土は暗灰色～（淡）灰色シルト質細砂であった。土器が少量出土したが、國化できるものはなく、S B104との時期差も明確ではない。ここではS B104のベッド状遺構造成時の盛土にあたるものと考え、第3遺構面とは切り離して捉えることとする。

## 出土遺物（図142）

174・175は壺の口縁部である。174は直立する頸部から屈曲して水平方向にひらく口縁部をもつ。口径16.2cmを測る。175は二重口縁の口縁部外間に波状文2帯を施した上に、2個1対の円形浮文を上下2段に交互に施す。176～178は壺で、体部にタタキを施す。177は体部最大径を上位にもち下位がすぼまる形態であるが、176は体部最大径が口径をしのぎ、体部が丸味を帯びている。176は口径14.6cm、177は口径14.5cmを測る。179は器台の口縁部で、端部を拡張して面をもつ。口縁部外面には波状文を施したうえで3個1対の円形浮文を施す。口縁端部には刻目を施す。180は高杯の脚部で、径8mmの円孔を推定4ヶ所施す。181は器台の脚部で直径2.5cmを測る。182はミニチュア土器である。183は砥石で、側面4面と上面に擦痕が残る。石材は凝灰岩系と考えられ、幅7.0cm、長さ8.5cm、厚さ6.5cm、重さ318.9g、比重2.237を測る。

## S B105（第19次調査 S B114）

調査区南西部で確認した堅穴住居で、北西隅部から北辺部にかけて検出した。当調査で検出できたのはわ

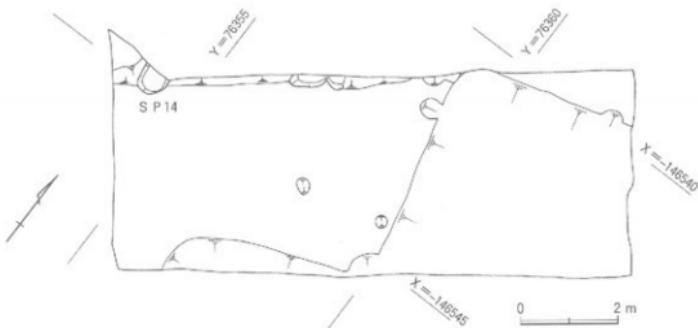


図143 第2遺構面平面図

ずかな部分に限られていたが、第19・20次調査で残りの部分の大半を検出し、1辺6.8mの方形の堅穴住居であることが判明した。当調査では、床面からの深さ約8cmを測る周壁溝を検出した。当調査出土遺物のうち3点を図化した。住居の詳細と合わせて第19次調査の報告で記述（97頁、図175）している。

#### S X01

S B 105の床面で深さ35cmの土坑状の落ち込みを検出した。調査時はS B 105と別の遺構であると考え第2遺構面の遺構として認識したが、南側で実施した第19次調査では確認されなかったため、詳細は不明である。前述のS D 04・05とS B 104の関係と同様にS B 105のベッド状遺構を構成する盛土の可能性を考慮し、S B 105と関連づけておきたい。

#### S D01

調査区南西部で検出した溝状の落ち込みで、幅0.9~1.4m、深さ7cmを測る。弥生時代後期～末頃の土器が少量出土したが、図化できるものはない。自然の落ち込みの可能性もある。

#### S D02

第12次－1調査区から続く溝で、調査区南西の北壁際で検出した。S B 103と切り合い関係があるが、当調査では明瞭ではない。

#### 第2遺構面（図143）

調査区西半部において、現地表下約1.2m（標高約8.7m）で確認した遺構面である。ピット1基を検出した。出土遺物は小片で少量のため時期については明確ではないが、弥生時代後期頃と考えられる。第1遺構面との時期差についても明確ではない。S D 02の下層でSP 14を確認したため遺構面として捉えたが、切りあい関係による検出面の違いにより別の遺構面と認識した可能性も否定できない。

#### SP 14

調査区北西隅で検出したピットで、第1遺構面のS D 02によって上部は削平される。調査区内での規模は、径50×60cm、深さは19cmである。弥生時代後期～末頃のものと思われる土器片が少量出土したが、小片のため図化しない。

挿図写真20  
第2遺構面全景（南西から）



図144 第3遺構面平面図

## 第3遺構面（図144）

現地表面下約1.35m（標高約8.5m）で確認した遺構面で、溝1条、ピット1基を検出した。遺構内出土の遺物が細片のため時期については明確ではない。

## S D03

調査区北西部の北壁際で検出した。北側に落ち込む溝状の遺構と考えられる。S D02と同様な場所で検出しており、S D02の下層部分である可能性も考えられる。弥生土器が出土したが、固化に耐えうるものはなく、S D02との時期差も明確ではない。

## 第4遺構面（図145）

現地表下約2.05m（標高約7.8m）で検出した遺構面で、河道1条を検出した。河道内からの出土遺物から判断して、弥生時代前期の遺構面と考えられる。

## 包含層出土遺物（図146）

包含層からも弥生時代前期後半の土器が出土した。遺構面で検出したSD06出土遺物と一連の遺物と考えられるが、ここでは、遺構検出までに出土したものを包含層出土遺物として報告する。4点を図化した。

184は壺蓋で口径10.0cmを測り径3.5mmの円孔を穿つ。内外面ともにヘラミガキを施す。185は沈線を1条以上伴う削出突帯を巡らす。外面は9本/cmのハケ、内面はヘラミガキを施す。186は壺の体部で体部最大径は30.0cmを測る。体部上部に貼付突帯を1条以上巡らせる。体部外面はヘラミガキ、内面は6本/cmのハケを施す。187は甕で、口径18.2cmを測る。頸部に沈線3条を伴う削出突帯を巡らす。体部外面にはハケがわずかに残り、内面は指頭によるナデが明瞭に残る。

以上の遺物のほか、固化していないが、生駒西麓と考えられる胎土をもつ土器片が少量出土した。

挿図写真21  
第3遺構面全景（北東から）挿図写真22  
第4遺構面全景（南西から）



図145 第4遺構面平面図

S D 06

調査区北西隅から東半部にかけて検出した河道で、調査区内での最深部の深さは50cmを測る。多量の弥生時代前期の土器及び少量の突帯文土器が出土した。

## 出土遺物（図147）

S D 06からは弥生前期後半の土器が多く出土したほか、突帯文土器もわずかに含まれる。15点を図化した。188は突帯文土器で、他は弥生土器である。

188は突帯文土器の深鉢で、口縁端部から下がった位置に刻目突帯を巡らせる。口縁端部にも刻目を施す。

189・190は壺の口縁部でともに口縁端部に刻目を施す。189は頸部に沈線2条

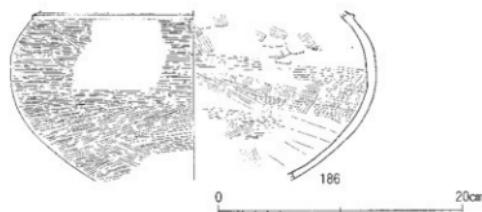
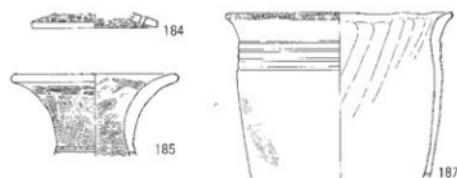


図146 包含層出土遺物実測図

を巡らす。190は頸部に沈線3条以上伴う削出突帯を巡らせる。191・192は鉢で、191は口縁端部を折り曲げている。片口状に壺部を収める。192は191よりも明瞭に片口部を造りだしている。

193～199は壺で、193～197は口縁部、198・199は体部である。193・194は頸部に沈線1条を伴う削出突帯を巡す。193の調整は磨耗により不明瞭であるが、内外面ともにヘラミガキであろうか。194の外面は7本/cmのハケを施す。195は頸部からややさがったところに沈線4条を伴う削出突帯を巡らす。外面はハケ後ヘラミガキ、内面はヘラミガキを施す。196は頸部に1条以上、口縁部内面に1条の貼付突帯を巡らす。外側の調整は磨耗のため不明であるが、内面は水平方向のヘラミガキを施す。197は外面にハケを施す。胎土から199と同一個体の可能性があるが、接点はなく断定には至らない。198・199は体部で、198は沈線2条を巡らす。生駒西麓と考えられる胎土をもつ。生駒西麓と考えられる胎土をもつ。胎片は、先述のように包含層からも少量出土したが、SD 06からも数点出土した。199は沈線4条以上を巡らす。外面は8本/cmのハケ、内面はハケ後ナデである。200～202は壺で、200は頸部に沈線2条を巡らす。201・202はともに外面ハケを施し、頸部に沈線1条を伴う削出突帯を巡らす。202の口縁端部には刻目を施す。

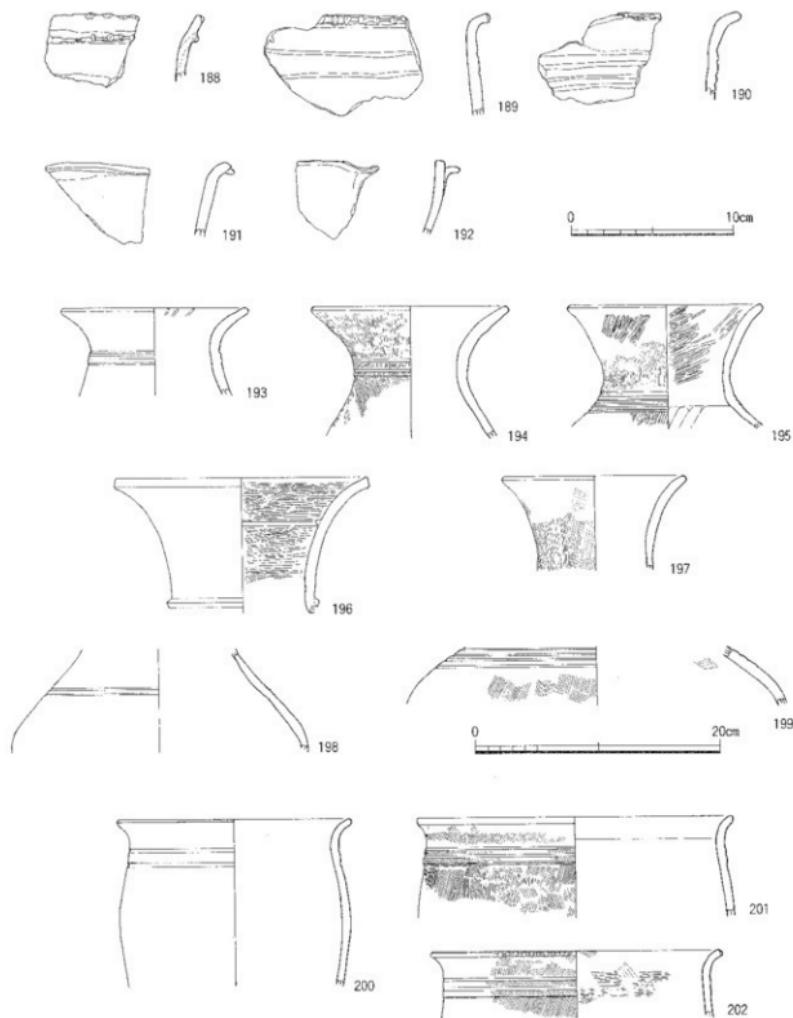


図147 S D06出土遺物実測図

以上のS D06出土土器については、弥生土器では壺・甕とともに削出突帯を巡らせるものが主体を占め、少量の沈線を巡らせるものと、極少量の貼付突帯を施すものが伴う。以上に加えて、わずかに突帯文土器が伴う状況が見て取れる。このことから、S D06については、弥生時代前期後半の遺構と判断される。

## 2. 第17次－2調査

調査対象地の中央南寄りの地区で実施した調査である。調査地は、第4次－8調査地の北側に位置し、願成寺南東隅に東接する。調査の結果、隣接地での既往の調査結果と同様に、2面の造構面相当層を確認した。

基本層序(図149)

上層より盛土・旧耕作土が堆積し、下層の現地表面下1.1～1.3mの（暗）灰色シルト上面で第1造構面を、さらに約40cm下層の灰色細砂上面で第2造構面を検出した。第2造構面以下の上層についても断ち割りを実施して調査を行ったところ、シルトあるいは細砂の堆積がみられ、頻繁に河道や洪水によって土砂が運ばれた状況が読み取れた。以上の土層の堆積状況から判断すれば、当調査区については、生活域としては不適当であった様子が窺われる。

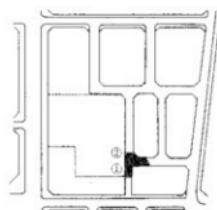
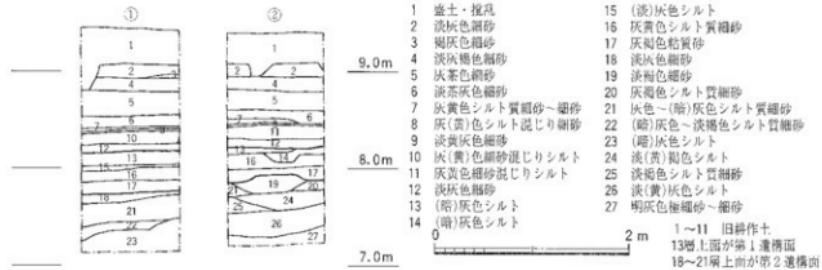
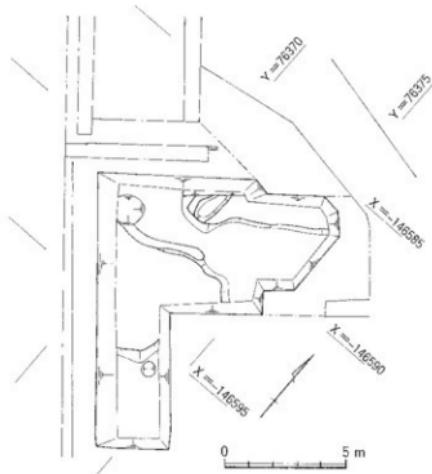


図148 調査位置図

1～11 旧耕作土。  
13号上面が第1造構面  
18～21号上面が第2造構面



## 第1遺構面（図150）

現地表面下1.1～1.3m（標高8.1～8.3m）で検出した。出土遺物から、弥生時代末～古墳時代初頭頃の遺構面と考えられるが、河道あるいは洪水の痕跡と考えられる溝状の窪みを数ヶ所検出したのみで、その他に明確な遺構は検出されなかった。

## 出土遺物（図151）

前述のように、第1遺構面では河道あるいは洪水の痕跡と考えられる溝状の窪みを検出したのみであり、明確な遺構は検出していない。このため、出土遺物については、ここで一括して扱うが、細片が多く本来の器形を復元できるものはほとんどない。4点を図化した。

203は壺の口縁部である。口径12.9cmを測る。204は高坏の坏部あるいは壺の口縁部であろう。口径17.0cmを測る。205は高坏脚部である。直径9mmの円孔を穿つ。206はミニチュア土器である。口径1.8cm、器高1.7cmを測る。上記の遺物は、古墳時代初頭頃のものと考えられる。

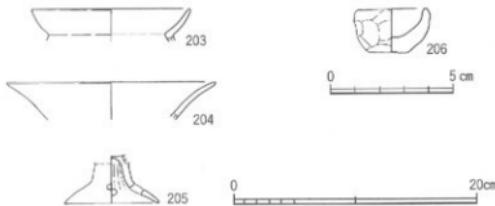


図151 第1遺構面出土遺物実測図



挿図写真23 第1遺構面全景（北西から）

## 第2遺構面（図152）

現地表面下1.6~1.8m（標高7.7~7.9m）で検出した。弥生時代前期頃の遺構面と考えられる。第1遺構面と同様に河道あるいは洪水の痕跡と考えられる溝状の窪みを数ヶ所検出したほか、ピットを4基検出した。ピットのうち、S P01・02は深さ15cmで、他の2基は5~10cmである。いずれも掘立柱建物の柱穴である可能性は低いと考えられる。

## 出土遺物（図153）

第2遺構面で検出したのも第1遺構面と同様な溝状の窪みのみであり、明確な遺構はない。よってここでは、第1遺構面基盤層以下の土層中より出土した遺物を一括して扱うが、やはり全体の器形がわかるようなものはない。3点を図化した。

207・208は壺底部で、207は弥生時代中期に降るものと考えられる。208は弥生時代前期包含層と考えられる灰褐色細砂から出土したもので、弥生時代前期のものと考えられる。209はサスカイト製の石鏃で、幅1.7cm、長さ2.8cm、厚さ2.5mm、重さ1.03gを測る。

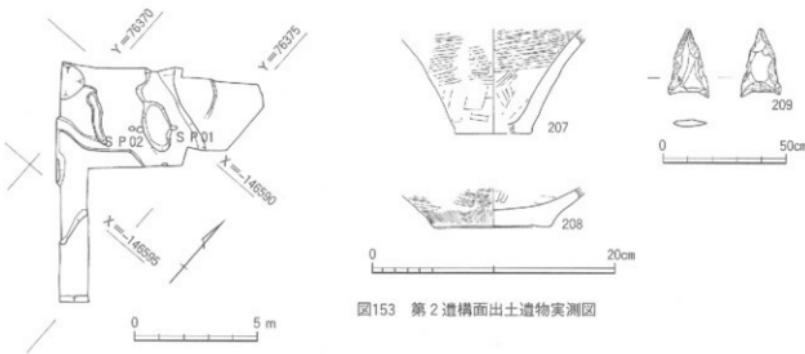


図152 第2遺構面平面図

図153 第2遺構面出土遺物実測図



掲図写真24 第2遺構面全景（北西から）

## 第6節 第19次調査

調査地は、平成14年度に実施した第17次－1調査区の南側及び東側に隣接する場所にあたり（図154）、個人住宅建設に伴う調査（第20・21・22次）と並行して調査を実施した。今回の報告ではこれらの調査成果も参考にして記述を進める。現標高は9.8mから10.6mを測る。

西側の調査区をI区、東側の調査区をII区と呼称する。I区の南半部では、弥生時代末～古墳時代初頭頃の遺構面が2面確認できたが、北半部及びII区は、後世の耕作の影響により、遺構面の駁別はできなかった。下層からは、弥生時代末以前の遺構面が1面確認された。

### 基本層序（図155）

上層より、盛土、旧耕作土、中世の耕作土の堆積が見られ、その直下で遺構面が検出された。包含層はI区南半部でわずかに存在するが、基本的に残存しない。調査区は、II区からI区に緩やかに傾斜しており、南北方向にのびる微高地上に位置し、弥生時代末から古墳時代初頭の居住域が検出された。下層からは、弥生時代前期の遺物を含む砂層を基盤層とする自然流路が1条検出された。

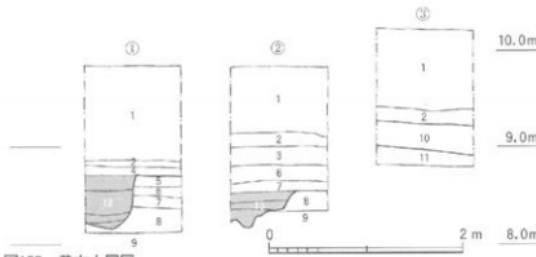


図155 基本土層図

### I区 第1遺構面（図156）弥生時代末～古墳時代初頭

竪穴住居1棟をはじめ、柱穴、土坑、袋状土坑、溝状遺構が検出された。

#### S K101

上端の直径65cm、深さ80cmの土坑で、下半の最大径90cmを測る断面の形状が袋状を呈する土坑である。埋土は上層が暗灰色シルト、下層が暗青灰色細砂で、両層ともに炭の小片がまんべんなく混じる。出土遺物は細片の庄内式併行期の甕片が出土したのみであるが、その形状から貯蔵穴と考えられる。

#### S K102

長径1.5m、短径1.0m、深さ15cmの梢円形を呈すると考えられる土坑である。広口壺とS K103から出土した土器と接合した鉢が出土した。

#### S K103・S X102

S K103は長径1.8m、短径1.2m、深さ20cmの梢円形の土坑で、漏斗状に窪む。その底の西端ではさらに幅25cm、長さ60cmの範囲で約20cm窪む。S X102はこのS K103に東側で取り付く溝状の落ち込みである。幅1.2m、深さ5cmを測る。S K103とS X102からは庄内式併行期の壺・壺・鉢がまとめて出土した。

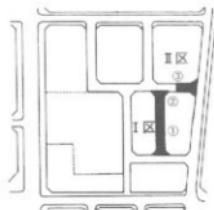


図154 調査地位置図

1. 盛土
2. 灰色シルト質砂質土（旧耕作土）
3. 灰色砂質土（旧耕作土）
4. 灰色シルト質砂質土（旧耕作土）
5. 淡灰色シルト質砂質土（旧耕作土）
6. 淡灰色砂質土
7. 淡青灰色シルト質砂質土
8. 暗茶色砂質土
9. 淡青灰色砂～粗砂
10. 淡灰色粗砂
11. 淡灰素色砂
12. S B101壺土
13. S B114壺土

## 土器群

上記のSK102、SK103の付近の遺構面上から二重口縁壺・甕等数点の土器が出土した。これらの土器は遺構に伴っていないが、その出土状況からSK102、SK103と関連するものと考えられる。

## SB101上層

東側は調査区外に延びるため、全体の正確な形状は明らかではないが、南北4.5m、東西1.7m以上の方形堅穴住居である。検出面からの深さは40cmを測る。調査区内では柱穴が確認されず柱数は明らかでない。プランの検出時に、北西コーナー付近の壁沿いに土留め板の痕跡と考えられる幅約3cmの灰色粘土が確認された。後述するSB101（下層）のプランはこのSB101（上層）より一回り大きいが、この土留め板の痕跡が検出面で確認されたことから、堅穴住居を建て替え、規模を縮小したものと考えられる。

出土遺物は細片のため図化できないが、在地系の庄内式壺の口縁部と二重口縁壺、小型鉢などの破片が出土した。

## I・II区 第2遺構面（図158 弥生時代末～古墳時代初頭 下層検出面）

堅穴住居、柱穴等が検出された。

## SB101下層（図157）

I区に隣接する第21次調査区の成果を統合すると、南北約6.0m、東西約5.9m以上の方形住居が復元できる。床面は、踏み固め又は工具による土締めを行った後、貼土を行っている。床面下部の地盤調整をしている住居は、SB108や第17次-1調査SB104でも確認されている。周壁構は全周する。遺物は床面からやや浮いた状態で検出した。

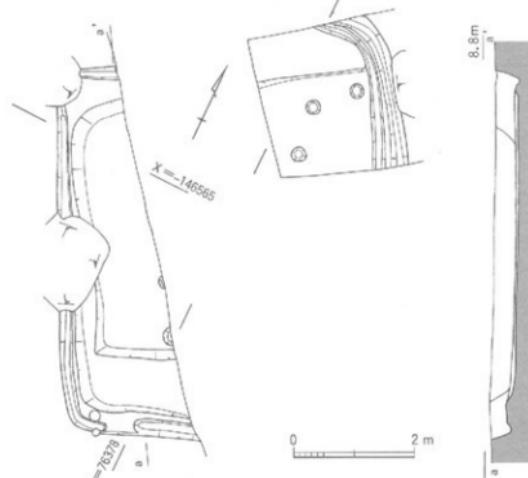


図157 SB101平・断面図

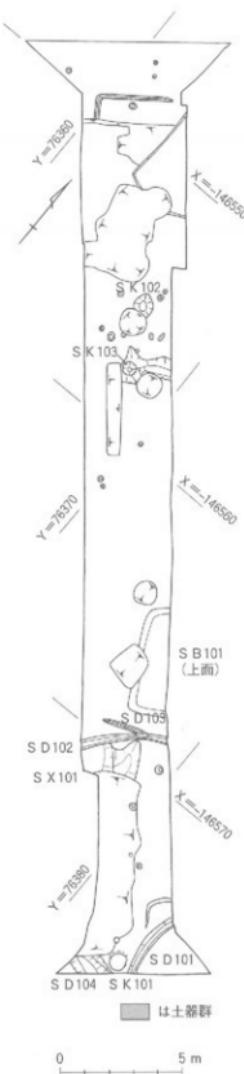


図156 I区第1遺構面平面図

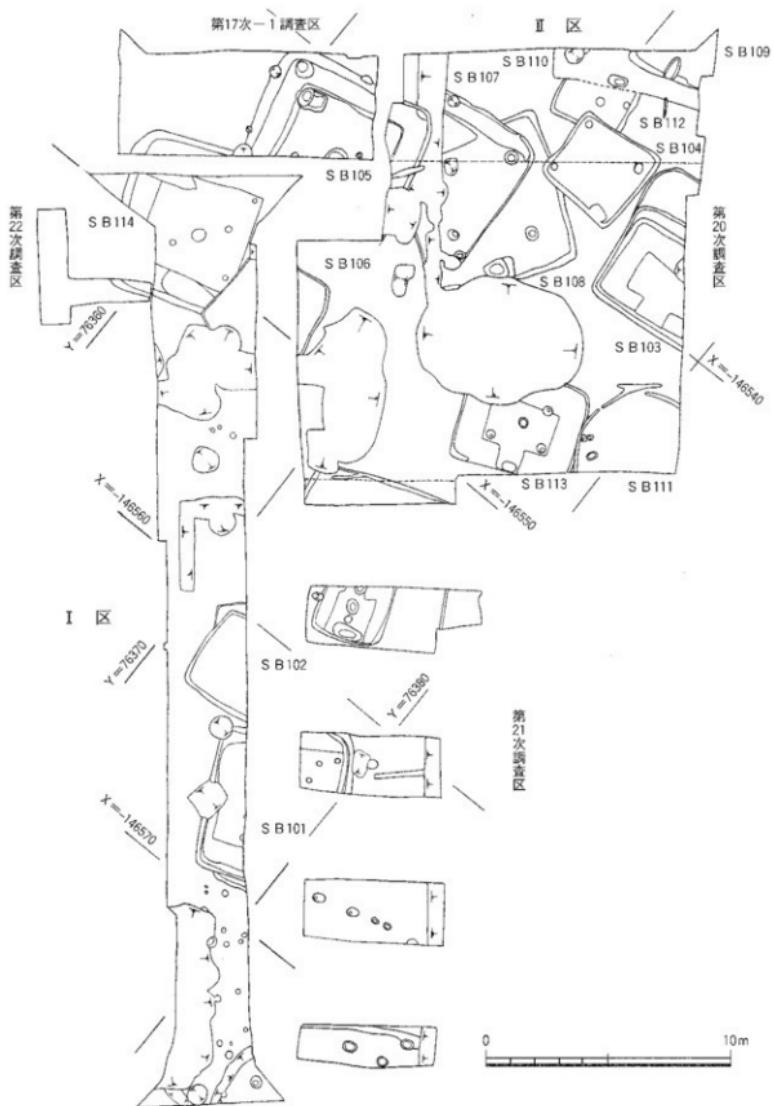


図158 第2造構面平面図

## S B102 (図159)

調査区の制約により、住居の約半分が検出されたに留まる。中世の耕作による影響を受け、遺存状況は悪い。南北3.7m、東西3.4m以上の方形の竪穴住居で、周壁溝は全周すると考えられる。柱穴の検出位置から、主柱穴は2本であると考えられる。南の周壁溝に接して土坑が1基検出されたが、遺物の出土はなかった。当遺跡では、竪穴住居の床面の南側に土坑を設ける例が多いが、用途を復元できる資料はない。

床面上からは、少量の炭化材と共に土器の細片がまとまって出土したが、個体としてはまとまるものは少ない。

## S B104 (図160)

南北3.7m、東西3.9mの方形の竪穴住居である。切り合ひ関係から、S B108・S B112より後出する遺構である。周壁溝は全周する。床面からは、柱穴3基、土坑(S K01)が検出された。柱穴の検出位置から、本来は4本柱と想定されるが、東南コーナー部は存在が確認できない。土坑は、長辺75cm、短辺60cm、深さ10cmの規模である。

遺物は、少量の炭化材とともに、床面から約10cm上方で検出された。

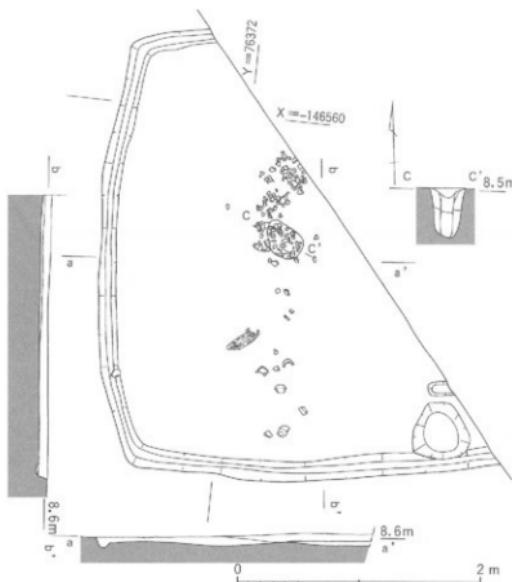


図159 S B102平・断面図

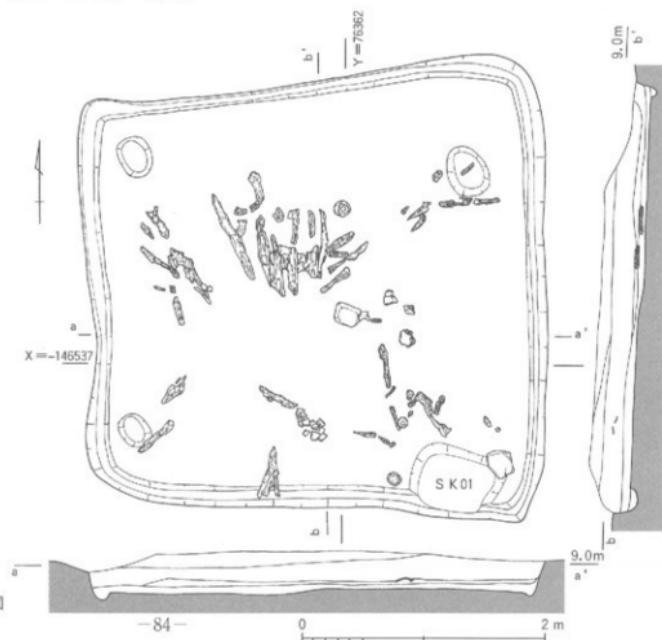


図160 S B104平・断面図

## S B105 (第17次-1調査 S B104)

隣接する第17次-1調査で確認された竪穴住居（S B104）の北東コーナー部と東辺部を検出した。北辺と東辺に周壁溝を設け、北東コーナー部ではベッド状の高まりを確認した。遺構の詳細については、第17-1次調査区の報告に統合した。遺物は、床面直上で若干出土したに留まる。

## S B106 (図161)

南北約4.6m、東西4.2mの竪穴住居である。南辺が北辺より長く、平面形は台形である。残存状況が悪く、中央部が調査区外であるため、詳細は不明であるが、北東コーナー部で周壁溝が検出された。遺物の出土はなかったが、切り合い関係から、S B114に先行する住居である。

## S B107 (図162)

南北6.2m以上、東西5.8m以上の方形の竪穴住居である。切り合い関係から、S B108・S B105より後出することが確認できる。擾乱により南西部の状況が不明であるが、北辺部に幅80cm程度のベッド状遺構を設けており、一部に周壁溝が残存する。検出された柱穴は2基で、検出位置から本来4本柱であったと考えられる。

当住居が廃棄されて、中央部に窪みが残る程度に埋没した段階に、100個体を超える土器が投棄された状態で出土した。ほぼ完全な形状のまま投棄された遺物が多く、土器片の接合関係は良好である。住居の床面から、10~20cm上方で検出されており、S B107で使用されていた遺物とは考えにくいが、短期間に一括投棄された遺物群として捉えることができる。床面直上からは炭化材が若干出土した。

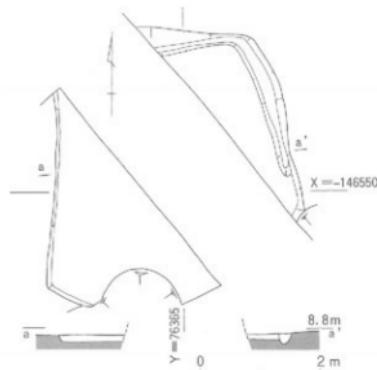


図161 S B106平・断面図

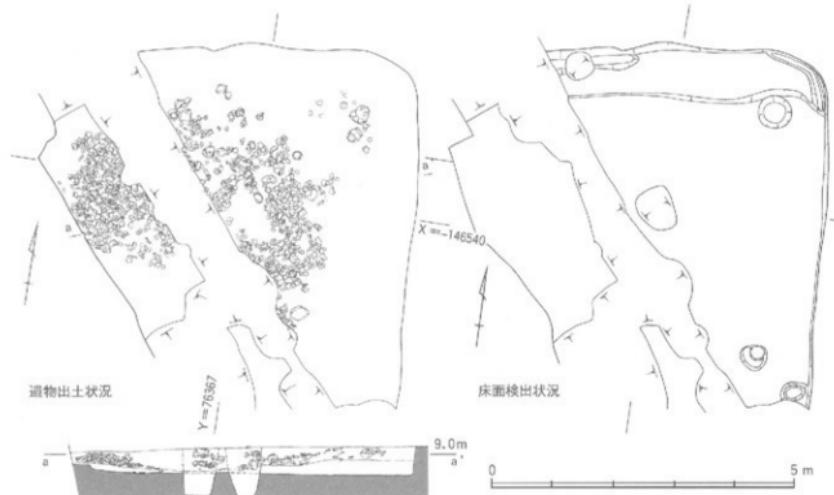


図162 S B107平・断面図

## SB 108 (図164)

東西6.3m、南北6.2mの方形の堅穴住居である。西コーナー部と南コーナー部は搅乱により失われている。切り合い関係から、SB 104・SB 107に先行する遺構である。周壁溝は全周する。内側にも方形に巡る溝が確認されており、南辺の中央を除きベッド状の高まりが存在したと想定される。しかし、中世の耕作や後出する住居の掘削の影響を受け、高まりは残存しない。

床面からは、柱穴7基、中央土坑、土坑等が検出された。柱穴は7基検出されたが、近接する柱穴は柱の立替に伴うものと考えられ、4本柱の建物であったと考えられる。中央土坑は長辺90cm、短辺85cm、深さ20cmを測る。少量の土器と炭片が出土したが、壁面の被熱痕は確認できなかった。近接して土坑が2基存在し、柱の立替も想定できることから、改修に伴う中央土坑の移動が想定される。

南辺の周壁の中央で長辺90cm、短辺80cm、深さ17cmの不定形の土坑が

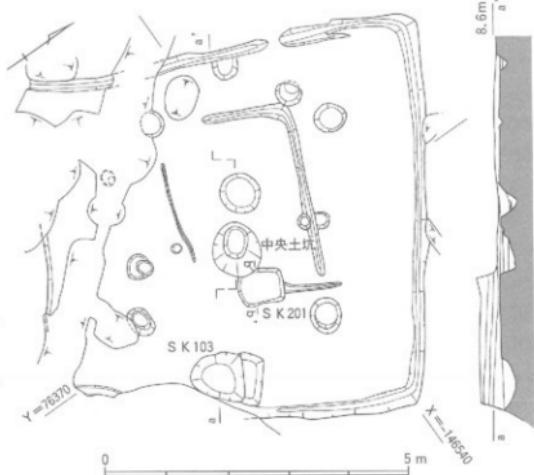


図163 SB 108平・断面図

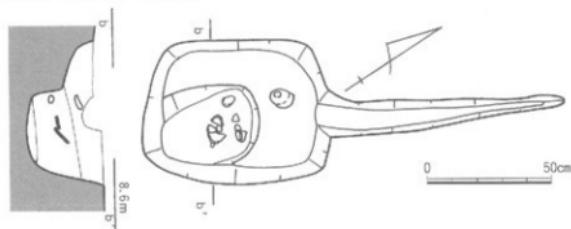


図164 SK 201平・断面図

検出された（SK 103）。遺物は出土しなかった。SK 103の東側に隣接する浅く窪んだ落ち込みから、3~5cmの花崗岩の円礫がまとまって出土した。

## SB 109 (図165)

調査区の制約により、南辺部の一部が検出されたに留まる。東西3.2m以上、南北2.7m以上の方形の堅穴住居と考えられ、SB 110より後出する遺構である。南辺の周壁溝に接して土坑が検出された（SK 01）。SK 01の東側からは、板石と高杯の体部が検出された。板石は、長さ32cm、幅28cm、厚さ7cm程度の花崗岩で、南辺の周壁に立てかけられた状態で検出された。整形痕や使用痕は無く、用途は不明である。

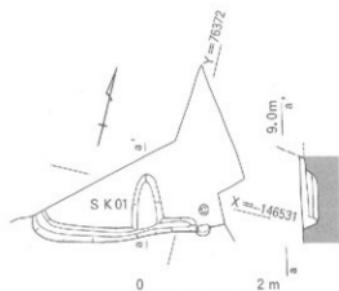


図165 SB 109平・断面図

## S B110 (図166)

調査区の制約と後世の搅乱の影響により、南辺部の一部が検出されたにとどまる。東西6.0m以上、南北3.3m以上の方形の竪穴住居と考えられる。造構の切り合い関係から、S B112より新しく、S B109より古い造構であることが確認できる。床面直上から、10cm程度の礫とともに、少量の遺物が出土した。

南辺部で、長辺80cm、短辺45cm、深さ25cmの土坑が検出された (SK 01)。土坑内には、直径5cm前後の花崗岩の自然石が充填されていたが、遺物の出土は無かった。

## S B112 (図167)

S B110及びS B104に先行する住居で、両住居の掘削によって一部が失われているが、東西3.0m、南北2.9mの方形の平面形が復元でき、当遺跡では、最も小型の住居である。周壁溝は全周すると考えられる。

中央土坑はやや南側で検出された。中央土坑の周囲からは、炭火材の細片が検出され、炭を焼き出した痕跡と考えられる。土坑壁面の被熱痕は確認できなかった。

柱穴は東西の周壁溝近くで検出された。建物の規模を考慮すると、2本柱であったと考えられる。床面直上から、遺物が少量出土した。

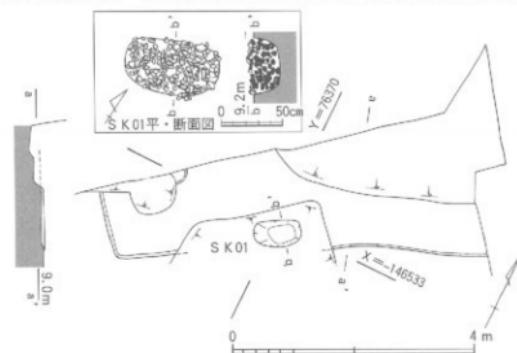


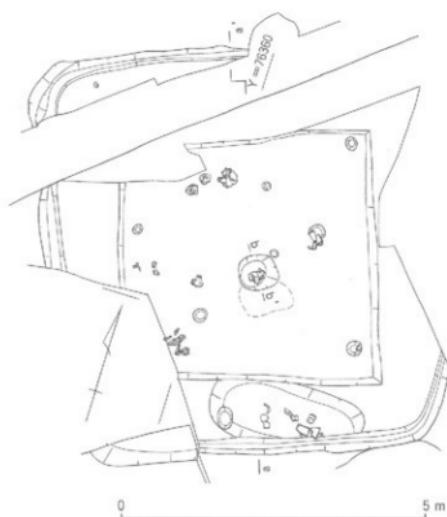
図166 S B110平・断面図



図167 S B112平・断面図

## S B114 (図168 第17次調査 S B105)

隣接する調査区の成果を統合すると、1辺6.8mの方形の竪穴住居が復元できる。切り合い関係から、S B105 (第17次-1 S B104) より後とする住居である。貼土によるベッド状の高まりが全周する。床面からは、中央土坑、柱穴2基、土坑1基が検出された。中央土坑 (図169) からは、少量の炭片とともに、壺の割部の破片が出土した。中央土坑の南側の床面からは、面上に広がった状態で炭が検出され、炭を焼き出した痕跡と考えられる。ベッド状の高まりを除去し、床面の精査を行った結果、南辺部のはば中央部で、土坑が1基検出された (SK 201)。長辺2.6m、短辺1.1m、深さ25cmの不整形の土坑である。埋土から、壺、鉢等の破片が検出された。柱穴は、ベッド状の高まりの内側のコーナー部から、柱穴が2基検出された。柱穴の検出位置から、4本柱であると考えられる。



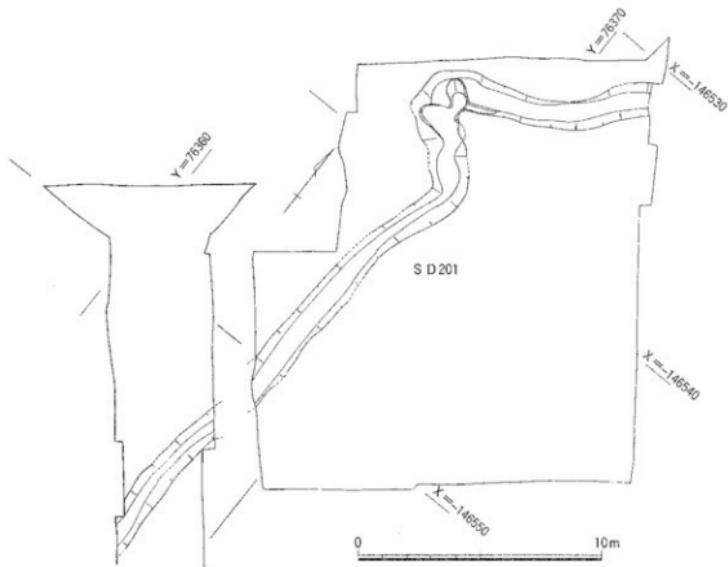


図170 第3遺構面平面図

攪乱土から出土した。残存長3.61cm、残存高0.71cm、重量3.36g、比重2.0、復元径44mmを測る。緑色凝灰岩製で、丁寧に研磨し整形されている。古墳時代前期の遺物である。213は突出した底部から口縁部が内湾して開く鉢である。外面の調整は不明であるが、内面は板ナデを施す。

#### 第1遺構面出土遺物

214～216はSK103出土遺物である。214は壺で、口縁部は直線的に立ち上がり、端部でわずかに外反する。肩部は球形を呈すると考えられる。体部外面はタタキ後、タテハケを施す。内面の調整は不明であるが、体部と口縁部の接合部分の内面に、2本の屈曲線が認められる。215は大型の鉢である。短く外傾して立ち上がる短い口縁部を持ち、屈曲部内面の稜線は不明瞭である。体部外面は、口縁部までタタキを施し、その後、下半部は縱方向のミガキ、肩部は横方向のミガキを施す。口縁部内面は横方向のミガキを施す。216はSK102とSK103出土の土器片が接合した二重口縁壺である。直立した頸部から受部は強く外反し、口縁部は短く外反ぎみに立ち上がる。体部はやや扁平な球形で、外面はミガキ、内面はヨコハケを施す。受部は横方向のミガキを施す。

#### 第2遺構面出土遺物

##### S B101 (217)

217は平底の鉢で、体部はわずかに内湾して立ち上がる。

##### S B102 (218)

218はわずかに平底を残す鉢で、体部が内湾して立ち上がる。内面は簾状のハケを施す。

##### S B104 (219～225)

219は小型丸底壺である。底部はわずかに面を持つ。扁球状の体部を持ち、短い口縁部が直線的に外傾する。220は器台の脚部である。体部と脚部の接合部は強く屈曲する。外面はタテハケ、内面はヨコハケを施す。221は壺の口縁部である。口縁部はわずかに外反して立ち上がる。体部との接合部は強い横方向のナデが施されている。222は突出する平底の底部である。平底で中央部は凹む。内外面ともにハケまたは板ナデの痕跡が残る。223は高杯の脚部である。中実の短い柱状部で、杯部との接合面が観察できる。裾部は大きく開く。224・225は二重口縁壺の口縁部である。直立する頸部に大きく外傾する受部を持ち、口縁部が立ち上がる部分の外面の屈曲線は明瞭である。内外面共にミガキを施すが、受部外面のミガキの方向は、224が横方向であるが、225は縱方向である。

#### S B107 (226~303)

226・227はミニチュアである。ユビオサエの痕跡が明瞭に残る。228~230は外面に縱方向のナデが明瞭に残る粗雑な鉢及び小型の壺である。内面は、ハケまたは板ナデを施す点は後述する鉢の調整と共通するが、外面の器表面の調整は省略されたものと考えられる。229は突出気味の底部を削り、丸底化している。

231~242は鉢である。内面は板ナデを施すものが主流である。口縁端部まで内湾して立ち上がるもの(232~238)と、口縁部が緩やかに外反、または外折して取り付くもの(239~242)がある。底部の形状は、突出する底部を持つもの(231~233)、丸底を呈するもの(234~237・239・240)、脚を持つもの(238)がある。232・233は口縁端部を上方につまみあげ、薄く収めている。235は外面にヘラケズリの痕跡が残る。237は浅鉢状で、緩やかに内湾しながら体部が広がる。縁部はわずかに上方につまみ出している。外面は板ナデ後、横方向に粗いミガキを施している。内面は放射状に間隔の広いミガキを施している。238は半球状の体部に中実の脚が付くものである。体部の調整は内外面ともに、丁寧なミガキが施されている。239は半球状の体部に、直線的に短く伸びる口縁部が、わずかに外折して取り付く。口縁部内面は、ヨコハケが施されている。240はわずかに内湾して開く口縁部を持ち、縁部は上方につまみ出している。内外面ともにハケが施されている。241・242は全面ミガキが施されており、縁部はやや外方につまみ上げている。

243~250は小型丸底壺である。243・244は底部に平坦面を残す。いずれも、口縁部の屈曲は強く、内面の屈曲線は明瞭である。体部内面はナデまたは板ナデ、口縁部内面は斜めまたはヨコハケが施されている。外面はいずれもハケが施されている。完形に復元できた資料を比較すると、体部高より口縁部高が高い資料(243・245~248)と、口縁部が発達し、体部高より口縁部高が高い資料(249・250)が併存している。前者は、体部外面にタテハケを施し、後者はヨコハケを施している。

251は強く外傾する受部から口縁部が立ち上がる小型の有段鉢である。口縁部は強いナデにより上外方につまみ上げられている。体部の内外面に横方向のミガキを施す。

252~256は器台である。裾部は内湾するものが主流で、3~4方向の円形透かしを持つものがある。253は体部底が貫通しており、端部に面を持つ。254は柱状部を持ち、口縁端部に面を持つ。体部内面は放射状のミガキが施され、外面は縦方向のミガキが施されている。裾部は板ナデの痕跡が残る。255は内湾気味に聞く裾部で、端部は尖り気味に薄く収める。外面はハケ、内面は板ナデの痕跡が残る。256も内湾気味に聞く裾部を持ち、端部は下方に面を持つ。外面は縦方向の強いナデを施す。内面は板ナデの痕跡が残る。

257・258は高杯の脚部である。257は短い柱状部と大きく聞く裾部を持つ。裾部端部は強いナデによる面を持つ。258は裾部が強く聞く。器表面が残らず調整は不明であるが、体部底に粘土充填の痕跡が認められ、脚部内面にシボリ痕が残る。

259~265は壺である。259は口縁部である。体部と口縁部の接合部は、外面の屈曲線は明瞭であるが、内

面は屈曲線を持たない。口縁端部はナデにより、内面に丸く肥厚させている。外面の口縁部はタテハケ、体部は縦方向のミガキ、内面の口縁部は縦方向のミガキ、体部は横方向のミガキを施す。球形に近い体部を持ち、底部がわずかに尖る。**260**は扁球状の体部を持ち、丸底である。頭部外面と体部外面は縦方向のミガキ、頸部と体部の接合部の外面と、頭部内面は横方向のミガキを施す。体部内面は板ナデを施す。**261**は外面にミガキを施し、体部内面は板ナデを施す。**262～264**は体部径が25cmを超える直口壺である。口縁部は外傾して直線的に伸び、口縁端部の形状は多様である。わずかに上方につまみ上げるもの（**262**）、丸く収めるもの（**263**）、面を持つもの（**264**）がある。体部との屈曲線は内外ともに明瞭である。体部は球形を呈し、**265**の底部はわずかに尖る。外面の調整はハケを施すもの（**262**）、ハケの後ミガキを施すもの（**264**）、ミガキを施すもの（**263・265**）がある。

**266～303**は壺である。口縁部は、外反するもの（**266～278**）、直線的に伸びるもの、内清気味に立ち上がり、口縁端部が内面に肥厚するもの（**300～303**）がある。口縁端部は、丸く仕上げるもの（**266～278・286・288～291**）、上方につまみ上げるもの（**273・296～300**）がある。体部は球形を呈するものが多いが、口縁部と体部の屈曲が不明瞭なものの中に、体部が長いものが含まれる（**266～269・274～278**）。底部は、突出するもの（**273・279～281**）があり、平底（**279・280**）や、やや丸みを持つ底部（**273**）が混在する。体部外面の調整は、タタキの痕跡を留めるもの（**268・270～273・279・283～49**）と、タタキの痕跡を留めず、ハケまたは板ナデで成形されたもの（**266・267・269～274～303～58・62～71**）がある。口縁部は、内面にナデを施すものが多いが、ハケまたは板ナデを施すもの（**275・278・287・288・291・292・295・298・303**）がある。体部内面の調整は、板ナデまたはヘラケズリを施す。**301・302**は内面のヘラケズリが明瞭に観察されるが、口縁部との屈曲部までは及んでいない。**300**は牛駒西麓の胎土である。

#### S B 108 (304～311)

**304・305**は器台である。**304**の体部外面はミガキを施す。体部の底部は粘土充填が認められる。**305**は内清気味に聞く脚部である。脚部内面頂部に上方向への押圧痕が残る。**306**は小型の鉢である。体部が内湾して立ち上がり、平底を持つ。端部は上方へ立ち上がる。**307**は小型丸底鉢である。尖底ぎみの底部から、体部が半球状に内湾して立ち上がり、口縁部は外方に緩やかに屈曲して立ち上がる。調整は不明瞭だが、体部内面に板ナデの痕跡が残る。**308**は鉢である。内湾して聞く体部から、直線的に外傾する口縁部を持つ。外面は縦方向ミガキを施す。**309**は高杯である。口縁部は発達し、体部から外反して立ち上がる。体部との屈曲線は、内外面ともに明瞭である。調整は、内外面ともに縦方向のミガキを施す。**310・311**は壺である。**310**の口縁部は外傾して直線的に立ち上がる。口縁部内面はハケを施した後、ナデで仕上げている。体部内面はハケまたは板ナデを施している。**311**の底部は上げ底で、外面はタタキ、内面は板ナデを施す。

#### S B 109 (312)

**312**は高杯である。浅い椀状の体部をもつ。器壁は厚く、脚部接合時の粘土接合痕が観察できる。器表面が剥離しており、調整は不明である。

#### S B 110 (313～315)

**313**は半球状の体部に短い口縁部が立ち上がる鉢である。口縁部はユビオサエ、体部外面はハケで成形されている。**314・315**は小型丸底壺である。体部と口縁部の内面の屈曲線は、共に明瞭である。**314**は丸底の体部から、口縁部が直線的に伸びる。体部外面は板ナデ、内面は板ナデ後、横方向のミガキを施す。**315**は口縁部が内湾して立ち上がる。器壁は厚い。口縁端部はわずかに内側に肥厚する。体部内面は縦方向のミガキ、口縁部内面はヨコハケを施す。

**S B112 (316・317)**

316は器高の低い鉢である。ユビオサエで成形された後、内面は板ナデが施されている。317は亮である。綾やかに外反する口縁部を持つ。口縁端部は丸い。外面はタタキ、内面はハケを施す。

**S B114 (318～336)**

318・319は竪穴住居の埋土の上面から出土した遺物である。S B114から出土した他の遺物は、ベッド状遺構や床直上で出土しており、住居廃絶期に廃棄された遺物と考えられるが、318・319はS B114との関連がやや希薄である。323・324は第17次-1調査のS B105で検出された遺物であり、ベッド状遺構の直上から出土した。325・331～333は住居内の土坑（S K01）、327は中央土坑から出土した。

318は小型丸底壺である。やや扁平な半球状の底部から、口縁部が内湾気味に立ち上がる。器壁は厚い。319は鉢である。底部は平底で、中央部が凹む。体部は内湾して立ち上がり、端部は上方に立ち上がる。外面のタタキは口縁部および、内面はハケを施す。口縁部内面はユビオサエ後ミガキを施す。

320～325は鉢である。320は内湾して立ち上がる体部に、短い口縁部が外傾する。底部は尖底状である。体部外面は、タタキ後、粗いミガキを施す。後円部内面は、斜め方向のハケを施す。321・322は脚を持つ。体部は内湾し、脚部は外反気味に広がる。体部外面は粗いミガキ、内面はハケの痕跡をとどめる。323は高杯または脚付きの鉢である。半球状の体部を持ち、内外面ともに板ナデを施す。324は底部である。器壁は薄い。外面はユビオサエ、内面は板ナデの痕跡が残る。325の体部は浅鉢状に開き、綾やかに内湾する。平底の中央は凹む。内外面とともにハケの痕跡が認められる。

326～328は壺である。326の口縁部は外反して立ち上がり、端部は上方にのびる。底部は尖底気味に叩き出している。その他の調整は不明瞭であるが、体部下半部内面にハケの痕跡が認められる。327は二重口縁壺である。器壁は厚い。頸部は内傾して立ち上がり、受部は強く外反する。口縁部は外反して上方に立ち上がる。内外面とともにミガキを施す。328は扁球状の体部から直立する頸部を持ち、頸部の上端部は強く外方に屈曲する。底部は平底である。外面はミガキ、内面下半部はハケの痕跡が認められる。

329～336は壺である。いずれも長胴形の体部を持ち、口縁部は強く外反し、内面に明瞭な稜線を持つもの（332）も存在する。口縁端部は丸く收めるものが多いが、333は面を持つ。体部外面はタタキのみで成形されているものが多いが、

口縁部接合部にハケを施すもの（332）や、  
体部下半部に板ナデを施すものがわずかに存在する。内面はナデまたは板ナデを施す。  
334は板ナデの痕跡が認められる。底部は、  
図示しなかった遺物を含めてすべて平底  
(329・331)である。



挿図写真26 現在の松本通2丁目

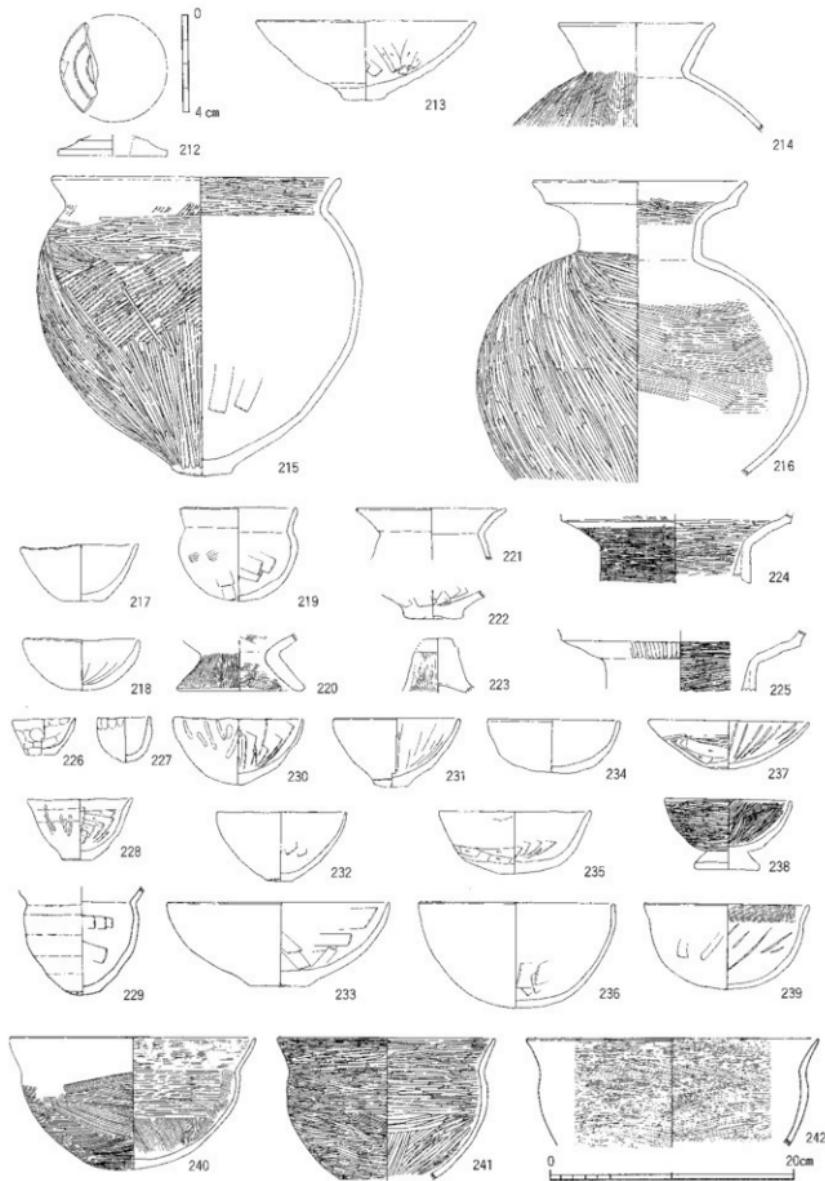


図171 包含層・SK103・SB101・102・104・107(1)出土遺物実測図

(212・213: 包含層 214~216: SK103 217: SB101 218: SB102 219~225: SB104 226~242: SB107)

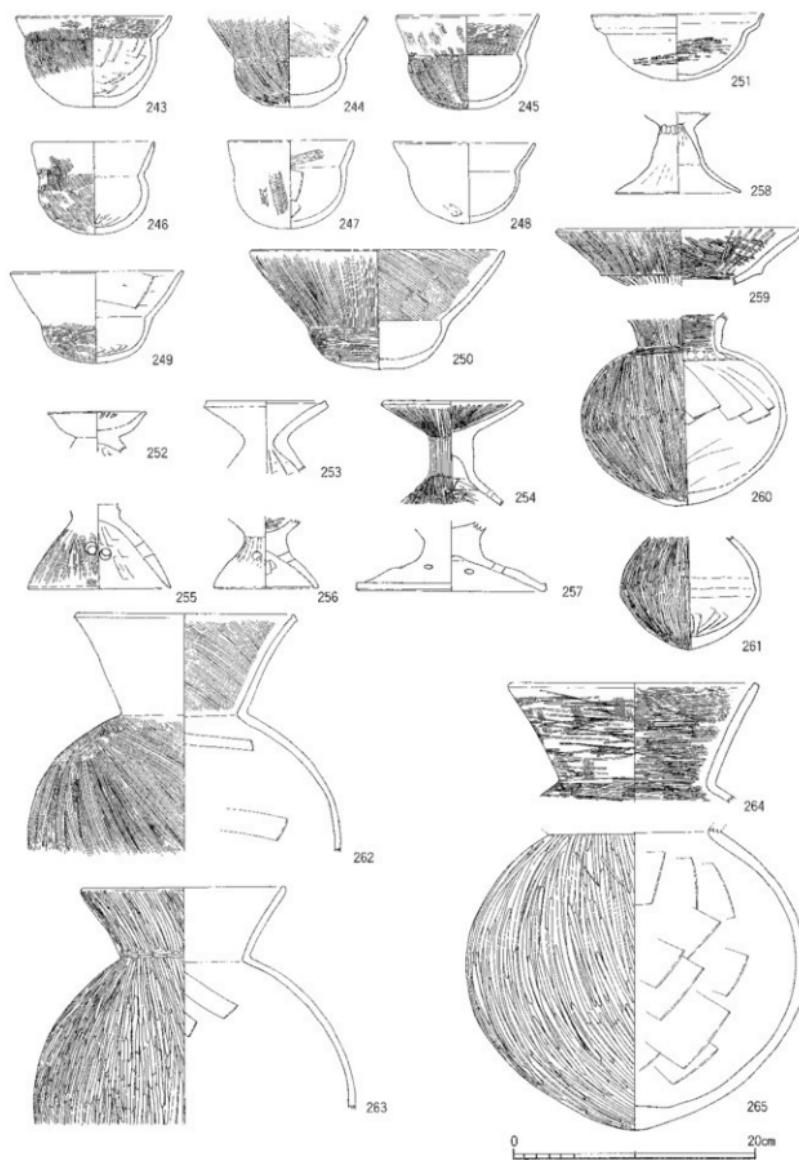


図172 SB 107出土遺物実測図(2)

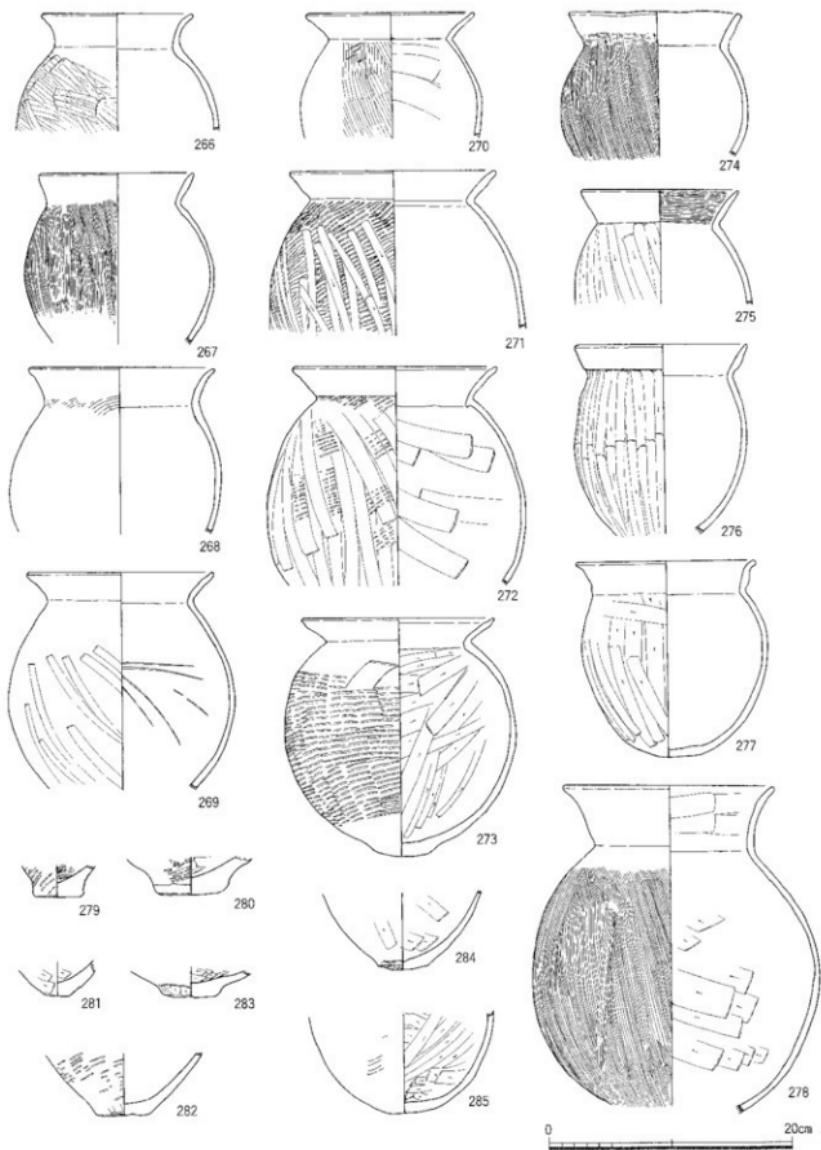


図173 SB 107出土遺物実測図(3)

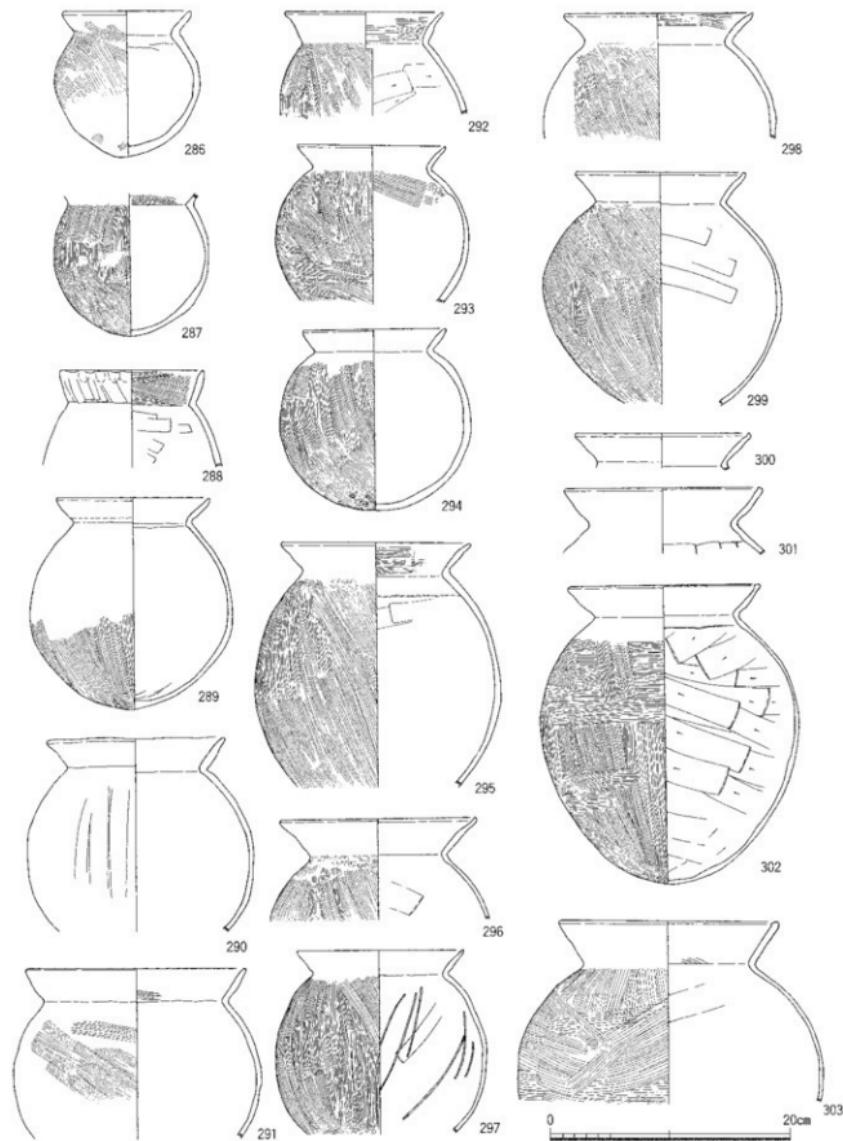


図174 SB107出土遺物実測図(4)

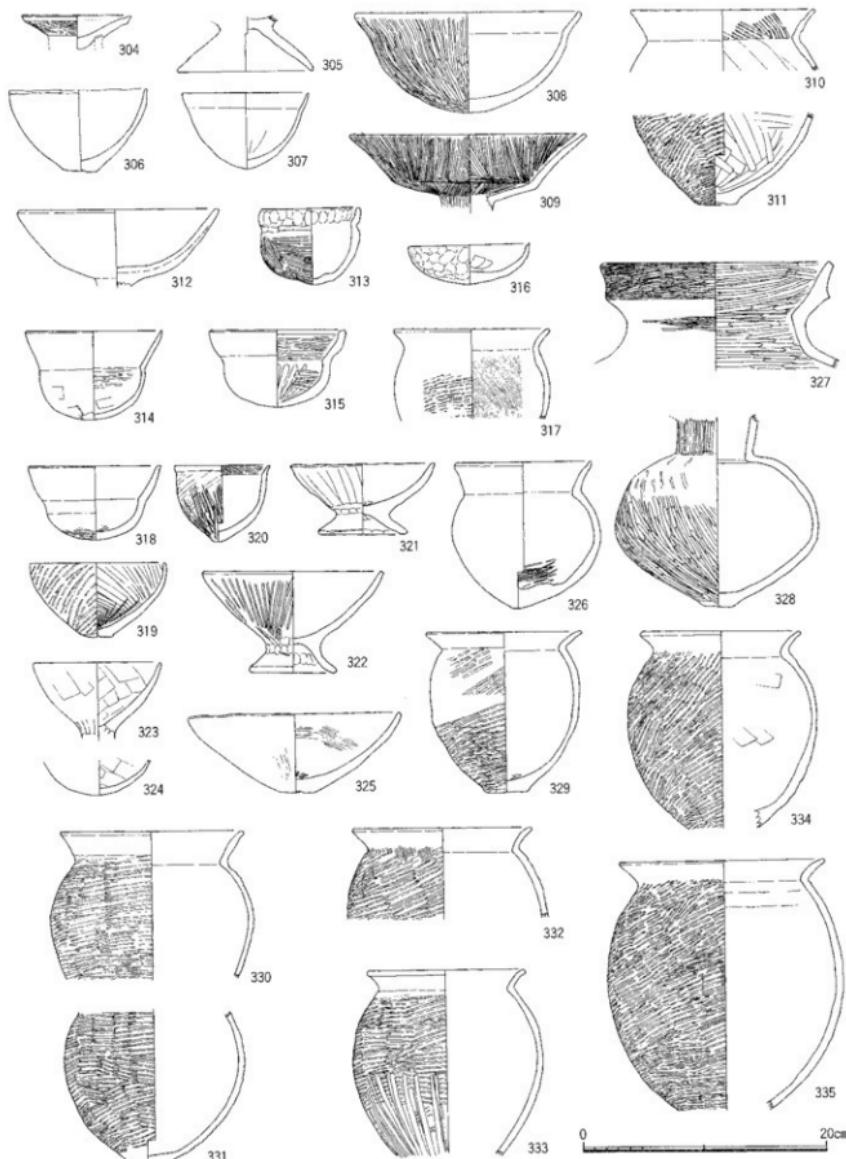


図175 SB108・109・110・112・114出土遺物実測図

(304~311: SB108 312: SB109 313~315: SB110 316~317: SB112 318~335: SB114)

参考（隣接する第20次調査で検出された竪穴住居）

**S B103 (図176)**

北辺部および東辺部が調査区の制約により未調査であるが、住居の平面形の復元は可能である。当住居は北側に2回拡張されている。

当初は南北3.8m、東西4.4m以上の規模で、南辺の中央部を除きベッド状の高まりを設けている。周壁溝は調査範囲内では全周する。その他の施設は、中央土坑、柱穴1基、土坑1基が検出された。ベッド状の高まりの内側から、柱穴が1基検出された。検出位置から、2本柱であると考えられる。西辺のベッド状の高まりからは、不定形の上坑が検出された。その後、南北4.7m、東西4.5m以上の規模に拡張し、さらに南北7.3m、東西6.5m以上に拡張している。当初の周壁溝は南辺部を除き新たに掘削されている。柱穴と中央土坑は継続して使用されたと考えられる。

**S B111 (図177)**

直径約7.0mの弧を描く溝が検出された。直上層の中世の耕作による影響を強く受け、5~10cm程度の深さが検出されたに過ぎない。切り合ひ関係から、S B113より新しい造構である。円形住居が消滅する時期であること、当遺跡内で円形の竪穴住居が検出されていないこと、周壁の立ち上がりが確認できないことなどから、積極的に竪穴住居であると判断しがたいが、平面形状から竪穴住居の可能性が高い。溝内より遺物が出土した。

**S B113 (図178)**

東辺部の一部はS B111、北西部は中世の水溜の掘削によって失われている。南東部は調査区外であるため、詳細は不明であるが、南北4.2m、東西5.1mの方形の住居と復元できる。南辺の中央部を除き、貼土によってベッド状の高まりを設けている。住居内からは、中央土坑、柱穴、土坑が検出された。中央土坑の壁面は全面焼上化しており、北側の床面から面上に広がった炭が検出され、炭を焼き出した痕跡と考えられる。柱穴は、ベッド状造構の内側の北東、南東両面のコーナー部付近から3基検出された。柱穴の検出位置から、4本柱であると考えられる。土坑は、ベッド状造構を設けていない南辺部から検出された。小型丸底壺2点が出土した。また、土坑の西側のベッド上からは小型丸底壺、高杯、壺の口縁部の破片が出土している。

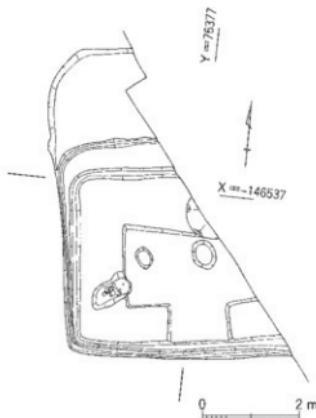


図176 S B103平・断面図

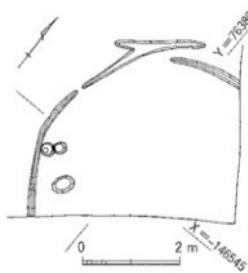


図177 S B111平・断面図

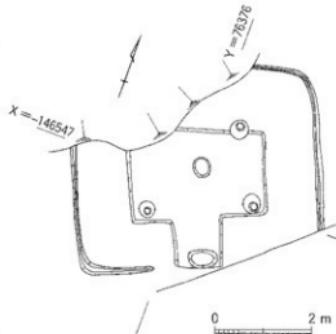


図178 S B113平・断面図

## 第3章 まとめ

### 第1節 兵庫松本遺跡における土器様相

#### 【目的】

兵庫松本遺跡で検出された遺構の大半は、庄内式併行期から布留式併行期のものである。当該時期の西摂地方の土器編年については、森田克行氏<sup>(1)</sup>の研究以降、森岡秀人氏<sup>(2)</sup>、竹村忠洋氏<sup>(3)</sup>の研究成果が公表されており、神戸市域の土器様相については、黒田恭正氏<sup>(4)</sup>により編年試案が提示されている。ここでは、先学の論を踏まえ、一括性が高い資料に検討を加えて当遺跡における土器様相を示すことを目的とする。

#### 【検討資料の選定】

出土状況から一括性が高いと考えられる遺構は、第4次～3調査S X101、第19次調査S B107・108・114である。S X101出土遺物は、浅い凹状の地形に面状に広がった状態で検出された。完形に近い形で検出された個体が多く、土器群と人頭大の甕群の出土範囲が分かれており、特定の場所に廻棄された状態であると考えられる。上層は、中世の耕作土であり、遺構面基盤層には遺物が含まれておらず、上下の土層からの混入ではなく、廻棄時の一括性を保っている遺構である。S B107出土遺物は、住居が埋没する過程で大量の遺物が検出された。住居の床面直上からの出土ではないため、当住居で使用された遺物とは言えない。しかし、先行するS B108の遺物出土層とは、S B107廻棄後に堆積した土壤が良好な間層となっていることと、直上層は中世以降の耕作土であることから、廻棄時の一括性は保たれていると考えられる。S B108出土遺物は、資料数が少ないが、床面直上もしくは、住居に伴う土坑等の遺構から出土した遺物であり、一括性は保たれていると考えられる。S B114出土遺物は、床面に接して検出された。後出するS B106の影響は、S B114の床面まで達していないことと、遺構面基盤層からは遺物の出土がないことから、住居廻棄期の状況を保っていると考えられる。

#### 【作業仮定】

上記の4遺構の前後関係は、S B108がS B107に先行することは、遺構の切り合い関係から確認できる。また、これまでの土器編年の研究成果により、S X101・S B114がS B107に先行することは明らかである。しかし、資料数の制約もあり、S X101・S B108・S B114の前後関係を提示することは困難である。そこで、S B107出土土器群に先行する土器群として、S X101・S B108・S B114出土遺物を同列に扱い（様相1）、S B107出土遺物（様相2）との対比を行うことにより、同一遺跡での各器種の推移を整理したい。

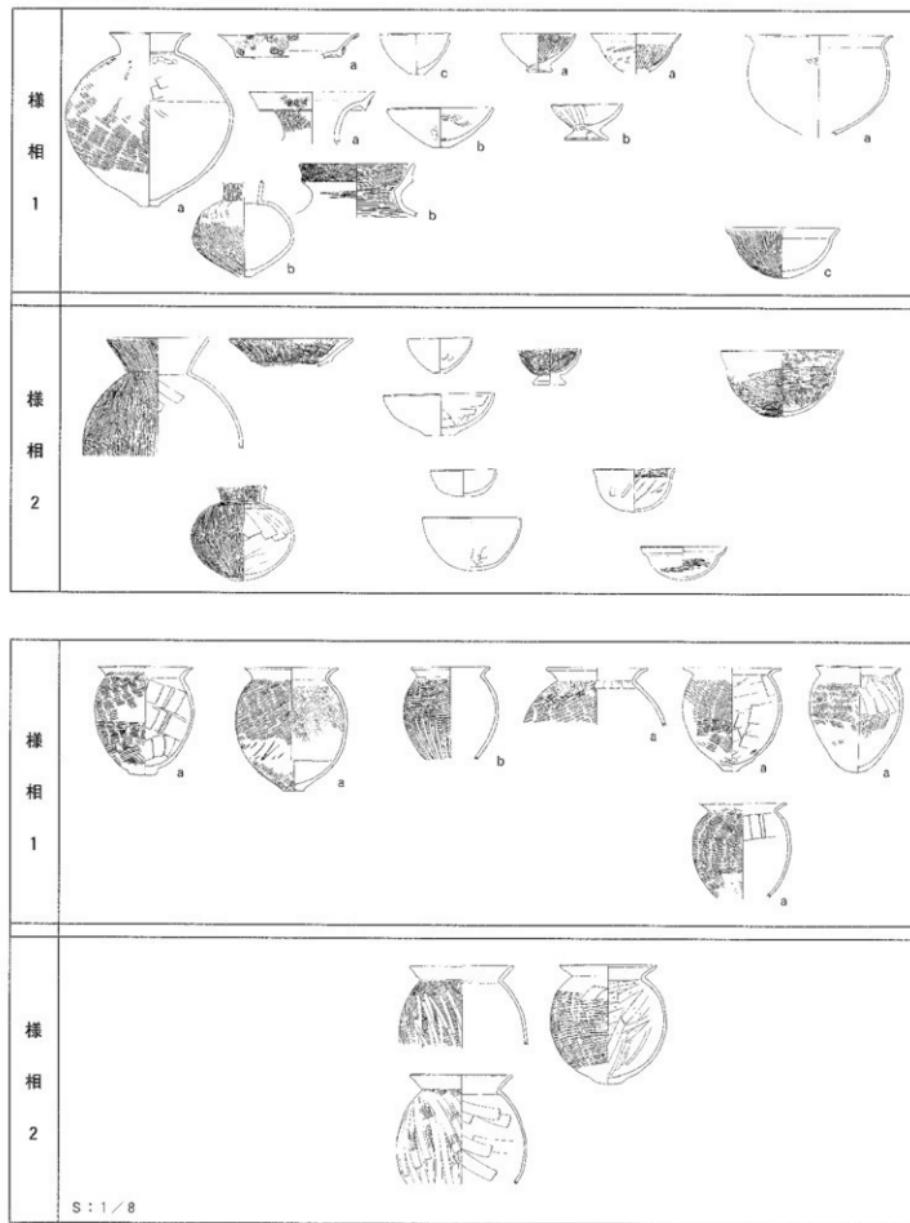
#### 【各器種の推移】

##### 壺

ミガキの多用化、底部の丸底化が確認できるが、資料数の制約もあり、器形変化の連続性を追えるものが少ない。様相2では、直線的に外傾する口縁部が特徴的である。

##### 鉢

体部が縁部まで立ち上がる器種では、平底や脚を持つ資料が様相1・2共に存在するが、丸底の資料は、様相1には存在しない。体部に口縁部が取り付く器種では、丸底を持つものが基本であり、様相1・2共に存在するが、小型の有段鉢は様相2で確認できる。大型品については様相2の資料が無く、検討できない。



a : 第4次 - 3 SX101    b : 第19次 SB114    c : 第19次 SB108    他は第19次 SB107上層

図179 兵庫松本遺跡の土器様相(1)

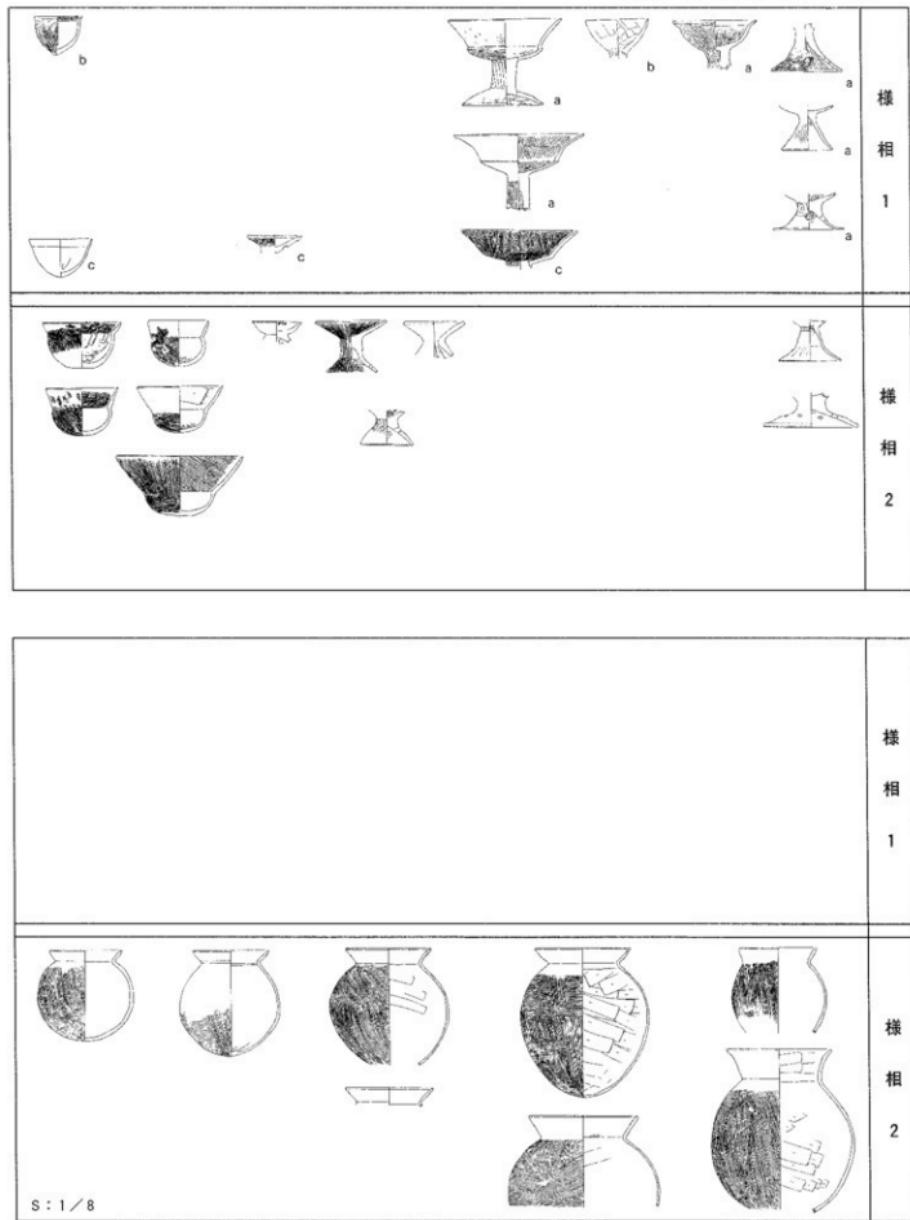


図180 兵庫松本遺跡の土器様相[2]

### 小型丸底壺

様相1では、尖底気味の資料が存在し、丸底は確認できない。様相2では小型丸底壺が確立するが、平底を残す資料も存在する。口縁部の発達具合も含め、形状はバラエティに富む。器壁は厚く、丁寧な調整は行われていない。

### 小型器台

様相1の資料数が少なく、様相2の資料の形状も多様で、形態変化を追うことができない。様相1の一括資料（SB108）に、上記の尖底気味の小型壺と小型器台が存在することは、小型丸底壺と器台のセット関係に先行する様相を示していると言える。

### 高杯

様相2の資料数が少なく、器形の推移については検討しがたい。様相1の資料は、杯部の内面に放射状のミガキを施すものが大半で、口縁部が発達し、体部高より高く、外反が強くなる器種が多い。

### 甕

最も出土量の多い器種である。V様式、庄内式土器、布留式土器の影響を受けたもののが存在する。

V様式形甕の資料は、様相1で顕著で、タタキ痕が明瞭に残る資料以外は確認できない。左上がりのタタキを施し、強く外方に聞く口縁端部を持つ磨塵型と呼ばれる資料や、矢羽状のタタキを持つ資料が、様相1に存在するが、様相2では細片でも確認できない。口縁部は、様相2で口縁部接合部の屈曲に伴う後線が明瞭であるものが多く、庄内式土器の影響を受け、端部を上方につまみ上げるもののが存在する。胴部は、タタキによる成形後に下半部に板ナデを施すものが、様相1、様相2共に存在し、様相2で主流となるハケ調整への過渡期の調整法と考えられる。底部は、様相1では、矢羽状のタタキを持つ資料以外は突出する平底である。様相2でも平底が確認できるが、底部の突出が低い資料が増え、タタキやケズリにより尖底や丸底を意識した資料がある。

口縁端部を上方につまみ上げ、球形の体部を持つ庄内式土器の影響を受けた資料と、口縁部が内湾して立ち上がり、端部の肥厚を特徴とする布留式土器の影響を受けた資料は、様相2に存在する。胎土は、生駒西麓の胎土を持つ資料が、様相2で数点確認されているが、それ以外は在地の胎土である。様相2においても、頸部内部の稜線が明瞭でない例は、長胴の体部にタテハケを施す資料に見られる。しかし、様相1に粗形となる器形は存在せず、出自は不明である。

### 【所属時期】

様相2は、布留型甕が少ないながらも存在し、小型丸底壺、小型の有段鉢の存在から布留式併行期の古段階に相当すると考えられる。様相1は、作業仮定に基づいた様相であり、所属時期の設定には幅を持たせる必要がある。口縁部が発達し、大きく外反する高杯の存在、小型丸底壺が存在せず、庄内式甕が存在しないことを重視して、庄内式併行期の中段階を基本とし、新段階を含む一群と捉えておきたい。

### 【小結】

2つの様相間の推移を概観したが、上器様相の変化を考える上で有効な高杯、壺の資料数が少なく、十分な検討は行えたとは言えない。特に様相1の細分を含めた再検討は、今後の課題である。しかし、様相1と様相2の間に共通する系譜を引く資料が少ないことは、資料数の制約を考慮しても、両様相間に何らかの隔たりが存在することは明らかである。それぞれの構造の性格の違いや、時期的な差を示しているものは、今回の検討では判断しがたいが、当遺跡の集落の推移を考える上での画期を示していると考えられる。

## 第2節 遺跡の変遷

### 1. 兵庫松本遺跡の集落変遷

当遺跡においては、区画街路及び個人住宅建設に伴う調査により遺跡の全体像を捉えうる資料がえられたものと考えられる。これらの成果をもとに時代毎に遺跡の変遷を考えてみる。

#### 縄文時代晚期

第4次～4調査、第12次～3・4調査で自然河道が検出された。埋土からは突帯文土器と滋賀里Ⅲb式の土器が出土した。他の調査でもわずかに突帯文土器が出土したが、明確な遺構は検出されていない。この時期は、自然河道の影響を受け不安定な土地条件であったため、集落の形成には至らなかったものと考えられる。また、当該時期の土器は上沢遺跡などでも出土しており、近隣に集落が存在したものと考えられる。

#### 弥生時代前期後半（図181）

ほぼ全域で遺構・遺物が確認された。主に土坑やピットなどが確認されたが、掘立柱建物・竪穴住居などが発見されておらず、実態は不明である。第4次～1調査で柱穴・溝などが比較的多く検出しており、集落の中心が西方に存在した可能性が高い。またこの調査では落ち込みからまとまって土器が出土した。第4次～3・7・9調査、第12次～1調査など事業地中央北～中央付近では円形土坑や溝・落ち込みなどが検出されたが、第19次調査では遺構及び包含層も検出されていない。おそらく中央～南部付近は落ち込みや湿地状地形が広がっており、その中に比較的安定した場所を選んで利用したものと考えられる。

出土遺物はヘラ描沈線、削出突帯・貼付突帯を施す土器が包含層や河道から検出された。ヘラ描沈線は6条以上のものがあり、沈線の多条化が進んだものが見られる。一方第4次～2調査で木葉文を施す土器片や、第12次～2調査で出土した明瞭な段を持つ壺などが出土しており、弥生時代前期前半～中頃の集落が近辺に存在していたと考えられる。遺物の中には、生駒西麓の胎土でつくられた土器が数点出土しており、河内地域と何らかの繋がりがあったことが判明した。また比較的大量のサヌカイト剥片が包含層などから出土したこともあり、石器の加工を行なっていた可能性が高い。

#### 弥生時代中期～後期（図182）

第4次～2・8調査で遺構・遺物が、第4次～7調査では遺物が確認された。しかし他の調査区ではほとんど検出されておらず、集落が一時縮小したものと考えられる。弥生時代中期中葉には当遺跡の北側に東山遺跡が存在した。遺跡の詳細は不明ではあるが、大量の遺物が確認されており比較的大規模な遺跡であったものと考えられる。また当遺跡東側には中期の撿点的な集落である楠・荒田町遺跡などが存在した。今回確認された遺構・遺物は、これらの遺跡に係るものである可能性が高い。今回出土した土器に摩滅が少なかつたことも傍証として挙げられる。なお、第19次調査第3遺構面の溝もこの時期に納まる可能性がある。

#### 弥生時代末～古墳時代初頭（図183）

この時期が兵庫松本遺跡の最盛期で、主に第1次調査、第4次～3・5・6次調査、第12次～1調査、第19次調査で多くの遺構・遺物が確認された。竪穴住居が20棟以上、掘立柱建物10棟の計30棟以上の建物跡が検出され、特に第17次～1調査・第19次調査で竪穴住居が密集して検出された。このことから集落の中心が現在の遺跡範囲のちょうど東半分にあったことが判明した。竪穴住居に関しては、第19次調査での調査成果から大きく4時期に分けられるようで、住居変遷の詳細については後述する。なお竪穴住居の中には第19次調査S B104のように炭化材を検出した明瞭な焼失住居や、第17次～1調査S B104のように床面やベッド状

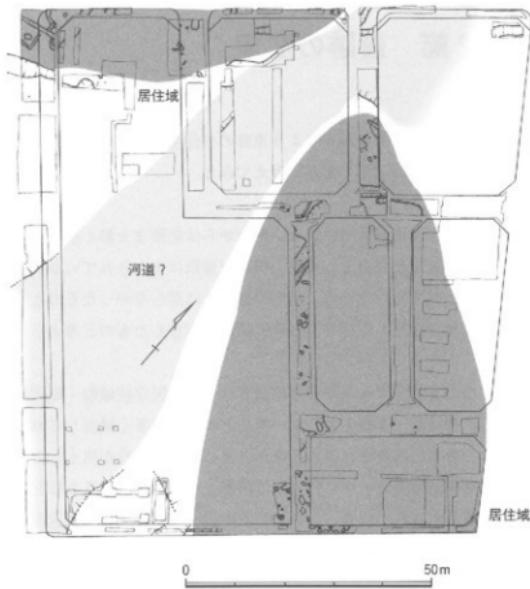


図181  
弥生時代前期遺構分布図

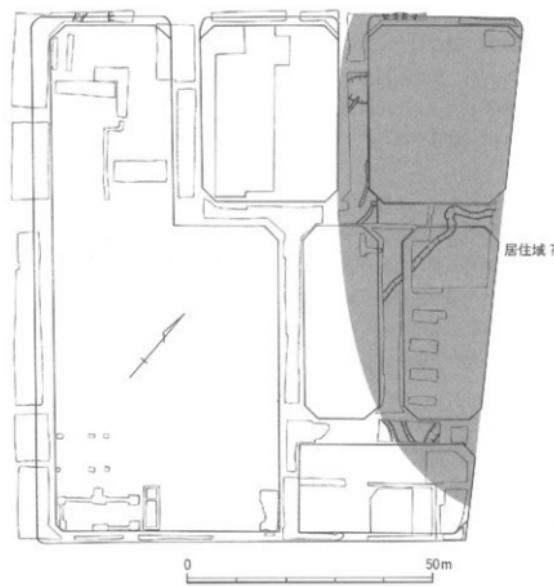


図182  
弥生時代中期～後期遺構分布図

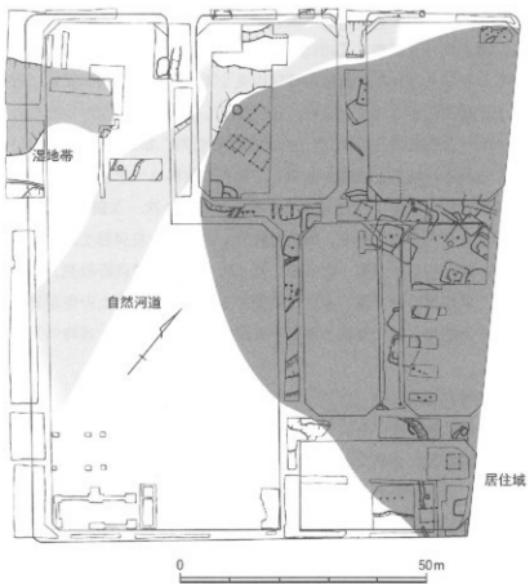


図183  
弥生時代末～  
古墳時代初頭遺構分布図

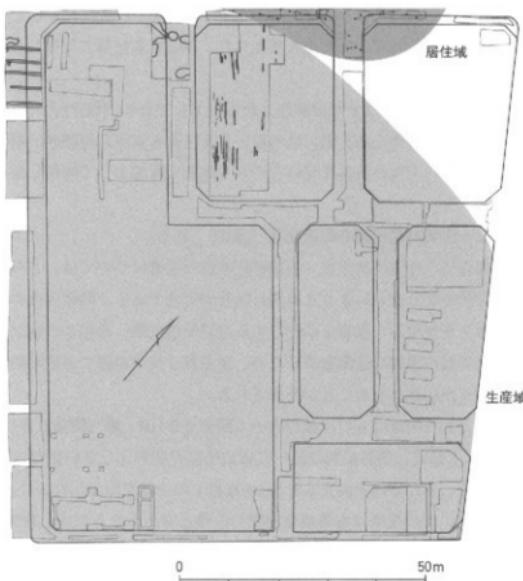


図184  
平安時代～  
鎌倉時代遺構分布図

遺構に炭や炭化材が散在するような焼失住居も検出された。また今回の調査ではこの時期の土器溜まりが2基検出され、第4次～3調査S X101が庄内式併行期中段階以降、第19次調査S B107上層土器溜まりが布留式併行期のものと考えられる。遺跡のはば中央を走る河道の西側は湿地に近い状況で、第3次～2調査でわずかにピットや溝が検出されているが、居住域としての利用はなかったものと考えられる。

遺物は第4次～3調査のS X101出土の庄内式併行期、第19次調査のS B107上層土器溜まり出土の布留式併行期と考えられる一括出土遺物がある。これらの資料は六甲山南麓地域の当該時期の土器編年上重要な資料といえ、詳細は第3章第1節の通りである。また第4次～3調査S X101では、上沢遺跡や御蔵遺跡でも出土した矢羽状タキを施す甕や、御蔵遺跡でも出土した皮袋形土器など希少遺物が確認された。第2次調査で生駒西麓の胎土の布留式甕・広口甕、第4次～2調査で淡路型甕、第4次～6調査で西部瀬戸内地域の影響を受けた二重口縁の甕・甕、第19次調査でも生駒西麓の胎土の甕が出土しており、比較的小規模な集落である兵庫松本遺跡でも他の地域の要素を確認することができ、当時の集落間の交流範囲を考える上で重要な資料を得た。

#### 平安時代～鎌倉時代（図184）

建物などの遺構は第4次～7調査を中心に主に調査対象地北部で確認された。第1次調査や第4次～1調査では多数の鈍溝が検出された。前者は北西～南東方向、後者は北東～西南方向のもので、ちょうど第4次～9調査地辺りで地割がかわるものと考えられる。またほぼ事業地全体に須恵器・土師器を含む耕土層が確認されており、大半が耕作地であると考えられる。

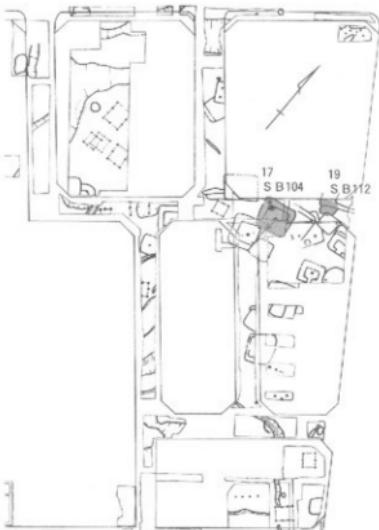
一方第4次～2調査・第4次～7調査では柱穴が多数検出されており、本報告では柵列と報告したが、第4次～7調査で検出されたS A101・102は柱穴の間隔やその位置関係などから大型の掘立柱建物として復元できる可能性があり、隣接して検出されたS B101はその付帯施設とも考えられる。これらが建物群としてとられることができれば、屋敷地と考えられ、現在の農村部で見られるような散村形態の集落を想定できる。

これ以降も、陶器や土師器などが旧耕作土から出土しており、平安時代～鎌倉時代と変わらず耕作地であったと考えられる。また耕作土の上面に洪水砂と考えられる黄灰色極細砂～細砂が均一に堆積する状況が確認されており、旧淡川の氾濫の被害を受けながらも連続と耕地として利用し続けたようである。

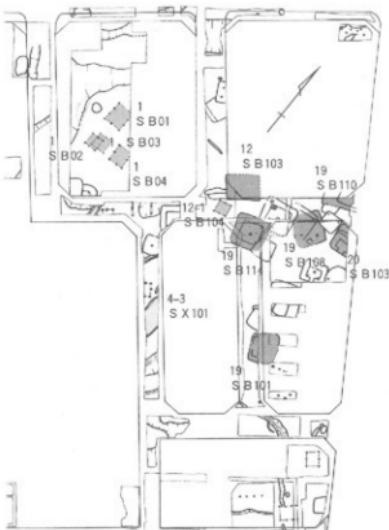
#### 2. 弥生時代末～古墳時代初頭の住居変遷（図185・表4）

今回の発掘調査により弥生時代末～古墳時代初頭の遺構については、さらに詳細な時期変遷をおさえることができた。住居の切り合により4時期に区分が可能である。時期区分の名称については、前節で設定した様相1・様相2を使用し、様相1に先行する時期を前段階、様相2以降を後段階とする。なお、遺物の出土が少なく時期判別の困難な遺構も多いため、現在解り得る範囲で当該時期の変遷を記述する。今後の調査の進展により修正が必要になることが予想される。

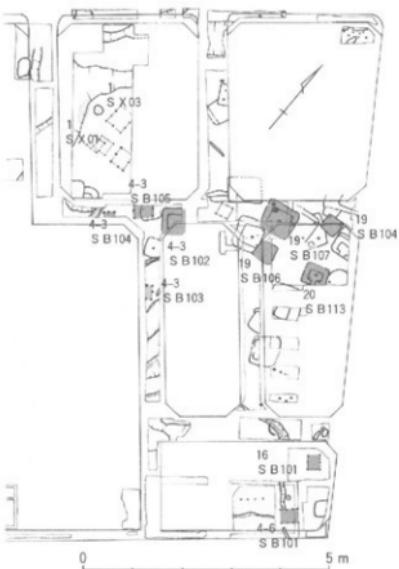
前段階の遺構として明確なものは第17次～1調査S B104・第19調査S B112がある。第17次～1調査S B104から出土した土器は、加飾傾向の強い二重口縁甕や球形化しない甕が出土し、様相1よりやや先行するものと考えられる。また第19次調査S B112は様相1の土器が出上したS B110により削平を受けているためこの段階においていた。この段階は集落成立初期の段階と考えられるため、住居の数も少ない。前者S B104は1辺約7mで、ベッド状遺構をもつ比較的大型の4本柱の竪穴住居であるのに対し、後者のS B112は1辺約3mとかなり小型の2本柱の竪穴住居である。両者の規模の差は、竪穴住居の機能差を反映している可能



## 1. 前段階



## 2. 機相 1



3. 機相 2

	前段沿	移相1	移相2	後段排
壁穴住居	17-1 : SB154 17 : SB112	⇒ 19 : SB114 ⇒ 19 : SB108 ⇒ 19 : SB110 ⇒ 19 : SB101 ⇒ 19 : SB103	19 : SB106 19 : SB107 19 : SB104 19 : SB108 19 : SB113 4-2 : SB102	19 : SB111
獨立柱建物	1 : SB01 1 : SB02 1 : SB03 1 : SB04 12-1 : SB106		4-3 : SB103 4-3 : SB104 4-3 : SB105 4-6 : SB101 16 : SB101	
土器置き		4-3 : SX101		19 : SB107上端 1 : SX01 1 : SX03

表1 標識の記述は、次数：意味名（例、表19を複数 S.B107は19：S.B107）

題2 指點時間分社、基準資料

### 第3 管理组织与机制

表4 残生時代末～古墳時代初頭の遺構変遷

図185 弥生時代末～古墳時代初頭遺構変遷図

性があるが、今回の調査ではそれを示すものは確認されなかった。

様相1の段階になると、住居が飛躍的に増加する。第12次-1調査SB103、第19次調査SB101・SB108・SB110・SB114、第20次調査SB103がある。ただし、第12次-1調査SB103については、様相1の高壙が出土したが、時期判別可能な遺物が他にはない。また第20次調査SB103についても拡張を行なった形跡がある。そのため両者は時期が前後する可能性がある。この時期の堅穴住居は前段階と異なり1辺6～7mとほぼ大きさが均一化するようである。ベッド状造構をもつ住居は4棟と比較的高い割合を示す。特に兵庫松本遺跡ではベッド状造構の南辺中央に土坑を掘り込むものがこの時期に出現する。土坑は大量の小礫が入るものや土器がまとめて出土するものなどがあるが、造構の性格は不明である。住居は第12次-1調査SB103・第19次調査SB108を除き、地形に合わせおよそ南北方向を主軸に築かれる。そのことから第1次調査や第12次-1調査で検出した掘立柱建物も地形に合わせて築かれているため、様相1もしくは前段階に属する可能性が高いと考えられる。そして第4次-3調査SX101は、これらの住居に伴う土器廃棄遺構と考えられる。ただし、この遺構からは住居からあまり出土しなかった器台や高壙などの供膳形態の土器が出土しており、何らかの祭祀に伴う遺構である可能性もある。

様相2の段階になどても依然住居は多く、さらに居住域を南東部に拡張していくようである。堅穴住居では第4次-3調査SB102、第19次調査SB104・SB106・SB107・SB109、第20次調査SB113、掘立柱建物では第4次-3調査SB103・SB104・SB105、第4次-6調査SB101、第16次調査SB101がある。堅穴住居は第19次調査SB104・SB106、第20次調査SB113などの1辺5m未満の比較的小型の住居と、第4次-3調査SB102、第19次調査SB107などの1辺6mを越える大型の住居に分けられる。ベッド状造構は両者に存在しており、ベッド状造構の設置が必ずしも住居の大きさに左右されるものではないことが解る。一方掘立柱建物についてはほとんどが庄内式併行期の遺物を含む包含層の上面で検出され、出土遺物に須恵器が含まれないことからこの様相2に納まるものと考えられる。建物の大きさは、調査区の制約により全体の規模がわかるものが少ないが、規模が明らかなものから判断すれば、10m<sup>2</sup>前後の比較的小型の建物であったと考えられる。また、先述したように地形に合わせたものと、現在の地割に合わせたものがある。様相2の段階のものは後者で、様相2で地割に変化があったものと考えられる。このことは、様相1と様相2を区分する上で重要な要素と捉えることができ、上器の検討による画期と連動しているものと考えられる。そして第1次調査SX01・SX03や第19次調査SB107上層の土器溜まりはこれらの住居に伴う土器廃棄もしくは祭祀遺構と考えられる。

後段階と考えられるものは第20次調査SB111があるが、周壁溝と考えられるものが確認されているだけで、他に時期の明確な遺構は検出されておらず、詳細は不明である。集落が大きく縮小したことが解る。第4次-3調査などで検出された上層の包含層からは布留式併行期中頃の遺物が確認されており、集落の解体の時期は遅くとも古墳時代前期の間で納まるものと考えられる。

## 〔註〕

- (1) 森田克行「摂津地域」『弥生土器の様式と編年』近畿編II 寺沢廉・森岡秀人編 木耳社 1990
- (2) 森岡秀人「摂津における上器交流拠点の性格—真正弥生土器と庄内期を比べて—」『庄内式土器研究』XXI 庄内式土器研究会 1999
- (3) 竹村忠洋 「摂津地域における古墳出現期前後の土器様相」「古墳出現期の土器と実年代」シンポジウム資料集（財）大阪府文化財センター 2003
- (4) 黒田恭正 「神戸市域（六甲山南麓地域）における弥生時代第V様式～布留式併行期の土器様相」「森南町遺跡発掘調査報告書－第1・2次調査－」 神戸市教育委員会 2005刊行予定

## 〔参考〕

- 寺沢廉編『矢部遺跡』奈良県立橿原考古学研究所 1986

# 写 真 図 版



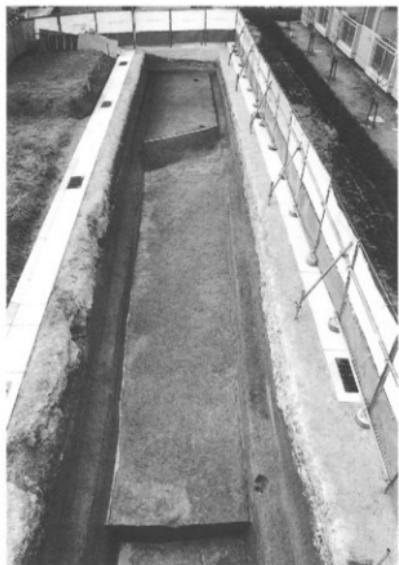
写真図版 1  
第2次-1・2調査



1 第2次-1調査I区北部（北東から）



2 第2次-1調査I区全景（南東から）



3 第2次-1調査II区全景（南東から）



4 第2次-2調査地全景（南西から）